

平成28年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I

# 新たなスポーツ価値意識の 多面的な評価指標の開発

— 第3報 —

公益財団法人 日本体育協会  
スポーツ医・科学専門委員会



## 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発

### － 第 3 報 －

- 研究班長** 木村 和彦（早稲田大学）
- 研究班員** 菊 幸一（筑波大学），作野 誠一（早稲田大学），霜島 広樹（早稲田大学），  
中西 純司（立命館大学），藤田 雅文（鳴門教育大学），松岡 宏高（早稲田大学），  
森丘 保典（日本大学）
- 協力班員** 足立名津美（早稲田大学大学院），醍醐 笑部（早稲田大学スポーツ科学研究センター），  
茂木 宏子（筑波大学大学院），望月 拓実（早稲田大学スポーツ科学研究センター），  
本間 崇教（早稲田大学大学院）
- 日本体育協会スポーツ科学研究室**  
鈴木なつ未，石塚 創也

## 目 次

はじめに	木村 和彦	3
第1章 「するスポーツ」の価値意識評価尺度の開発： 個人的価値意識と社会的価値意識に焦点をあてて	霜島 広樹ほか	8
第2章 みるスポーツの価値意識に関する研究	本間 崇教ほか	24
第3章 ささえるスポーツの価値意識に関する研究	望月 拓実ほか	33
第4章 3年間のまとめと今後の研究課題： 「する」スポーツ価値意識研究の展望と課題	中西 純司	40
第5章 3年間のまとめと今後の研究課題： 「みる」スポーツ価値意識研究の課題と展望	菊 幸一	48
第6章 ささえるスポーツの価値意識に関する研究のまとめと今後の研究課題	藤田 雅文	59
ま と め	木村 和彦	61
資 料		63



# はじめに

木村 和彦<sup>1)</sup>

## 1. 研究目的

これまでのスポーツの価値（価値観、価値意識）に関する研究が対象としてきたスポーツは「する」スポーツや一部の競技者に限定的であり、スポーツ基本法をはじめとする新たなスポーツ諸政策に謳われているスポーツの価値とは必ずしも一致していないとの問題意識から、スポーツの価値（価値意識）に関する包括的なレビュー、近年のスポーツ政策やスポーツ教育等におけるスポーツの価値の概念的検討（1年目）に基づき、理論的な研究を継続しながら、実証的なレベルで研究を促進に向けて、スポーツ価値意識の多面的な評価指標を開発するための予備調査を実施した（2年目）。最終3年目（平成28年度）は、「する」スポーツと「支える」スポーツの価値意識に関する追加的な予備調査を実施するとともに、「みる」スポーツを加えた3つの参与形態別に、スポーツ価値意識評価尺度を開発するために本調査を実施した。同時に、スポーツ価値意識の全体像を可視化するためにチャート図で示した。さらにスポーツ価値意識のスポーツ行動予測因としての有用性をさぐるために、参与形態別に、スポーツ価値意識を独立変数として、スポーツへの興味、スポーツへの関与、QOL評価等を従属変数とする分析を行っ

た。

その結果、「する」スポーツに関しては、個人的価値（5因子、18項目）、社会的価値（4因子、17項目）、みるスポーツに関しては、個人的価値（5因子、12項目）、社会的価値（1因子、6項目）、支えるスポーツに関しては、7因子、30項目からなるスポーツ価値意識評価尺度（通常版）を開発することができた。また、スポーツ政策や行政評価の実践に使いやすくするために、因子の数を変えずに調査項目数を約半分にするという方針のもとに、因子負荷量を基準にして調査項目数を少なくしたスポーツ価値意識評価尺度（簡易版）を開発した。

## 2. 第3報の構成

第1章（霜島・木村論文）は、「する」スポーツに関するスポーツ価値意識評価尺度の開発結果を報告するとともに、価値意識を独立変数、「スポーツへの興味」、「スポーツへの関与強化」、「スポーツ実施意欲」および「QOL評価」を従属変数とした重回帰分析の結果を報告している。その結果、図1のように、多くの個人的な価値が、スポーツへの興味、関与、実施意欲やQOLに関係していること、社会的価値では、社会・生活向上、経済、国際、教育とすべてのすべての要因との関係がみられ

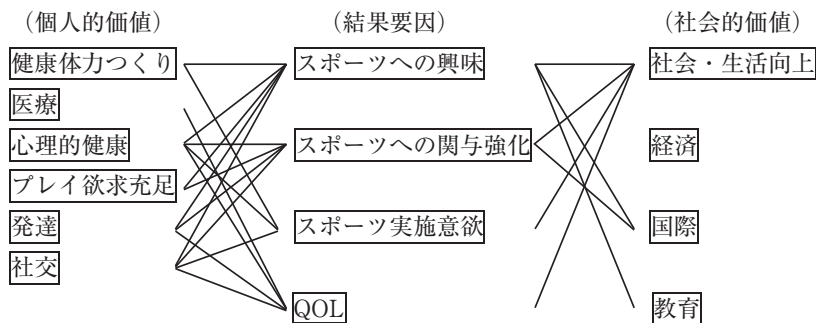


図1 「する」スポーツ価値意識の分析結果

1) 早稲田大学

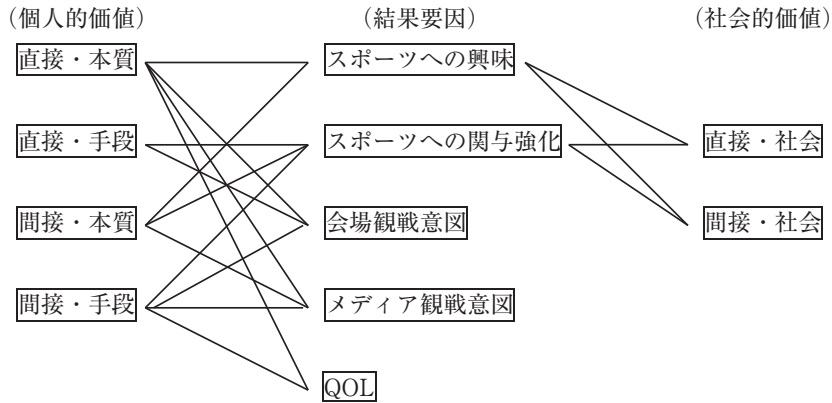
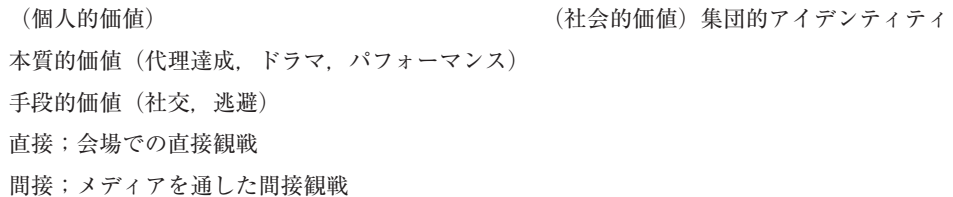


図2 「みる」スポーツ価値意識の分析結果

※社会的価値と会場観戦意図・QOLの関係は分析していない



た。しかし「する」スポーツの個人的価値の中で、本質的価値を位置づけられるプレイ欲求充足価値がスポーツ実施意欲やQOL評価に影響を与えていないことが明らかになった。「する」スポーツの本質的な価値と想定される価値意識が、スポーツ実施意欲やQOL評価と関係がないということをもとに理解すればよいのか、中西(第4章)が指摘するように、狭義のスポーツと健康のための運動の違いなのか、あるいは菊(第5章)が指摘するように、日本人のスポーツ価値意識の形成過程における歴史社会的な特性なのか、スポーツ価値意識研究の新たな研究課題として注目すべき結果である。

第2章(本間・松岡論文)は、「みる」スポーツに関する価値意識評価尺度の開発結果を報告するとともに、価値意識を独立変数、「スポーツへの興味」、「スポーツへの関与強化」、「スポーツ実践意欲」、「会場観戦意図」、「メディア観戦意図」および「QOL評価」を従属変数とした重回帰分析の結果を報告している。

その結果、図2に示すように、直接観戦のみならず、メディアを通じた間接観戦に関するスポー

ツ価値意識(個人的価値)がスポーツへの興味、スポーツへの関与強化やQOL評価の影響要因になっていることが明らかとなった。また「みる」スポーツの社会的価値意識は、直接・間接観戦のどちらもスポーツへの興味や関与強化へ影響を与える可能性があることが示唆された。

第3章(望月・作野論文)は、「支える」スポーツに関するスポーツ価値意識評価尺度の開発結果を報告するとともに、価値意識を独立変数、「スポーツへの興味」、「スポーツへの関与強化」、「スポーツ実施意欲」、「スポーツボランティア実施意欲」および「QOL評価」を従属変数とした重回帰分析の結果を報告している。その結果、自己改革、地域奉仕、能力経験活用の価値意識が、すべての要因に影響を与える可能性が明らかとなった。とりわけ、この3つの価値意識の高い人ほど、QOL評価が高くなる可能性があるという結果は、スポーツボランティアを活用するスポーツ団体が、スポーツボランティアに対する非経済的報酬を考えるというマネジメント課題に対して有用な情報を与えてくれる。

第5章(中西論文)は、「する」スポーツの価

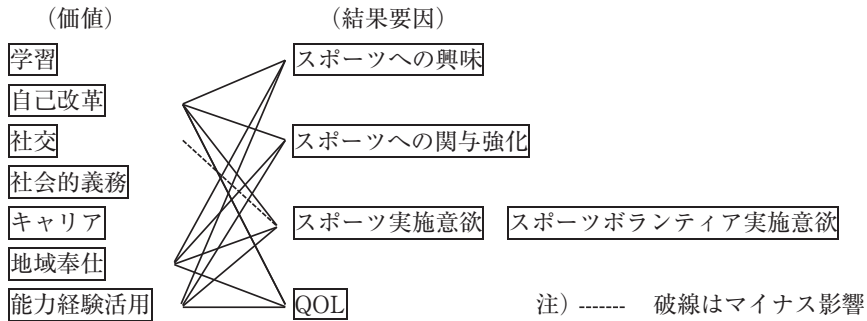


図3 「支える」スポーツ価値意識の分析結果

価値意識に関する3年間の研究を総括し、今後の展望と課題を報告している。今後の研究課題として、以下の4点を指摘する。

①スポーツ概念の定義の問題：スポーツ価値意識を研究する場合、その前提は「スポーツとは何か」といったスポーツ概念を明確に捉えておく必要がある。なぜならば、野球やサッカー、バレーボールなどの「プレイ欲求の充足」を求めて自発的に行われる運動、いわゆる「スポーツ」をしている人と、軽い体操や散歩・ウォーキング、トレーニングやフィットネス、転倒予防運動などの人間生活上のある種の「必要充足」のために行われる運動（健康・体力づくり運動）をしている人とは、運動やスポーツに対する価値意識が大きく異なることが容易に予測できるからである。（中西）

②すでに運動・スポーツを実践している人びとの価値意識研究：第3報（第1章）では、「スポーツへの関与」という、スポーツをする・みる・ささえるといった関わり方の強化の合計点を従属変数としたが、スポーツをする・みる・ささえるといった多様な関わり方が日常生活にどの程度定着されているかを意味する「スポーツ生活」の現状（「する・みる・ささえる」という豊かなスポーツ生活、「する・みる」「する・ささえる」「みる・ささえる」という中程度のスポーツ生活、「する」のみという運動生活、「みる」のみや「ささえる」のみのスポーツ生活など）によってスポーツ価値意識にどのような違いが見られるのかについてのスポーツ生活分析も必要であると思われる。（中西）

③「ライフステージ・スポーツ論」に基づく「する」スポーツ価値意識研究の展開：「ライフステー

ジに応じたスポーツ関与（する・みる・ささえる）」を促進していくためには、ライフステージ別（幼児期－小・中・高校期－大学等・就職期－結婚・出産期－高齢期など）に「する」スポーツ価値意識の違いを詳細に分析していくことが喫緊の課題であると考えられる。（中西）

④スポーツの本質的価値研究：スポーツのコア・バリューとは何か。①第3報（第1章）の研究結果では、「プレイ欲求充足」という本質的価値（「する」スポーツのコア・バリューと想定していたはずが）がスポーツ実施意欲やQOLには影響を及ぼさないということであった。現代社会においてはもはや、スポーツには「プレイ欲求充足」以上のコア・バリューがあるのか、それともスポーツの外的価値の方が日本人にとっては有効なのか、こうした研究課題への挑戦が求められている（中西）。

第5章（菊論文）は、「みる」スポーツの価値意識に関する3年間の研究を総括し、今後の展望と課題を報告している。現代社会に求められる「みる」スポーツの価値への探求は、個人的なレベルの心理的効用がどのような文化的価値や社会的価値に洗練され、それが発育発達期におけるどのような教育的価値によって形成される可能性が明らかになることであると指摘した上で、まずは、本研究の目的であった「みる」スポーツ価値意識評価尺度に関する一般化の第1段階は終了たと評価している。今後の研究課題と展望として、以下の2点を指摘している。

①「みる」スポーツの個人的価値尺度と社会的価値尺度の関連性を視野に入れた多面的な因子構

成や尺度項目の開発：「みる」スポーツの価値意識研究の目的の1つは、その面白さや楽しさといったところから始まって、それがどのような望ましい社会的価値の方向性につながっていくのかを明らかにしようとする問題意識が重要だと考えるからである。この問題意識は、冒頭で述べた社会にとってむしろ脅威にもなりかねない「みる」スポーツの価値を生み出す危険性を踏まえて、その経済的価値や政治的価値等といった外在的・手段的価値のあり様を考えていくことにつながっている（菊）。

②日本人における本質的価値と手段的価値の形成：果たして日本人にとって手段的価値と考える「価値」と同様な「価値」として受けとめられているのかどうか、あるいはそのような効用や影響力を持つものとして血肉化＝エートス化されている（されてきた）のかどうか、ということがあげられるのではないだろうか。英語で「本質的価値」とはintrinsic value、すなわち「内在化」されエートス化された価値（いわば、手段的・道具的な価値基準からみれば価値としてさえ認識されないような「無価値」な価値）であり、これはあらゆる外在化された価値の原点となっているという意味である（菊）。最後に、「みる」スポーツの価値意識尺度を構成する目的は、スポーツ文化全体を考える上でも、また当該社会とスポーツ文化のあり様を相互の問題として考えていく上でも、極めて重要な意義を有していることが理解できるとして、3年間の研究を通じて、あらためてスポーツ価値意識評価尺度の開発の意義を再確認している。

第6章（藤田論文）は、「支える」スポーツの価値意識に関する3年間の研究を総括し、今後の展望と課題を報告している。3カ年を通して、スポーツを「ささえる」人々の価値意識を調査研究した結果、「学習」「自己改革」「社交」「社会的義務」「キャリア」「地域奉仕」「能力・経験活用」と命名された7因子30項目が精査され、人生の幸福感を尺度とする「クオリティ・オブ・ライフ」（quality of life, QOL）との関係では、「自己改革」が最も強い規定力を有しており、「地域奉仕」「能力・経験活用」も有意な規定要因であることが確

認されたと評価している、今後の研究課題としては、以下の2点を指摘している。

①国際大会で活動するボランティアスタッフをいかに確保し、どのようにして適材適所に配置し、どのような研修を行うのか等、ボランティアマネジメントの課題解決に向けての研究。

②非日常的なイベント・ボランティアのみに研究対象を焦点化し、年齢・性別・資質の属性によって、ささえるスポーツの価値意識に相違があるのか、彼らが抱く期待に対して、どのような活動を提供すれば「自己変革」をもたらすことができるのかの検討。

まとめ（木村論文）では、第1章から第6章までを概観して、以下の2つの課題を提示した。

①スポーツ価値意識に関する基礎研究の継続  
中西（第4章）、菊（第5章）が指摘しているように、「する」「みる」「支える」個別の価値意識評価尺度についてはスタート地点に立つことができたが、個人的価値（individual value）と社会的価値（social value）、本質的価値（intrinsic value）と手段的価値（instrumental value）など、価値意識間の関係とダイナミズムに関する研究を通じて、幅広い調査研究を継続、蓄積していくことによって、スポーツ価値意識の構造や具体的な評価尺度を洗練していく必要がある。

また今回の研究では、当初想定していたスポーツ文化の制度的価値（institutional value）にアプローチすることはできなかった。ただし「する」や「みる」スポーツの社会的価値意識や「支える」スポーツの価値意識が、わが国のスポーツ制度を構成するスポーツ行政やスポーツ団体（指導者を含む）、学校体育の評価（価値）と大いに関係していることが予想される。今後の研究課題とした。

②スポーツ価値意識評価尺度を援用した応用研究

一つは、スポーツの価値意識に関する国際比較研究である、スポーツ価値意識は、人々のスポーツ参与（する、みる、支える等）を方向づけるものである、各国のスポーツ参与の実態を説明する要因をスポーツ価値意識から解明する、それらが各国のスポーツに係わる制度や教育制度とどのよ



別表 スポーツ価値意識評価尺度（通常版）の構成

参与形態 価値レベル	するスポーツ N = 1030		みるスポーツ N = 1030		支えるスポーツ N = 618 (スポーツボランティア経験者)
	個人的価値	社会的価値	個人的価値	社会的価値	
本質的価値	1 因子 ・プレイ欲求充足 (3項目)	4 因子 ・社会生活向上 ・経済 ・国際 ・教育 (17項目)	3 因子 ・代理達成 ・ドラマ ・パフォーマンス (8項目)	1 因子 ・集団的アイデンティティ (6項目)	7 因子 ・学習 ・自己改革 ・社交 ・社会的義務 ・キャリア ・地域奉仕 ・能力・経験活用 (30項目)
手段的価値	4 因子 ・健康体力づくり ・医療 ・心理的健康 ・発達 ・社交 (15項目)		2 因子 ・社交 ・逃避 (4項目)		

うに関係しているのかを明らかにすることは、わが国におけるこれからのスポーツ制度や教育制度のあり様を考える上での重要な情報を提供してくれるだろう。

二つ目は、オリンピックなどメガ・スポーツイベントのスポーツ価値意識への影響研究である。わが国でも、2019、2020と国際的なメガ・スポーツイベントの開催が予定されている。そこでは、施設建設やインフラ整備、開催運営などに巨額の公費が投入されることになる。とりわけ低い経済成長、人口減少下にあるわが国では、公費投入に見合った成果（効率）が厳しく問われることになる。その場合、施設やインフラなどのハードだけ

でなく、ソフト・レガシーとしてのスポーツ文化の発展、その基盤となるスポーツ価値意識の高揚への影響を評価することはイベントの成果として（主催者の納税者に対する説明責任として）重要になると考える。

最後に、資料1として「スポーツ価値意識評価尺度（通常版）」と資料2として「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）」を掲載した。簡易版は、スポーツ政策や行政評価等の実践の場において、より使いやすくするために、通常版の約半分の調査項目数にするという方針のもと、因子数を変えずに因子負荷量を基準として選択した項目から構成されている。

# 第1章 「するスポーツ」の価値意識評価尺度の開発： 個人的価値意識と社会的価値意識に焦点をあてて

霜島 広樹<sup>1)</sup> 望月 拓実<sup>1)</sup> 木村 和彦<sup>1)</sup>

## 1. 本章の目的

「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発」第2報でも示されている通り、第3報では第2報の結果を踏まえて、より妥当性・信頼性の担保された「スポーツ価値意識尺度」の作成を行う。本章では、第2報までと同様に、「するスポーツ」の個人的価値意識、および社会的価値意識を測定する尺度を開発し、これらの妥当性と信頼性を確認する。

## 2. 研究方法

本研究では、「するスポーツ」の個人的価値意識尺度〔以下、個人的価値意識尺度(する)〕、および、「するスポーツ」社会的価値意識尺度〔以下、社会的価値意識尺度(する)〕を、先行研究から作成した上で、それらの信頼性と妥当性について、統計的に検討を行う。本章は研究1、研究2に大別され、研究1では個人的価値意識(する)、研究2では社会的価値意識尺度(する)について検討する。

各々の研究は予備調査と本調査から構成される。予備調査では尺度を構成する項目の作成、本調査では予備調査を踏まえて作成された尺度の信頼性と妥当性の検討、および価値意識がスポーツへの興味、スポーツへの関与、今後のスポーツ実施意欲、QOLといった結果要因との関係性を明らかにし、予測的妥当性を検討することに主眼を置くものとする。

## 3. 研究1 個人的価値意識尺度(する)

### 3.1 予備調査

#### 3.1.1 質問項目の作成(個人的価値意識)

第2報で作成した「するスポーツ」の個人的

表1 Milneにおけるスポーツ参加動機の構成

因子分析結果	動機の構成
心理的健康	自己実現, 自己評価, 価値形成, ストレス解消, 美的
スポーツニーズ	競争, 攻撃性, 冒険 (risk-taking), 達成
社会的ニーズ	社会関係, 技能獲得
体力ニーズ	体力

価値意識において、「本質的価値」の部分が、非常に曖昧な結果となったことから、研究グループ内で検討を行い、第2報での菊・茂木(2016)、Milne(1999)のスポーツ参加動機を参考に尺度を修正することにした(本質的価値とは、「面白さ」の源泉としての、競争、克服、達成)。

### 3.1.2 分析データの収集

予備調査の実施にあたり、W大学スポーツ科学部における授業の受講生に対する質問紙調査からデータを取得することとした。調査票は作成された「するスポーツ」の個人的価値評価尺度、および社会的価値評価尺度(後述)から構成された。調査は2016年7月25日に実施された。回答においては、調査票の冒頭に、回答の任意性、途中中断の権利、プライバシーの保護、不利益からの保護に関する内容を記述し、口頭でも説明を行った。

### 3.1.3 分析結果

有効標本数は147であった。取得したデータを用い、個人的価値評価尺度24項目に対し探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。因子負荷量は.40を基準とし、因子負荷量がこれに満たなかった項目(Q3, 4, 10, 11, 14, 22)および、因子を構成する項目が1項目のみになったQ5を削除し、再び探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した。その結果、Q24

1) 早稲田大学

表2 「するスポーツ」の個人的価値評価尺度（修正版）

概念名	項目	項目番号 (調査票)
プレイ欲求充足 (本質的価値)	攻撃性を発揮できることが面白い	5
	目標を達成することに夢中になることが面白い	7
	できなかったことができるようになることが面白い	8
	危険や犠牲があっても自分のすべてをかけることが面白い	11
	よりよいライバルと競うほど面白くなる	14
	競争に夢中になることが面白い	20
健康・体力づくり (手段的価値)	体力を向上させることができる	1
	健康維持・増進につながる	2
	体力を維持することができる	16
医療 (手段的価値)	病気を予防することができる	6
	病気の治療に役立つ	9
	美容や肥満解消につながる	22
心理的健康・発達 (手段的価値)	自分の可能性を引き出すことができる	3
	ストレスの発散ができる	4
	周囲から認められることができる	10
	人として成長することに役立つ	18
	思いやりのある人間になることができる	23
	自己表現の機会となる	24
社交 (手段的価値)	社会的なマナーを身につけることができる	12
	人と交流する機会になる	13
	人間関係を改善することができる	15
	新たな人との出会いの機会になる	17
	協調性を養うことができる	19
	仲間と一緒に時間を過ごすことができる	21

の因子負荷量が.40を満たさなかったため、これを削除し、再度、探索的因子分析（主因子法、プロマックス）を実施した。

結果、16項目5因子の単純構造となり、累積寄与率は60.0%となった（表3）。なお、個人的価値意識（する）、社会的価値意識（する）に関する項目の中に、天井効果が確認された項目が一部確認された。

なお、上記の5因子16項目に対する確認的因子分析を行った所、CMIN/DF=1.635、GFI=.880、AGFI=.827、CFI=.934、RMSEA=.066という結果となり、概ね良好な適合度となった（小塩、2008）。

### 3.1.4 本調査に向けて

分析結果、および作成された質問項目に対し、

研究グループでディスカッションを行ったところ、ストレス解消をはじめとする心理的健康に関する項目を追加すること、体型の改善に関する項目を追加することの必要性について検討の余地があることが議論された。よって、本調査では、これらの点を踏まえ研究を行っていくこととした。

## 3.2 本調査

### 3.2.1 スポーツの個人的価値意識尺度

3.1.4で示したように、ストレス解消をはじめとする心理的健康に関する項目、体型の改善に関する項目を追加することの必要性に検討の余地があったことから、研究グループ内でディスカッションを行い、予備調査で作成されたスポーツの個人的価値意識尺度（5因子16項目）に5項目を追加した。心理的健康に関する項目の作成は、

表3 分析結果（探索的因子分析 主因子法 プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	F5
<b>F1 発達（手段的価値）4項目</b>					
18. 人として成長することに役立つ	.844				
12. 社会的なマナーを身につけることができる	.767				
19. 協調性を養うことができる	.684				
23. 思いやりのある人間になることができる	.471				
<b>F2 プレイ欲求充足（本質的価値）3項目</b>					
7. 目標を達成することに夢中になることが面白い		.821			
20. 競争に夢中になることが面白い		.777			
8. できなかったことができるようになることが面白い		.769			
<b>F3 健康・体力づくり（手段的価値）3項目</b>					
2. 健康維持・増進につながる			.864		
1. 体力を向上させることができる			.683		
16. 体力を維持することができる			.637		
<b>F4 社交（手段的価値）4項目</b>					
17. 新たな人との出会いの機会になる				.786	
13. 人と交流する機会になる				.551	
15. 人間関係を改善することができる				.469	
21. 仲間と一緒に時間を過ごすことができる				.437	
<b>F5 医療（手段的価値）2項目</b>					
9. 病気の治療に役立つ					.813
6. 病気を予防することができる					.526
	F1	1.00	.586	.767	
因子間相関	F2	.586	1.00	.600	
	F3	.767	.600	1.00	

McDonald et al. (2002), および霜島・木村 (2013) における, スポーツへの参加動機尺度を参考に作成を行った。

### 3.2.2 調査方法

分析データの取得はインターネット調査（ウェブ画面上で回答を求める方式）にて実施した。具体的には、株式会社マクロミルのモニター会員に対し、性別および年齢区分（20代、30代、40代、50代、60代の5区分）を用いた10群に均等に分布するように、各群から100名ずつ抽出するよう依頼した。調査は2016年9月21日～22日に実施された。

### 3.2.3 質問項目

質問項目は、運動、スポーツの実施経験、個人的価値意識(する)、社会的価値意識(する)、スポー

ツへの興味、スポーツへの関与、今後1年におけるスポーツへの実施意欲、QOLに関する項目から構成された。調査にあたり、作成した個人的価値意識の質問項目を乱数ジェネレータ（Business Application）によりランダムに並び替えた上で、「スポーツをすることは、あなたにとってどのような価値があると思いますか?」といった形で、「強くそう思う」から、「全くそう思わない」の7段階リッカート尺度を用いて回答を求めた。なお、ウェブ画面上での回答は、システムの都合上「1. 強くそう思う～7. 全くそう思わない」と通常とは逆向きの数字で回答する方法を用いた。ゆえに、分析時点では、「1. 強くそう思う」を「7. 強くそう思う」と変換した上で分析することとした。一方で、スポーツへの興味、スポーツへの関与に関しては、「スポーツをすることを通じて、スポーツをすること、みること、支えることに対してど

表4 個人的価値意識尺度（する）の項目群

項目	概念名	追加項目
1 体力を向上させることができる	体力	
2 人間関係を改善することができる	社交	
3 体型の維持・改善に役立つ	体力	○
4 目標を達成することに夢中になることが面白い	プレイ欲求充足	
5 病気を予防することができる	医療	
6 ストレスの発散ができる	心理的健康	○
7 できなかったことができるようになることが面白い	プレイ欲求充足	
8 病気の治療に役立つ	医療	
9 人として成長することに役立つ	発達	
10 社会的なマナーを身につけることができる	発達	
11 人と交流する機会になる	社交	
12 健康維持・増進につながる	体力	
13 体力を維持することができる	体力	
14 新たな人との出会いの機会になる	社交	
15 不安やイライラを解消することに役立つ	心理的健康	○
16 協調性を養うことができる	発達	
17 競争に夢中になることが面白い	プレイ欲求充足	
18 仲間と一緒に時間を過ごすことができる	社交	
19 肥満の解消につながる	体力	○
20 思いやりのある人間になることができる	発達	
21 日々のプレッシャーから解放される	心理的健康	○

のように結びつくと思いますか?」といった形で、上記と同様に7段階リッカート尺度で質問を行った。

また、今後1年におけるスポーツへの実施意欲に関しては「今後1年間は、過去1年間よりもスポーツをする機会を多くしたい」、QOLに関しては「全般的にみて、わたしは自分のことをとても幸せであると考えている」、「わたしは、自分と同世代の人と比べて、自分をより幸福な人間であると考えている」といった項目から構成され、上記の項目群と同様に、「強くそう思う」から「全くそう思わない」の7段階リッカート尺度で質問を行った。

また、回答の任意性、途中中断の権利、プライバシーの保護を担保するために、WEB調査であることを踏まえ、質問項目において個人が特定される情報については質問をしないよう留意して、調査を行った。

### 3.3 結果（尺度の検討）

#### 3.3.1 サンプルの属性

インターネット調査を行った結果、20代の男女、30代の男女、40代の男女、50代の男女、60代の男女、各群（5×2）から103名ずつ回答が得られ、サンプル総数は1030となった。そして、第2報p.12でも示されたように、調査実施においてダミー項目を用いた上で、回答時間を測定し極端に回答時間が短かったものを排除する工夫を行うことで、サンプルの質の向上を図った。具体的には、「私はスポーツが好きである」という項目に対し、「私はスポーツが好きでない」という項目を設け、両方に同じ数字で回答したもの（両方とも「4. どちらとも言えない」と回答したものは除く）を除外し、その上で回答時間が5分未満であったものを除外した。結果、サンプルサイズは595となり、これを本調査での分析データとして使用することとした（注1）。なお、個人的価値意識（する）に関する項目で天井効果、床効果が確認されたも

表5 尺度における信頼性係数、因子負荷量、AVE

概念名	項目	$\alpha$	FL	AVE
健康・体力づくり	1. 体力を向上させることができる		.77	
	3. 体型の維持・改善に役立つ	.86	.84	.62
	13. 体力を維持することができる		.84	
	19. 肥満の解消につながる		.69	
医療	5. 病気を予防することができる	.74	.87	.64
	8. 病気の治療に役立つ		.73	
心理的健康	6. ストレスの発散ができる		.83	
	15. 不安やイライラを解消することに役立つ	.87	.87	.66
	21. 日々のプレッシャーから解放される		.73	
プレイ欲求充足	4. 目標を達成することに夢中になることが面白い		.84	
	7. できなかったことができるようになることが面白い	.83	.83	.66
	17. 競争に夢中になることが面白い		.75	
発達	10. 社会的なマナーを身につけることができる		.82	
	16. 協調性を養うことができる	.88	.88	.70
	20. 思いやりのある人間になることができる		.81	
社交	2. 人間関係を改善することができる		.70	
	14. 新たな人との出会いの機会になる	.82	.80	.60
	18. 仲間と一緒に時間を過ごすことができる		.83	

のは存在しなかった。

### 3.3.2 確認的因子分析結果

得られたデータを用いて、尺度の妥当性と信頼性の検討を行った。まず、統計ソフトAmosにて確認的因子分析を行った上で、収束的妥当性および弁別的妥当性を検討するために因子負荷量、AVE、相関係数を算出した。また、尺度の信頼性はCronbach  $\alpha$  係数を算出することにより検討した。

まず、確認的因子分析であるが、一般的にモデルの適合度指標はGFI, AGFI, CFI, RMSEAの値によって検討され、GFI, AGFI, CFIに関しては、一般的には.90, RMSEAに関しては.10が基準として用いられる。これらのことを踏まえた上でモデルのあてはまりについて検討を行った。21項目6因子に対し、確認的因子分析を行った結果、GFI=.838, AGFI=.785, CFI=.899, RMSEA=.096となり、GFI, AGFI, CFIの値は基準を満たさなかった。そこで、狩野(2002)を参考にしながら、因子に対する内容的な妥当性、項目削除後の適合度の値、標準偏回帰係数の値を考慮しな

がら不要な項目について検討を行った。結果「9: 人として成長することに役立つ」、「11: 人と交流する機会になる」、「12: 健康維持・増進につながる」を削除することとし、再度確認的因子分析を行った。結果、GFI=.896, AGFI=.851, CFI=.933, RMSEA=.082となり適合度に大幅な改善が見られ、GFI, AGFIはやや基準を満たさなかったものの、適合指標は全体的におおむね良好な値を示した。

続いて、収束的妥当性と弁別的妥当性の検討であるが、各変数AVEを.50以上を基準に妥当性の検討を行った結果(Fornell and Larcker, 1981)、全ての変数において基準を上回る結果となった(表5)。また、弁別的妥当性の検討を行うため、因子間の相関係数の2乗と各因子間のAVEを比較した。結果、社交と心理的健康、社交とスポーツ価値、社交と発達の間では弁別的妥当性は確認されなかったが、それ以外の因子のAVEについては、他の因子との相関係数の2乗より高い値を示したことから、それらの弁別的妥当性は確認された(表6)。

また、Cronbach  $\alpha$  係数は全ての因子に関して

表6 因子間相関係数の平方とAVE

	健康	医療	心理	スポ	発達	社交
健康・体力づくり	.62a					
医療	.42	.64b				
心理的健康	.32	.45	.66c			
プレイ欲求充足	.36	.33	.64	.66d		
発達	.23	.32	.60	.62	.70e	
社交	.31	.20	.63	.73	.86	.60f

a. 健康・体力づくりのAVE b. 医療のAVE c. 心理的健康のAVE d. スポーツ価値のAVE  
e. 発達のAVE f. 社交のAVE

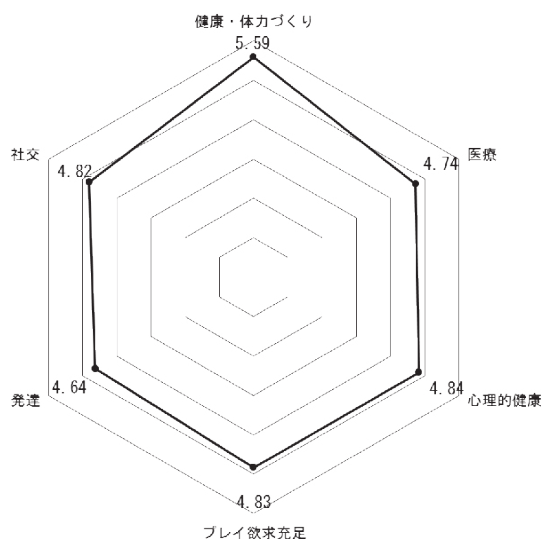


図1 個人的価値意識(する)における各因子の程度を示したレーダーチャート

基準値である.70を超える結果となり、一定の信頼性を有していることが示された。これらの結果より、個人的価値意識尺度(する)は再検討の余地を残しつつも、一定の信頼性と妥当性を持った尺度であることが示された。

また、因子分析の結果から抽出された6つの因子に対して、各因子の程度を算出した上でレーダーチャート化し(最大7点、最小1点)、図1に示した(注2)。

### 3.4 価値意識(する)が従属変数に及ぼす影響

#### 3.4.1 価値意識(する)とスポーツへの興味の関係

個人的価値意識(する)を独立変数、スポーツ

表7 重回帰分析結果(スポーツへの興味)

独立変数	$\beta$	t
健康・体力づくり	.082	2.17*
医療	-.021	-.53
心理的健康	.304	6.34***
プレイ欲求充足	.171	3.53***
発達	.143	2.70**
社交	.124	2.26*
F値	90.64***	
R <sup>2</sup> 乗	.480	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.475	

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05

への興味を従属変数として重回帰分析を行った。スポーツへの興味に関しては、「スポーツをすること」、「みること」、「ささえること」に対しての「あなたの興味をかき立てることができる」という計3項目の素点の合計をスポーツへの興味の得点として分析を行った(注3)。

重回帰分析の結果であるが、「医療」を除く全ての独立変数において、従属変数である「スポーツへの興味」への影響が有意であった。「健康・体力づくり」、「心理的健康」、「スポーツ価値」、「発達」、「社交」といった価値意識が高いほど、スポーツへの興味も高いことが示された。従属変数を「スポーツへの興味」とした場合、調整済みR<sup>2</sup>乗が約50%近い値を示し、価値意識がスポーツへの興味に強い説明力を持つことが示された。

#### 3.4.2 価値意識とスポーツへの関わりの関係

さらに、従属変数を「スポーツへの関わり」と

表8 重回帰分析結果（スポーツへの関与）

	$\beta$	t
独立変数		
健康・体力づくり	.050	1.36
医療	-.049	-1.28
心理的健康	.269	5.73***
プレイ欲求充足	.144	3.03**
発達	.179	3.46**
社交	.144	2.68**
F値	98.80***	
R <sup>2</sup> 乗	.502	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.497	

\*\*\* p &lt; .001 \*\* p &lt; .01 \* p &lt; .05

して重回帰分析を行った。スポーツへの関わりは「スポーツをすること」、「みること」、「ささえること」に対しての「あなたの関わりを強めることができる」という計3項目の素点の合計をスポーツへの関わりの得点として分析を行った。

分析の結果、「健康・体力づくり」、「医療」を除く全ての独立変数において、従属変数である「スポーツへの関わり」への影響が有意であった。また、調整済みR<sup>2</sup>乗が約50%近い値を示し、価値意識が強い説明力を持つことが示された。

### 3.4.3 価値意識と今後1年間のスポーツ実施意欲の関係

さらに、従属変数を「今後1年間のスポーツ実施意欲」として重回帰分析を行った。

分析の結果、「健康・体力づくり」、「心理的健康」、「社交」が従属変数への影響が有意であった。「健康・体力づくり」、「心理的健康」、「社交」といった価値意識が高いほど、今後1年間のスポーツ実施意欲も高いことが示された。なお、調整済みR<sup>2</sup>乗は約27%であった。

### 3.4.4 価値意識と今後1年間のスポーツ実施意欲の関係

さらに、従属変数を「QOL」として重回帰分析を行った。「全般的にみて、わたしは自分のことをとても幸せであると考えている」、「わたしは、自分と同世代の人と比べて、自分をより幸福な人間であると考えている」といった2項目における

表9 重回帰分析結果（スポーツ実施意欲）

	$\beta$	t
独立変数		
健康・体力づくり	.164	3.68***
医療	.011	.24
心理的健康	.289	5.13***
プレイ欲求充足	.046	.81
発達	-.045	-.72
社交	.161	2.50*
F値	38.15***	
R <sup>2</sup> 乗	.280	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.273	

\*\*\* p &lt; .001 \*\* p &lt; .01 \* p &lt; .05

表10 重回帰分析結果（QOL）

	$\beta$	t
独立変数		
健康・体力づくり	-.053	-1.10
医療	.102	2.03*
心理的健康	.138	2.27*
プレイ欲求充足	-.056	-.90
発達	.165	2.45**
社交	.144	2.05*
F値	18.30***	
R <sup>2</sup> 乗	.157	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.149	

\*\*\* p &lt; .001 \*\* p &lt; .01 \* p &lt; .05

素点の合計を、QOLの得点として分析を行った。分析の結果、「健康・体力づくり」、「プレイ欲求充足」を除く全ての独立変数において、従属変数への影響が有意であった。「医療」、「心理的健康」、「発達」、「社交」といった価値意識が高いほど、QOLも高いことが示された。なお、調整済みR<sup>2</sup>乗は約15%であった。

### 3.5 考察（個人的価値意識尺度）

研究1では、個人的価値意識尺度（する）の妥当性と信頼性を確認した。分析の結果、作成した尺度には構成概念妥当性、弁別的妥当性において、やや再検討が必要な点も見られたが、適合度指標はおおむね良好な値を示し、高い信頼性も確認された。また、結果変数への一定の影響も確認されたことから、尺度の予測的な妥当性も担保され



た。

因子を構成する項目について再検討を行い、項目の文言を修正することで、これらの課題が解消され、より高い妥当性をもった測定尺度となることが予想される。これらの点を踏まえて、今後の研究の継続が期待される。

なお、スポーツ価値意識と結果変数との関係であるが、スポーツ実施意欲を従属変数とした場合、プレイ欲求充足はスポーツ実施意欲には影響を及ぼさず、健康・体力づくり、心理的健康、社交はスポーツ実施意欲を高めるといった結果となった。現代の日本人においてはプレイ欲求充足といったスポーツの本質的価値よりも、健康・体力づくりや心理的健康、社交といった手段的価値の方がスポーツ実施において影響力を持つ傾向にあるということを示していると考えられる。

また、QOLを従属変数とした場合においても、プレイ欲求充足はQOLには影響を及ぼさず、医療、心理的健康、発達、社交はQOLに影響を及ぼすといった結果となった。この結果は、人々の健康や日々の生活に対するスポーツの手段的価値の有効性を示していると捉えられる。その一方で、今回の調査ではスポーツの実施意欲やQOLに影響を及ぼしていないという結果となったプレイ欲求充足（スポーツの本質的な価値）は、スポーツの実施やスポーツの便益にどのように関わってくるのか、今回の結果が現代における日本人特有のものなのかどうかも踏まえ、検討していく必要があると考えられる。また、プレイ欲求充足（本質的価値）は今回の研究では1因子で構成されているが、多次元的にこれらを評価し、従属変数との関係を検討する必要もあるといえよう。

## 4. 研究2 社会的価値意識尺度（する）

### 4.1 予備調査

#### 4.1.1 質問項目の作成

社会的価値意識尺度においては、第2報における「6. まとめ」で指摘されている文頭表現の修正に加え、質問項目自体の表現にも若干の修正が必要と考えられた。また、質問項目数自体が多く、1因子内における項目数が極端に多いなどいくつ

か問題点が挙げられる。そこで、まずは質問項目数の問題を優先して解決する方向でスポーツマネジメントを専門とする教員ならびに協力班員との協議を行ったうえで、質問項目の削除および追加、表現の修正を行った（表11）。具体的には、社会・生活向上価値因子において「社会貢献ができる」、「地域の活性化につながる」、「地域活動への参加が促進する」、「地域コミュニティの連帯感が高まる」、「学校・地域・家庭をつなぐ有効な手段となる」を削除したうえで、「まちづくりに役立つ」を追加した。次に、経済的価値因子において「健康寿命を延ばすことができる」を追加した。つづいて、国際的価値因子において「国際貢献ができる」を追加した。最後に、教育的価値因子から「青少年に対する地域の教育力を再構築できる」、「子どもが豊かな学校生活を経験できる」を削除した。結果、31項目4因子の構成で予備調査を実施することとした。

#### 4.1.2 分析データの収集

分析データは、研究1において示したように、W大学スポーツ科学部における授業の受講生に対する質問紙調査から取得した。

#### 4.1.3 分析結果

有効標本数は147であった。得られたデータを用いて、尺度の妥当性と信頼性の検討を行った。統計ソフトAmosにて確認的因子分析を行った上で、収束的妥当性および弁別的妥当性を検討するために因子負荷量、AVE、相関係数を算出した。また、尺度の信頼性はCronbach  $\alpha$  係数を算出することにより検討した。

まず、確認的因子分析であるが、一般的にモデルの適合度指標はGFI、AGFI、CFI、RMSEAの値によって検討され、GFI、AGFI、CFIに関しては、一般的には.90、RMSEAに関しては.10が基準として用いられる（小塩，2008）。これらのことを踏まえた上でモデルのあてはまりについて検討を行った。31項目4因子に対する確認的因子分析の結果、GFI=.634 AGFI=.576 CFI=.877 RMSEA=.114となり適合指標の値は不良であった。「社会・生活向上価値」が12項目と依然とし

表11 スポーツの社会的価値意識尺度項目群（予備調査）

項目	概念名
3 生活の質が向上する	社会・生活向上価値
4 生活に張りが出る	
28 高齢者の社会参加活動を促す	
18 子どもの活動発表の場を提供できる	
2 地域活動への参加が促進される	
27 仲間と触れ合える	
22 家族の絆を深めることができる	
1 地域の絆を深めることができる	
20 仲間を作ることができる	
31 高齢者や障害者と触れ合うことができる	
16 地域や国の活性化につながる	
10 まちづくりに役立つ	
23 地域コミュニティ再生に役立つ	
30 経済発展により影響を及ぼす	
19 雇用創出により影響を及ぼす	
15 産業の発展に役立つ	
13 医療費の抑制につながる	
14 健康寿命を延ばすことができる	
12 新しい観光誘致に役立つ	
21 旅行者の増加につながる	国際的価値
17 国際交流ができる	
11 国際貢献ができる	
8 異文化理解につながる	教育的価値
25 青少年の健全育成を促す	
6 子どもの生きる力を育成する	
26 教育力を再構築できる	
24 生涯学習につながる	
9 リーダーの育成に役立つ	
29 豊かな心を養うことができる	
7 他人を思いやる心を養うことができる	
5 望ましい社会態度を養うことができる	

て多くの項目で構成されており、意味が重複する概念が含まれている可能性などが考えられたため、因子に対する内容的な妥当性、項目削除後の適合度の値、標準偏回帰係数の値を考慮しながら不要な項目について検討を行った。結果、社会・生活向上価値因子から「4. 生活に張りが出る」、 「23. 地域コミュニティ再生に役立つ」、 「1. 地域の絆を深めることができる」、 「20. 仲間を作ることができる」、 「31. 高齢者や障害者と触れ合うことができる」、 「2. 地域活動への参加が促進さ

れる」を削除した。次に、経済的価値因子から「14. 健康寿命を延ばすことができる」「12. 新しい観光誘致に役立つ」「15. 産業の発展に役立つ」を削除した。つづいて、国際的価値因子から「17. 国際交流ができる」を削除した。最後に、教育的価値因子から「25. 青少年の健全育成を促す」、 「24. 生涯学習につながる」、 「7. 他人を思いやる心を養うことができる」を削除した。結果、GFI=.793 AGFI=.726 CFI=.940 RMSEA=.102 とモデル適合度に若干の改善がみられた。しかし、依然と

表12 尺度における信頼性係数、因子負荷量、AVE（予備調査）

概念名	項目	$\alpha$	FL	AVE
社会・生活向上価値	生活の質が向上する		.89	
	まちづくりに役立つ		.87	
	地域の活性化につながる		.91	
	家族の絆を深めることができる	.96	.89	.79
	仲間と触れ合える		.88	
	高齢者の社会参加活動を促す		.89	
	子どもの活動発表の場を提供できる		.89	
経済的価値	医療費の抑制につながる		.77	
	旅行者の増加につながる		.85	
	経済発展により影響を及ぼす	.91	.89	.71
	雇用創出により影響を及ぼす		.85	
国際的価値	異文化理解につながる	.85	.87	.74
	国際貢献ができる		.85	
教育的価値	子どもの生きる力を育成する		.92	
	リーダーの育成に役立つ		.88	
	地域の教育力を再構築できる	.95	.87	.77
	豊かな心を養うことができる		.85	
	望ましい社会態度を養うことができる		.88	

表13 因子間相関係数の平方とAVE（予備調査）

	社会・生活向上価値	経済的価値	国際的価値	教育的価値
社会・生活向上価値	.79a			
経済的価値	.90	.71b		
国際的価値	.88	.86	.74c	
教育的価値	.96	.86	.86	.77d

a : 社会・生活向上価値のAVE    b : 経済的価値のAVE    c : 国際的価値のAVE    d : 教育的価値のAVE

してモデル適合度は基準値を満たしていないことに加え、1因子における項目数のバランスが悪いなど内容的妥当性にも課題が残る結果となった。

#### 4.1.4 本調査に向けて

予備調査では第2報で挙げられた問題点を解決するに至らなかった。その要因として、予備調査を行った対象が大学生に限定されており、社会的価値意識は個人的価値より質問に対する解釈が困難であることから回答に偏りがあった可能性がある。また、文頭表現・文末表現の修正を行っていない状態であるため、本調査では回答の年齢区分をある程度調整したうえで、文頭表現・文末表現の修正を行ったうえで調査を行うこととした。

## 4.2 本調査

### 4.2.1 スポーツの社会的価値尺度

社会的価値意識尺度本調査においては、第2報における「6.まとめ」で指摘されている文頭表現・文末表現に若干の修正が必要と考えられる。そこで、研究班員ならびに協力班員との協議を行ったうえで、質問項目に若干の修正を行った（表14）。

### 4.2.2 調査方法

分析データの取得はインターネット調査（ウェブ画面上で回答を求める方式）にて実施した。具体的には、株式会社マクロミルのモニター会員に対し、性別および年齢区分（20代、30代、40代、50代、60代の5区分）を用いた10群に均等に分布するように、各群から100名ずつ抽出するよう依

表14 社会的価値意識尺度（する）の項目群（本調査）

項目	概念名
25 地域住民や国民の生活の質が向上する	社会・生活向上価値
19 地域住民や国民の生活に張りが出る	
26 地域や国における高齢者の社会参加活動を促す	
11 地域や国における子どもの活動発表の場を提供できる	
9 地域活動への参加が促進される	
4 地域住民や国民が仲間と触れ合う機会を創出する	
10 地域住民や国民における家族の絆を深めることができる	
2 地域住民や国民の絆を深めることができる	
23 地域住民や国民の仲間を作る機会を創出する	
24 地域住民や国民が高齢者や障害者と触れ合う機会を創出する	
3 地域や国の活性化につながる	
16 地域コミュニティ再生に役立つ	経済的価値
27 地域や国の経済発展により影響を及ぼす	
17 地域や国の雇用創出により影響を及ぼす	
6 地域や国における産業の発展に役立つ	
21 地域や国における医療費の抑制につながる	
29 地域住民や国民の健康寿命を延ばすことができる	
30 地域や国における新しい観光誘致に役立つ	
15 地域や国における旅行者の増加につながる	国際的価値
5 地域住民や国民の国際交流が促進される	
1 地域住民や国民における国際交流の機会を創出する	
20 地域や国が国際貢献をする機会を創出する	
18 地域住民や国民の異文化理解につながる	教育的価値
7 地域や国における青少年の健全育成を促す	
28 地域や国における子どもの生きる力を育成する	
13 地域や国の教育力を再構築できる	
22 地域住民や国民の生涯学習につながる	
14 地域や国におけるリーダーの育成に役立つ	
12 地域住民や国民の豊かな心を養うことができる	
31 地域住民や国民の他人を思いやる心を養うことができる	
8 地域住民や国民の望ましい社会態度を養うことができる	

頼した。調査は2016年9月21日～22日に実施された。

#### 4.2.3 質問項目

質問項目は、研究1と同じく運動、スポーツの実施経験、個人的価値意識（する）、社会的価値意識（する）、スポーツへの興味、スポーツへの関与、今後1年におけるスポーツへの実施意欲、QOLに関する項目から構成された。調査にあたり、作成した個人的価値意識の質問項目を乱数

ジェネレータ（Business Application）によりランダムに並び替えた上で、「スポーツをすることは、あなたにとってどのような価値があると思いますか?」といった形で、「強くそう思う」から、「全くそう思わない」の7段階リッカート尺度を用いて回答を求めた。なお、ウェブ画面上での回答は、システムの都合上「1. 強くそう思う～7. 全くそう思わない」と通常とは逆向きの数字で回答する方法を用いた。ゆえに、分析時点では、「1. 強くそう思う」を「7. 強くそう思う」と変換し

た上で分析することとした。一方で、スポーツへの興味、スポーツへの関与に関しては、「スポーツをすることを通じて、スポーツをすること、みること、支えることに対してどのように結びつくと思いますか?」といった形で、上記と同様に7段階リッカート尺度で質問を行った。

また、今後1年におけるスポーツへの実施意欲に関しては「今後1年間は、過去1年間よりもスポーツをする機会を多くしたい」、QOLに関しては「全般的にみて、わたしは自分のことをとても幸せであると考えている」、「わたしは、自分と同世代の人と比べて、自分をより幸福な人間であると考えている」といった項目から構成され、上記の項目群と同様に、「強くそう思う」から「全くそう思わない」の7段階リッカート尺度で質問を行った。

また、回答の任意性、途中中断の権利、プライバシーの保護を担保するために、WEB調査であることを踏まえ、質問項目において個人が特定される情報については質問をしないよう留意して、調査を行った。

## 4.3 結果（尺度の検討）

### 4.3.1 サンプルの属性

インターネット調査を行った結果、20代の男女、30代の男女、40代の男女、50代の男女、60代の男女、各群（5×2）から103名ずつ回答が得られ、サンプル総数は1030となった。そして、第2報p.12でも示されたように、調査実施においてダミー項目を用い、回答時間を測定し極端に回答時間が短かったものを排除する工夫を用いることで、サンプルの質の向上を図った。具体的には、「私はスポーツが好きである」という項目に対し、「私はスポーツが好きでない」という項目を設け、両方に同じ数字で回答したもの（両方とも「4 どちらとも言えない」と回答したものは除く）を除外し、その上で回答時間が5分未満であったものを除外した。結果、サンプルサイズは595となり、これを本調査での分析データとして研究1と同じく使用することとした。なお、社会的価値意識(する)に関する項目で天井効果、床効果が確認されたものは存在しなかった。

### 4.3.2 確認的因子分析結果

得られたデータを用いて、尺度の妥当性と信頼性の検討を行った。なお、尺度の妥当性と信頼性を検討するうえで参考とする指標は予備調査と同様であるため、ここでは省略する。

31項目4因子に対し確認的因子分析を行った結果、GFI=.721 AGFI=.675 CFI=.872 RMSEA=.099となり適合指標の値は不良であった。加えて、「みる」や「ささえる」と比較して社会的価値意識のみで30項目を超えている点も問題と考えられた。そこで、因子に対する内容的な妥当性、項目削除後の適合度の値、標準偏回帰係数の値を考慮しながら不要な項目について検討を行った。結果として、社会・生活向上価値因子から「4. 地域住民や国民が仲間と触れ合う機会を創出する」「26. 地域や国における高齢者の社会参加活動を促す」「10. 地域住民や国民における家族の絆を深めることができる」「25. 地域住民や国民の生活の質が向上する」「3. 地域や国の活性化につながる」「11. 地域や国における子どもの活動発表の場を提供できる」を削除した。次に経済的価値因子から「17. 地域や国の雇用創出による影響を及ぼす」「27. 地域や国の経済発展による影響を及ぼす」「15. 地域や国における旅行者の増加につながる」「29. 地域住民や国民の健康寿命を延ばすことができる」を削除した。つづいて、国際的価値因子から「5. 地域住民や国民の国際交流が促進される」を削除した。最後に、教育的価値因子から「31. 地域住民や国民の他人を思いやる心を養うことができる」「8. 地域住民や国民の望ましい社会態度を養うことができる」「7. 地域や国における青少年の健全育成を促す」を削除することとした。

前述した14項目を削除し、再度確認的因子分析を行った。結果、GFI=.888 AGFI=.848 CFI=.942 RMSEA=.086となり、依然として基準値に満たない指標があるものの、大幅な改善がみられた。一方で、収束の妥当性と弁別的妥当性の検討であるが、各変数AVEを.50以上を基準に妥当性の検討を行った結果（Fornell and Larcker,1981）、全ての変数において基準を上回る結果となった。また、弁別的妥当性の検討を行うため、因子間の相

表15 尺度における信頼性係数、因子負荷量、AVE (社会的価値)

概念名	項目	<i>a</i>	FL	AVE
社会・生活向上価値	地域住民や国民が高齢者や障害者と触れ合う機会を創出する		.78	.65
	地域住民や国民の絆を深めることができる		.86	
	地域活動への参加が促進される	.92	.78	
	地域住民や国民の仲間を作る機会を創出する		.82	
	地域コミュニティ再生に役立つ		.80	
	地域住民や国民の生活に張りが出る		.81	
経済的価値	地域や国における産業の発展に役立つ		.87	.60
	地域や国における医療費の抑制につながる	.80	.62	
	地域や国における新しい観光誘致に役立つ		.83	
国際的価値	地域住民や国民における国際交流の機会を創出する		.85	.71
	地域や国が国際貢献をする機会を創出する	.87	.83	
	地域住民や国民の異文化理解につながる		.84	
教育的価値	地域や国における子どもの生きる力を育成する		.74	.64
	地域住民や国民の生涯学習につながる		.80	
	地域や国におけるリーダーの育成に役立つ	.90	.79	
	地域住民や国民の豊かな心を養うことができる		.88	
	地域や国の教育力を再構築できる		.78	

表16 因子間相関係数の平方とAVE (社会的価値)

	社会・生活向上価値	経済的価値	国際的価値	教育的価値
社会・生活向上価値	.65a			
経済的価値	.73	.60b		
国際的価値	.85	.93	.71c	
教育的価値	.97	.78	.90	.64d

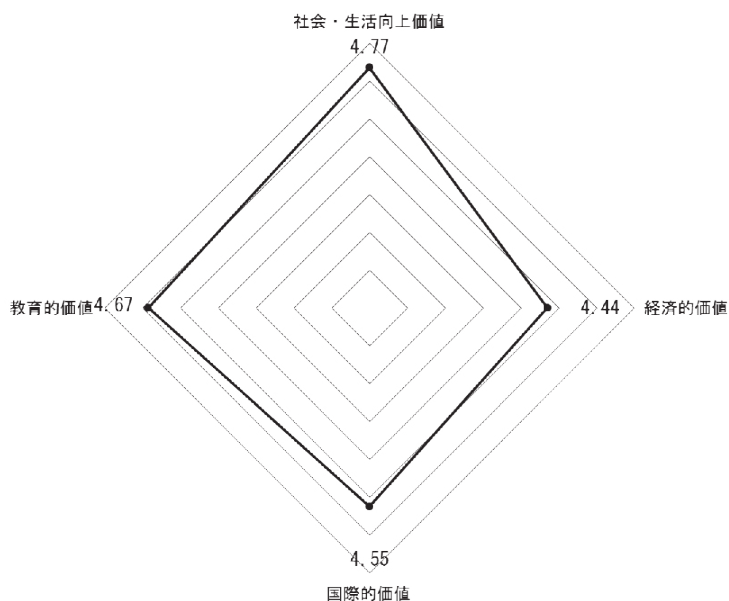


図2 社会的価値意識 (する) における各因子の程度を示したレーダーチャート

関係数の2乗と各因子間のAVEを比較した。結果として、AVEがほかの因子間相関の2乗より低い値を示したことから、弁別的妥当性を確認することはできなかった。

また、Cronbach  $\alpha$  係数は全ての因子に関して基準値である.70を超える結果となり、一定の信頼性を有していることが示された。

また、個人的価値意識同様に、因子分析の結果から抽出された6つの因子に対して、各因子の程度を算出した上でレーダーチャート化し（最大7点、最小1点）、図2に示した。

#### 4. 4. スポーツへの価値意識が従属変数に与える影響（社会的価値）

##### 4. 4. 1 社会的価値意識とスポーツへの興味の関係

スポーツをすることへの社会的価値意識を独立変数、スポーツへの興味を従属変数として重回帰分析を行った。スポーツへの興味に関しては、「スポーツをすること」、「みること」、「ささえること」に対しての「あなたの興味をかき立てることができる」という計3項目の素点の合計をスポーツへの興味の得点として分析を行った。

重回帰分析の結果であるが、「経済的」を除く全ての独立変数において、従属変数である「スポーツへの興味」への影響が有意であった。「社会・生活向上」「国際的」「教育的」といったスポーツへの価値意識が高いほど、スポーツへの興味も高いことが示された。従属変数を「スポーツへの興味」とした場合、調整済みR2乗が約60%近い値を示し、スポーツへの社会的価値意識がスポーツへの興味に強い説明力を持つことが示された。

##### 4. 4. 2 社会的価値意識とスポーツへの関わり関係

さらに、スポーツへの関わりを従属変数として重回帰分析を行った。スポーツへの関与は「スポーツをすること」、「みること」、「ささえること」に対しての「あなたの関わりを強めることができる」という計3項目の素点の合計をスポーツへの興味の得点として分析を行った。

分析の結果、「経済的」、「教育的」を除く全て

表17 重回帰分析結果（スポーツへの興味 社会的価値）

独立変数	$\beta$	t
社会・生活向上	.364	5.81***
経済的	.075	1.52
国際的	.247	4.45***
教育的	.132	2.05*
F 値	216.32***	
R <sup>2</sup>	.595	
調整済みR <sup>2</sup>	.592	

\* : p < .05 \*\* : p < .01 \*\*\* : p < .001

表18 重回帰分析（スポーツへの関わり 社会的価値）

独立変数	$\beta$	t
社会・生活向上	.421	6.47***
経済的	.051	0.98
国際的	.223	3.87***
教育的	.095	1.42
F 値	188.55***	
R <sup>2</sup>	.561	
調整済みR <sup>2</sup>	.558	

\*\*\* : p < .001

の独立変数において、従属変数である「スポーツへの関与」への影響が有意であった。「社会・生活向上」、「国際的」といったスポーツへの価値意識が高いほど、スポーツへの関与も高いことが示された。なお、調整済みR2乗は約56%であった。

##### 4. 4. 3 社会的価値意識と今後1年間のスポーツ実施意欲の関係

さらに、従属変数を「今後1年間のスポーツ実施意欲」として重回帰分析を行った。分析の結果、「社会・生活向上」因子が従属変数への影響が有意であった。つまり、「社会・生活向上」に対する価値意識が高いほど、今後1年間のスポーツ実施意欲も高いことが示された。なお、調整済みR2乗は約24%であった。

##### 4. 4. 4 社会的価値意識とQOLの関係

さらに、従属変数を「QOL」として重回帰分析を行った。「全般的にみて、わたしは自分のこ

表19 重回帰分析結果（スポーツ実施意欲 社会的価値）

独立変数	$\beta$	t
社会・生活向上	.42	4.94***
経済的	.07	1.04
国際的	.11	1.47
教育的	.11	1.26
F値	46.62***	
R <sup>2</sup>	.240	
調整済みR <sup>2</sup>	.235	

\*\*\* : p < .001

表20 重回帰分析結果（QOL 社会的価値）

独立変数	$\beta$	t
社会・生活向上	.23	2.49*
経済的	.03	.37
国際的	.03	.33
教育的	.13	1.41
F値	26.68***	
R <sup>2</sup>	.153	
調整済みR <sup>2</sup>	.147	

\*\*\* : p < .001

とをとても幸せであると考えている」,「わたしは、自分と同世代の人と比べて、自分をより幸福な人間であると考えている」といった2項目における素点の合計を、QOLの得点として分析を行った。

分析の結果、「社会・生活向上」因子において従属変数への影響が有意となった。つまり、「社会・生活向上」価値意識が高いほど、QOLも高いことが示された。なお、調整済みR<sup>2</sup>乗は約15%であった。

#### 4.5 考察（社会的価値意識尺度）

研究2では、社会的価値意識尺度（する）の妥当性と信頼性を確認した。分析の結果、作成した尺度には構成概念妥当性、弁別的妥当性において、やや再検討が必要な点も見られたが、適合度指標はおおむね良好な値を示し、高い信頼性も確認された。また、結果変数への一定の影響力も確認されたことから、尺度の予測的な妥当性も担保された。

しかしながら、因子ごとの相関係数は極めて高

い値となり、弁別的妥当性にはかなり検討の余地が残る結果となった。個人的価値意識尺度（する）に比べ、社会的価値意識尺度（する）は3度の調査において、総じて因子間相関が極めて高く、各々の因子を構成する項目が内容的にかなり異なっていることを踏まえると、個人レベルで「するスポーツ」の社会的価値意識に対し、構成概念ごとに正確な評価を行うことはかなりの困難があることも想定される。もともと、社会的価値意識および、その測定尺度は自治体の政策等に関するドキュメント分析を基に作成しており、この辺りに対しある程度の知識や理解を持つものでなければ、社会的価値意識を多次的に評価することは難しいといった可能性が予想される。これらの点を踏まえ、社会的価値意識を評価する尺度の作成に関しては、これを評価する対象者、測定尺度の内容といった点や、これらを踏まえた研究デザインも含めて、今後の検討が求められるといえよう。

## 5. まとめ

第2報、第3報とスポーツへの価値意識を評価する尺度の作成を行ってきた。個人的価値意識尺度（する）、社会的価値意識尺度（する）共に3度の調査を実施してきた。調査の繰り返しを経て、特に個人的価値意識に関しては、妥当性・信頼性を持った尺度が作成されたと言えよう。

今後の研究課題としては、今回の調査においては、ネットリサーチ会社のモニター会員、または大学生といった限定的な集団を対象に調査を行っていることから、他の様々な環境下で調査や分析を実施していく必要がある。特に、社会的価値意識の測定に関しては、自治体の政策等にある程度の知識や理解を持つものを対象に調査を行った際に、今回作成した尺度がどの程度妥当性と信頼性を持つのか検討してみることは興味深く、スポーツの価値意識の概念をより正確に理解する上でも重要な研究となるだろう。また、より洗練された尺度を作成するためにも、項目の文言の再検討や、様々な結果変数との関係性（例えば今後1年間スポーツ実施頻度など）の検討が必要になってくると考えられる。

さらに、スポーツ価値意識と結果変数との関係



について検討した際、プレイ欲求充足はスポーツ実施意欲には影響を及ぼさず、健康・体力づくり、心理的健康、社交はスポーツ実施意欲を高めるといった結果となった。この結果が、現代の日本人において特有なものなのかどうかについても、今後検討を重ねる必要がある。欧米人やその他の地域の人々を対象に同様の調査を行い日本と比較した場合に、国民におけるスポーツへの価値意識への程度の差異が、スポーツ価値意識の諸要因から結果変数へのパスの強さの差異に影響を及ぼしている可能性もある。このような点を踏まえ、今後の研究の継続が必要であるといえる。

## 注 釈

- 注1) 回答時間の短いサンプルの取り扱いに関しては、回答時間の短いサンプルと、短くなかったサンプルを比較することによって検討した。回答時間が5分未満であったサンプルのみで価値意識尺度(する)を分析したところ(最終的に導かれた6因子18項目に対し確認的因子分析を実施)、モデル適合度は不良であり、また因子間相関が表6で示されたものと比べかなり高い値を示したことから、回答時間が5分未満のデータを除外することに問題はないと判断した。
- 注2) 各因子の程度としては、因子を構成する項目の素点を合計した上で、項目数で割ったものを使用した。
- 注3) 本研究においては、当初第2報P18で示されたモデルを分析することによって、スポーツへの価値意識と結果変数との関係性について検討する予定であった。しかし、モデルの分析を行った結果、モデルの適合指標の値が不良であり、結果の解釈も困難であったことから、重回帰分析を用いて結果変数との関係性を検討するものとした。

## 参考文献

- 1) Fornell, C., and Larcker, D.; Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error, *Journal of Marketing Research*,

Vol.18, No.1, pp.39-50, 1981.

- 2) George R. Milne, Mark A. McDonald; *Sport Marketing: Managing the Exchange Process*, Chapter 3: Motivation of Sport Consumer, Jones and Bartlett Learning, 1999.
- 3) 狩野裕; 再討論: 誤差共分散の利用と特殊因子の役割, *行動計量学*, Vol.29, No.2, pp.182-197, 2002.
- 4) 菊幸一, 茂木宏子; 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発第2報(第2章, スポーツの価値観への社会学的探究), *日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ*, Vol.2, pp.37-44, 2016.
- 5) Mark A. McDonald, George R. Milne, and JinBae Hong; Motivational Factors for Evaluating sport spectator and participant Markets, *Sports marketing Quarterly*, 11, pp.100-113, 2002.
- 6) 小塩真司; SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析-因子分析・共分散構造分析まで, 東京図書株式会社, 2004.
- 7) 小塩真司; はじめての共分散構造分析: AMOSによるパス解析, 東京図書株式会社, 2008.
- 8) 作野誠一, 霜島広樹; 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発: 「スポーツ宣言日本」等スポーツ政策におけるスポーツの理念・価値・目的論を踏まえて(第3章, 基礎自治体のスポーツ政策にみるスポーツ価値の変容: 「スポーツ基本計画」前後の比較分析から), *日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ*, Vol.1, pp.47-56, 2015.
- 9) 霜島広樹, 木村和彦; 参加動機が観戦意図に与える影響に関する検討: テニスを事例にして, *スポーツ科学研究*, Vol.10, pp.12-25, 2013.
- 10) 霜島広樹, 望月拓実, 木村和彦; 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発第2報(第1章, スポーツの価値意識評価尺度の開発), *日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ*, Vol.2, pp.5-12, 2016.

## 第2章 みるスポーツの価値意識に関する研究

本間 崇教<sup>1)</sup> 松岡 宏高<sup>2)</sup>

### 1. はじめに

第2報では、みるスポーツの価値意識の評価指標として測定尺度の開発を行ったが、個人的価値と社会的価値について概念化された構成要素を基に項目が作成され、予備調査による測定尺度の妥当性の検討に留まった。その結果、各測定尺度の適合度指標や構成因子間の弁別性に課題を残し、尺度の修正が必要であることが示された。第3報では、本調査としてデータ収集を行い、測定尺度の妥当性や信頼性について再検討したのち、価値意識がスポーツをみる人を取り巻くさまざまな心理変数とどのような関係にあるかについて検討するまでを、本報告に含めることとした。

### 2. 価値意識に影響を与える要因：スポーツへの心理的関与

みるスポーツの価値とは、スポーツを観戦することで得られる心理的な効用であり、その効用が個人または社会集団のそれぞれの範囲でどのような構造になっているかということが、価値意識の議論の射程である。一方で、そのような価値が個人に認識される過程として、個人は過去の経験からスポーツに対する心理的な態度を形成している。スポーツマーケティング領域において、スポーツ実施者やスポーツ観戦者のスポーツに対する心理的関与度が、他の行動変数や、行動意図などに影響を与えていることが指摘されている (Beaton, Funk, Ridinger, & Jordan, 2011; Funk, Jordan, Ridinger, and Kaplanidou, 2012)。つまり、スポーツを観戦することによって、どのような便益が獲得できるかという価値意識の議論において、個人がスポーツに対して好意的であるか、生活の中心に位置するものとしてスポーツを捉えて

いるかといった、個人のスポーツに対する心理的関与度が、価値意識の認識について影響を与えている可能性がある。そこで、みるスポーツの価値意識を概念化し実証的に検討するにあたり、価値の認識に影響を与える要因として、個人のスポーツに対する心理的な関与度に着目し、価値意識との関係性の検討を行った。

### 3. 価値意識と結果要因の関係

第3報では、第1報、第2報で整理されたスポーツ観戦における価値意識の構成概念、および開発された測定尺度を援用し、価値意識が個人のスポーツに対する興味や行動と、あるいはクオリティ・オブ・ライフ（以下QOL）に関する認識とどのように関係しているかを実証的に明らかにした。これまで、スポーツを観戦することからもたらされる価値を、その価値が及ぶ範囲によって個人的価値と社会的価値に分けて検討を進めてきたが、個人にもたらされる価値、すなわち個人的価値意識が関係する結果要因と、地域住民や国民にもたらされる価値、すなわち社会的価値意識が関係する結果要因は、価値の範囲が異なるだけではなく、認識論的に別々に検討されなければならない。つまり、第2報にて概念化したスポーツへの興味喚起（興味をかき立てることができる）と、総合的関与（関わりを強めることができる）という結果要因については、個人的な興味あるいは総合的関与と、社会的な興味あるいは総合的関与（地域住民や国民の興味、関わり）を弁別して、個人的価値意識と社会的価値意識それぞれとの関係を探ることが必要である。本研究では、みるスポーツの価値意識概念モデルの検討として、個人的価値意識と個人的興味・総合的関与の関係についての回帰分析、そして社会的価値意識と、社会的興味・総合的関与の関係についての回帰分析を行って行うことで、包括的に価値意識と結果要因との関係を明らかにした。また、価値意識とQOLの

1) 早稲田大学大学院

2) 早稲田大学

関係については、個人的価値が個人のQOLに影響を与えるかについてのみ、本研究内で検討した。

#### 4. データ収集方法と分析対象サンプルの抽出

本調査のデータ収集を目的に、インターネット調査を実施した。株式会社マクロミルのモニター会員に対して、本調査研究の対象者の条件を設定し、ウェブ画面上での操作・回答を求める方式でデータが収集された。調査対象者として、過去1年間に競技場（スタジアム）や体育館（アリーナ）などで直接スポーツを観戦したことがあり（直接観戦経験）、且つテレビやインターネットなどのメディアを通してスポーツを観戦したことがある（間接観戦経験）者1,000名を抽出することとした。さらに、収集したサンプルの基本属性について、性別および年齢区分（20代、30代、40代、50代、60代の5区分）を用いた10群に均等に分布するよう、各群から意図的に100名ずつが抽出されるサンプリングを計画した。その結果、各群から103名ずつ抽出され、回答を得たサンプル総数は1,030となった。このサンプルから、まず収集データの精査として、いくつかの設問における回答の妥当性および整合性を確認した。例えば、調査票の最初に置かれた過去1ヵ月間のスポーツ観戦回数に関する設問において、観戦回数が「2,500回」や「16,000回」といった明らかに正確でない回答を含むサンプルは分析から除かれた。

価値意識の概念モデルを実証的に検討するにあたり、価値意識の認識に対するスポーツへの心理的関与の影響を検討に含めるということは先述した通りである。本研究では、本調査において設定した心理的関与に関する3項目（「私はスポーツが好きである」、「スポーツは、私の生活の中心である」、「スポーツは、私という人間を表す」）に対する回答のそれぞれの平均値を算出し、Beaton et al. (2011) の示した関与レベルの分類方法を基に回答者を分類した上で、最も低いレベルである認識段階（Awareness）に分類されたサンプルを分析から除外した。その理由として、本研究では価値意識を測定する方法として、「どのような価値があると思いますか」という尋ね方によって、回答者の認識を測定しているため、ス

表1 分析対象サンプルの性別・年代の分布

	回答者数	%
男性 20代	92	11.2
男性 30代	88	10.7
男性 40代	89	10.8
男性 50代	85	10.3
男性 60代	87	10.5
女性 20代	79	9.6
女性 30代	74	9.0
女性 40代	76	9.2
女性 50代	80	9.7
女性 60代	75	9.1
合計	825	100.0

スポーツへの心理的関与が低い認識レベルのサンプルは、価値意識を明確に認識することができないと判断したためである。これらのサンプル抽出を行った結果、最終的に825サンプルが分析対象として用いられた（表1）。

#### 5. 測定項目、尺度

本調査では、みるスポーツの個人的価値意識および社会的価値意識、加えて価値意識の先行要因として、スポーツへの心理的関与、さらに結果要因として、興味喚起、総合的関与、今後の観戦意図、QOLに関する質問項目をそれぞれ設定した。なお、興味喚起と総合的関与の項目については、個人：「あなたの興味を…」あるいは社会：「地域住民や国民の…」というように、個人的な興味喚起、総合的関与と、社会における興味喚起、総合的関与についての項目をそれぞれ設定した。本研究に含まれる概念や測定項目については、第1報にて構成概念を検討し、第2報において予備調査を行うことで尺度の妥当性検証を行っているが、尺度の検証において十分な妥当性が確認されていない。そこで、本調査としてのデータ収集に進む前に、予備調査の結果を踏まえた項目の修正を含めた調査項目の再検討を行った。

##### (1) 価値意識測定項目の修正

個人的価値意識については、第2報にて5因子19項目で構成されていたもののうち、内容妥当性の観点から7項目を削除した。さらに、残った項

表2 個人的価値意識の測定項目

因子	項目番号	項目
代理達成	A1	応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる
	A2	応援する選手やチームの成功が、自分のことのように思える
ドラマ	D1	接戦が繰り広げられると、緊張感を味わうことができる
	D2	思いもよらない試合展開に驚かされる
パフォーマンス	P1	ハイレベルなプレーや演技をみることができる
	P2	スポーツがもつ美しさ、優美さを感じるができる
	P3	高い身体能力を目の当たりにすることができる
	P4	観戦しているスポーツに関する知識を増やすことができる
社交	S1	人と交流する機会になる
	S2	大勢と一緒に時間を過ごすことができる
逃避	E1	日々の決まった活動に大きな変化をもたらす
	E2	日常生活の問題から一時的に逃れることができる

表3 社会的価値意識の測定項目

因子	項目番号	項目
集団的アイデンティティ	CoID1	地元地域や国への思い入れを感じるができる
	CoID2	地元地域や国の人々に親近感を持つことができる
	CoID3	地元地域や国の人々と目標、考えや意見を共有することができる
	CoID4	地元地域や国の人々と共通点があると感じるができる
	CoID5	地元地域や国の一員であることを実感することができる
	CoID6	地元地域や国の一員でよかったと思うことができる

目についても研究班員による文面の修正を行い、5因子12項目の構成とした。社会的価値については、8項目で構成されていた項目群から概念を再検討し、説明される内容が重複する項目を削除した。その結果、6項目で構成され、最終的に個人的価値意識が12項目、社会的価値意識が6項目となり、これらの18項目を用いて価値意識を測定することとした（表2および表3参照）。

### (2) スポーツへの心理的関与

スポーツへの心理的関与に関する項目は、Beaton et al. (2010) が提示した項目から抽出された3項目を援用した (Inoue and Havard, 2014)。3項目は、心理的関与と段階を分類するために、快楽性 (Hedonic) を示す1項目、中心性 (Centrality) を示す1項目、象徴性 (Symbolic) を示す1項目で構成された。

### (3) 結果要因の測定項目

第2報にて結果要因として検討された、スポー

ツへの興味喚起、スポーツへの総合的関与の促進という項目群については、スポーツをする、みる、ささえるの各対象への「興味をかき立てることができる」、同様に各対象への「関わりを強めることができる」という項目をそれぞれ設定した。また、それぞれの項目は社会的価値意識の結果要因としても検討するために、「あなたの興味をかき立てることができる」と「地域住民や国民の興味をかき立てることができる」とに分けて測定された。今後の観戦意図に関する項目として、「今後1年の間は、過去1年よりも多くスポーツを会場で観戦したい」、「今後1年は、過去1年よりも多くスポーツをメディアを通して観戦したい」の2項目を設定した。QOLの測定項目については、Lyubomirsky & Lepper, (1999) や島井ら (2004) によって測定されている2項目を援用し、個人の認識するQOLについて尋ねることとした。

表4 分析対象サンプルの基本属性

性別	n	%
男性	441	53.5
女性	384	46.5
年齢グループ	n	%
20～24歳	59	7.2
25～29歳	112	13.6
30～34歳	87	10.5
35～39歳	75	9.1
40～44歳	76	9.2
45～49歳	89	10.8
50～54歳	87	10.5
55～59歳	78	9.5
60歳以上	162	19.6
婚姻関係	n	%
未婚	310	37.6
既婚	515	62.4
子どもの有無	n	%
子どもなし	390	47.3
子どもあり	435	52.7

## 6. 分析対象サンプルの属性

分析対象者のサンプル属性を表4に示した。性別の割合は、男性が53.5% (n = 441)、女性が46.5% (n = 384)であった。年齢では、平均年齢は44.4歳で、グループ別に見ると20代が20.8% (n = 171)、30代が19.6% (n = 162)、40代が20.0% (n = 165)、50代が20.0% (n = 165)、60代以上が19.6% (n = 162)であった。婚姻関係では、既婚者が62.4% (n = 515)、子どもの有無に関しては、いと回答したサンプルの割合が52.7% (n = 435)であった。

## 7. 測定尺度の妥当性・信頼性の検証

価値意識の概念モデルに含まれる測定尺度における、各因子の信頼性を確認するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、直接観戦における個人的価値意識の構成因子については、 $\alpha$ 係数は.57～.83の値を示し、間接観戦における個人的価値意識の構成因子では、.70～.86の値であった。社会的価値意識を測定する6項目に関しては、直接観戦における $\alpha$ 係数は.95であり、

間接観戦における $\alpha$ 係数は.96であった。個人的価値意識の構成因子において、逃避因子の $\alpha$ 係数が.57という値であった。Nunnally(1978)によれば、 $\alpha$ 係数が.70を超えないと因子の信頼性が低いと判断すべきであるが、.50を上回れば信頼性が高いと判断できるという指摘もある(小塩, 2008; 2011)。本研究では比較的緩やかな基準に従い、各因子の内的整合性が認められると判断した。

個人的価値意識および社会的価値意識に、スポーツへの心理的関与を含めた概念モデルで確認的因子分析を行った結果、すべてのパスが有意であった。また算出されたモデルの適合度指標については、 $\chi^2/df=5.870$ , GFI=.954, AGFI=.912, NFI=.968, CFI=.973, RMSEA=.077となり、それぞれの値が基準値を上回る値であったため、概念モデルの妥当性がある程度示されたと判断した(Hair, Black, Babin and Anderson, 2010)。個人的価値意識における構成概念の弁別的妥当性を検証したところ、本質的価値と手段的価値の間の相関係数の平方が( $r^2=.66$ )、本質的価値のAVE値(AVE=.60)および手段的価値のAVE値(AVE=.40)より高い値を示したため、弁別性が認められなかった。これら2つの因子は個人的価値意識を構成する5因子の高次因子にあたる構造であり、結果要因の検討を進めるうえで重要な因子構造である。本研究で生じた測定モデルのデータ適合度に関する課題は、データ収集における限界ととらえ、第2報までで説明してきた2因子構造を維持し、価値意識と結果要因との検討に進んだ。なお、社会的価値意識については、もともと1因子構造であるため、確認的因子分析を行わずに、結果要因との関係の検討を進めた。

## 8. 価値意識と結果要因の関係：興味・総合的関与

価値意識が、スポーツ観戦への興味を喚起することとどのように関係しているか、スポーツ観戦への関与を強めることとどのように関係しているか、そして今後のスポーツ観戦に対する意図とどのように関係しているかについては、価値意識を独立変数に置く重回帰分析によって、それぞれの関係が検証された。従属変数には、個人の興味喚

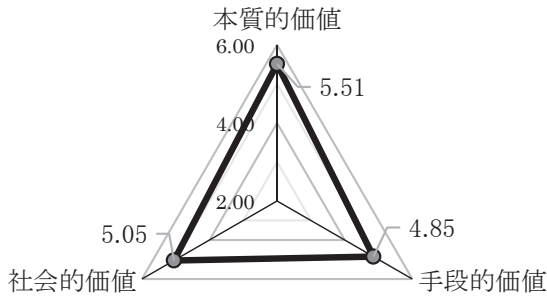


図1 直接観戦の価値意識の全体平均値

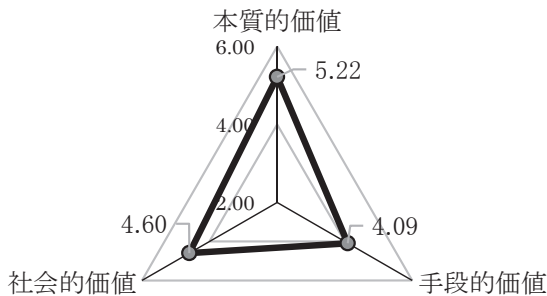


図2 間接観戦の価値意識の全体平均値

起, 社会 (地域住民や国民) の興味喚起についての項目, 個人の総合的関与, 社会の総合的関与についての項目, そして今後の観戦意図についての, 会場での観戦とメディアを通しての観戦の2項目を設定し, それぞれ個人的価値と社会的価値の両方について検討した. 各独立変数は, 強制投入法によって投入され, 従属変数への説明力が算出された. 本研究の調査対象となった各回答者は, 直接観戦における価値についての認識と, 間接観戦における価値についての認識をそれぞれ回答しているため, 結果要因への影響の検討においては, 直接観戦および間接観戦におけるそれぞれの価値意識の変数を同時に独立変数として投入することによって, 観戦方法による価値意識の説明力の違いについても検討した.

個人的価値意識における本質的価値, 手段的価値が, 興味喚起に対してそれぞれどの程度影響を与えているかを分析した結果, 直接観戦における本質的価値 ( $\beta = .216$ ) と, 間接観戦における本質的価値 ( $\beta = .377$ ) が, それぞれ1%水準で有意に影響を与えているということが示された ( $R^2 = .364$ ). 社会的価値が, 社会的な興味喚起にど

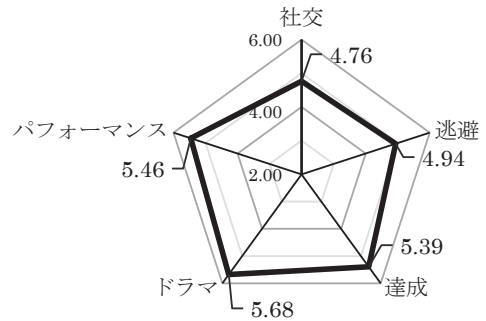


図3 直接観戦の個人的価値意識の全体平均値 (下位概念5因子)

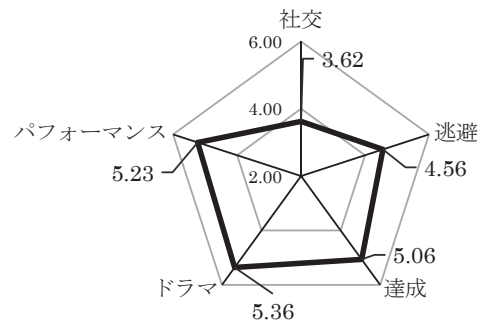


図4 間接観戦の個人的価値意識の全体平均値 (下位概念5因子)

の程度影響を与えているかについては, 直接観戦における社会的価値 ( $\beta = .504$ ), 間接観戦における社会的価値 ( $\beta = .232$ ) とともに1%水準で有意な影響力を示した ( $R^2 = .489$ ). 続いて, 価値意識がどの程度スポーツ観戦への関与を強めるかについては, 個人的価値意識について, 直接観戦における手段的価値 ( $\beta = .219$ ), 間接観戦における本質的価値 ( $\beta = .151$ ), 間接観戦における手段的価値 ( $\beta = .224$ ) が1%水準で有意な影響力を示した ( $R^2 = .329$ ). 社会的価値意識については, 直接観戦における社会的価値 ( $\beta = .441$ ), 間接観戦における社会的価値 ( $\beta = .317$ ) とともに1%水準で有意に影響を与えていた ( $R^2 = .511$ ). 価値意識が今後の観戦意図とどのように関係しているかについては, 会場での観戦意図に対して, 直接観戦における本質的価値 ( $\beta = .363$ ), 直接観戦における手段的価値 ( $\beta = .134$ ) が1%水準, 間接観戦における手段的価値 ( $\beta = .098$ ) が5%水準でそれぞれ有意に影響を与えていることが示

表5 価値意識と結果要因の重回帰分析の結果一覧

個人の興味喚起			個人の関与促進			個人のQOL		
	$\beta$	t 値		$\beta$	t 値		$\beta$	t 値
直接本質	.216	3.744**	直接本質	.091	1.535	直接本質	.140	2.037*
直接手段	.088	1.903	直接手段	.219	4.612**	直接手段	-.026	-.474
間接本質	.377	7.167**	間接本質	.151	2.796**	間接本質	.042	.673
間接手段	-.040	-1.015	間接手段	.224	5.483**	間接手段	.215	4.539**
F 値	117.47**		F 値	100.34**		F 値	22.34**	
R <sup>2</sup>	.364		R <sup>2</sup>	.329		R <sup>2</sup>	.098	
調整済R <sup>2</sup>	.361		調整済R <sup>2</sup>	.325		調整済R <sup>2</sup>	.094	
社会の興味喚起			社会の関与促進					
	$\beta$	t 値		$\beta$	t 値			
直接社会	.504	12.870**	直接社会	.441	11.531**			
間接社会	.232	5.936**	間接社会	.317	8.286**			
F 値	392.62**		F 値	429.87**				
R <sup>2</sup>	.489		R <sup>2</sup>	.511				
調整済R <sup>2</sup>	.487		調整済R <sup>2</sup>	.510				
会場観戦意図			メディア観戦意図					
	$\beta$	t 値		$\beta$	t 値			
直接本質	.363	6.071**	直接本質	.205	3.498**			
直接手段	.134	2.788**	直接手段	.063	1.345			
間接本質	.053	.967	間接本質	.240	4.492**			
間接手段	.098	2.392*	間接手段	.184	4.565**			
F 値	95.46**		F 値	107.16**				
R <sup>2</sup>	.318		R <sup>2</sup>	.343				
調整済R <sup>2</sup>	.314		調整済R <sup>2</sup>	.340				

\* p < .05, \*\* p < .01

直接本質：直接観戦における本質的価値，直接手段：直接観戦における手段的価値  
 間接本質：間接観戦における本質的価値，間接手段：間接観戦における手段的価値  
 直接社会：直接観戦における社会的価値，間接社会：間接観戦における社会的価値

された ( $R^2 = .318$ )。メディアを通しての観戦意図に対しては，直接観戦における本質的価値 ( $\beta = .205$ )，間接観戦における本質的価値 ( $\beta = .240$ )，間接観戦における手段的価値 ( $\beta = .184$ )，がそれぞれ 1%水準で有意に影響を与えていた ( $R^2 = .343$ )。

最後に，価値意識の認識が個人のQOLを高めるかどうかについて，同様に重回帰分析によって各変数の影響力を検証した結果，直接観戦における本質的価値 ( $\beta = .140$ ) が 5%水準，間接観戦における手段的価値 ( $\beta = .215$ ) が 1%水準でそ

れぞれ有意に影響を与えていることが示された ( $R^2 = .098$ )。表5に，重回帰分析のそれぞれの結果をまとめた。

## 9. 価値意識と結果要因との関係についての考察

重回帰分析の結果，スポーツ観戦への興味を喚起することについては，個人的価値において，直接観戦，間接観戦ともに本質的価値が影響を与えていることが明らかになった。本質的価値とは，スポーツ観戦のプロダクト特性から概念化さ

れた価値であり、観戦の対象となるスポーツのパフォーマンスの卓越性、競技結果の予測不能性、応援というスポーツ観戦における状況からもたらされる代理的な達成感が下位概念として含まれている。このことから、スポーツ観戦から得られる便益の中でも、スポーツそのものの特性として位置付けられる価値を認識する方が、よりスポーツ観戦への興味に結び付くということが示された。実務現場において、マーケターはスポーツの中核要素に対して無力であるものの (Mullin, Hardy, and Sutton, 2007), スポーツプロダクトの魅力を根本的に形成しているのはやはりスポーツ自体がもつ特性に由来する価値であり、人々の興味に働きかける重要な要素であることが改めて示された。

個人の興味喚起における結果では、間接観戦における本質的価値のほうが、直接観戦における本質的価値よりも強く影響を与えていることが示された。これまで、スポーツマネジメント領域におけるスポーツ観戦に関する研究では、主に競技場や体育館での直接的な観戦行動を観察対象にして、動機、満足、観戦意図といった概念について議論が進められてきた。第1報で個人的価値意識を概念整理する際に引用した観戦動機の先行研究も、実証データはいずれも直接観戦者を対象にしたものであった (Funk, Mahony, and Ridinger, 2002; James and Ross, 2004; McDonald et al., 2002; Trail and James, 2001; Wann, 1995)。しかしながら、スポーツイベントにおける社会的インパクトの実証を試みたLee et al. (2012)、あるいはKim and Walker (2012)などの研究において、テレビでのスポーツ観戦頻度がそれぞれ独立変数として設定されているように、スポーツ観戦には大別して直接観戦と間接観戦が存在し、スポーツ活動のアウトカムとしての他の変数との関係を探る上で、それぞれの観戦方法に影響を持つ価値が含まれている。

本研究では、直接観戦と間接観戦のそれぞれについて価値意識を測定したことによって、スポーツ観戦へのさらなる興味に対して、それぞれの価値意識が別々に影響を与えていることを実証した。このことは、プロスポーツ等、みるスポーツ

を提供する組織におけるマーケティングの議論に重要な示唆をもたらすことが期待される。従来のみるスポーツにおいては、競技場や体育館での試合興行がサービスの中心であり、「観戦者」という言葉も、それら直接観戦における観戦者という意味合いで主に扱われてきた。しかしながら、メディアによる間接的な観戦機会によって、より効率的に人々のスポーツ観戦への興味を促すことができるという結果は、スポーツ観戦における観戦者が、直接会場に足を運んだ者だけを指さないということを示しており、むしろ潜在的な需要を喚起するという意味で、間接的な観戦によって認識された価値が非常に重要であるということが明らかになった。さらに、価値意識と結果要因の関係について検証したすべての分析において、間接観戦における価値意識からの影響が有意に示された。特に、興味喚起、メディア観戦意図、QOLといった結果変数との関係においては、間接観戦における価値意識が最も影響を与える要因であった。個人の観戦経験による価値の認識を実証的に明らかにした結果、このように間接観戦における価値意識も有意な影響因子として示されたということは、学術的な発見であるとともに、スポーツ観戦を興行として扱う組織における実務的なインプリケーションを含む結果である。間接的なスポーツ観戦の環境について、近年は地上波でのスポーツ中継に留まらず、個人のニーズや環境に合わせて多様な視聴方法、観戦スタイルが登場しており、間接的に観戦する媒体によっても、価値意識の認識やその影響力は異なる可能性がある。今回は、「テレビやインターネットなどのメディアを通して」という言葉を用いて間接観戦における価値意識を測定したため、具体的にどのような媒体で観戦したのかについては分類していない。Vリーグが2016-17シーズンより、そしてJリーグが2017シーズンより、DAZN (ダ・ゾーン) との有料放送放映権の契約を締結したが、スポーツ観戦における間接観戦の環境はますます多様化し、先行研究にはない新たな「観戦者」が現れることが予想される。今後は、直接的な観戦に限らないスポーツ観戦の個人に与える影響を継続的に検討しつつ、間接観戦においては、どのような媒体で



観戦することで、価値意識の認識にどのように違いが生じるかという細分化によって議論を深めることが重要である。

## 10. 研究の限界と今後の研究課題

本研究では、スポーツ観戦がもたらす心理的な効用を価値意識と定義したが、スポーツ観戦が個人や社会にもたらす影響としては、他にも様々な概念で検討される可能性がある。スポーツイベントの社会的効果に関する研究では、イベントによってヒト、モノ、カネの流通が盛んになることを挙げ、商業の活性化、地域インフラの拡充といった経済的な効果などについても議論が及んでいる。したがって、スポーツ観戦が個人や社会にもたらす価値として他に貨幣的価値、物質的価値などが含まれるということに鑑みれば、本研究で明らかになったことは、スポーツがもたらす価値の中の一部的な示唆である。しかしながら、スポーツ観戦が地域住民にとって魅力的で、興味を引くものでなければ、住民はそのサービスを購買しようとはせず、さらにスポーツイベントによる経済への影響に対しても、否定的な影響をもたらすと捉えかねない。つまり、個人が心理的にスポーツに興味を持ち、有益な価値があると認識していることは、他に存在しうる影響が価値として肯定的に捉えられるために重要である。本研究では、価値がもたらされる範囲によって価値意識を規定し、個人を最小単位として捉えたため、社会的価値とは、社会集団に対する影響を指す価値意識であった。研究の定義として心理的な効用に留めないスポーツの価値について検討することになれば、今後は社会という言葉が指すものをより多様に捉え、たとえば、ヒト、モノ、カネにそれぞれ与える影響として研究を発展させることが求められる。また、スポーツの価値意識が関与の仕方によって異なるかということについては、スポーツを行うこと、スポーツを支えることと、スポーツを観戦することがそれぞれにどのように関連しているかについて検討する必要がある、これは今後の研究課題である。

人間にとって、スポーツは余暇活動としての性質が強く表れたものであるが、スポーツからどの

ような価値がもたらされるかということについて多面的な考察が深まることによって、スポーツとの関わりが人生に対してどのように影響を与えるかについて、検討を進めることができる。本研究ではQOLにスポーツ観戦の価値意識が与える影響力は非常に小さいものであることが示されたが、スポーツとの関わり方によって、それぞれにQOLへの刺激を与えていると捉える方が適切である。すなわち、スポーツ観戦だけでなく、スポーツ実施やスポーツ・ボランティアなど多様な関わりを含めた豊かなスポーツライフに人々が導かれることによって、人生をより幸福であると認識することができるよう、スポーツのもたらす価値を最大化するための議論を進めていくことが求められる。

## 参考文献

- 1) Beaton, A. A., Funk, D. C., Ridinger, L., and Jordan, J. (2011). Sport involvement: A conceptual and empirical analysis. *Sport Management Review*, 14, 126-140
- 2) Funk, D. C., Jordan, J., Ridinger, L. L., and Kaplanidou, K. (2012). Capacity of mass participant sport events for the development of activity commitment and future exercise intention. *Leisure Sciences*, 33, 250-268
- 3) Funk, D. C., Mahony, D. F., and Ridinger, L. L. (2002). Characterizing consumer motivation as individual difference factors: augmenting the sport interest inventory (SII) to explain level of spectator support. *Sport Marketing Quarterly*, 11, 33-43
- 4) Hair, J. F., Black, W. C., Babin, B. J., and Anderson, R. E. (2010). *Multivariate data analysis* (7th ed.). Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 5) Inoue, Y., and Havard, C. T. (2014). Determinants and consequences of the perceived social impact of a sport event. *Journal of Sport Management*, 28, 295-310
- 6) James, J. D., and Ross, S. D. (2004). Compar-

- ing sport consumer motivations across multiple sports. *Sport Marketing Quarterly*, 13, 17-25
- 7) Kim, W., and Walker, M. (2012). Measuring the social impacts associated with Super Bowl XLIII: Preliminary development of psychic income scale. *Sport Management Review*, 15, 91-108
  - 8) Lee, S. P., Cornwell, T. B., and Babiak, K. (2012). Developing an instrument to measure the social impact of sport: Social capital, collective identities, health literacy, well-being and human capital. *Journal of Sport Management*, 26, 24-42
  - 9) Lyubomirsky, S., and Lepper, H. S. (1999). A measure of subjective happiness: preliminary reliability and construct validation. *Social Indicators Research*, 46, 137-155
  - 10) McDonald, M. A., Milne, G. R., and Hong, J. (2002). Motivational factors for evaluating sport spectator and participant markets. *Sport Marketing Quarterly*, 11, 100-113
  - 11) Mullin, B. J., Hardy, S., and Sutton, W. A. (2007). *Sport marketing* (3rd ed.). Champaign, IL : Human Kinetics.
  - 12) Nunnally, J. C. (1978). *Psychometric theory* (2nd ed.). New York : McGraw-Hill.
  - 13) 小塩真司 (2008). はじめての共分散構造分析 : Amosによるパス解析. 東京図書
  - 14) 小塩真司 (2011). SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 : 因子分析・共分散構造分析まで(第2版). 東京図書
  - 15) 島井哲志, 大竹恵子, 宇津木成介, 池見陽, Lyubomirsky, S.(2004). 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale : SHS) の信頼性と妥当性の検討. *日本公衛誌*, 51, 845-853
  - 16) Trail, G. T., and James, J. D. (2001). The motivation scale for sport consumption : assessment of the scale's psychometric properties. *Journal of Sport Behavior*, 24, 108-127
  - 17) Wann, D. L. (1995). Preliminary validation of the sport fan motivation scale. *Journal of Sport and Social Issues*, 19, 377-396

## 第3章 ささえるスポーツの価値意識に関する研究

望月 拓実<sup>1)</sup> 作野 誠一<sup>2)</sup>

### 3-1. 本章の目的

本報告（第3報）は、第2報で実施した予備調査の結果をふまえた本調査による尺度開発ならびに「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「QOL」「今後1年間のスポーツボランティア実施意欲」という4つの従属変数との関係を分析することを主たる目的とする。

### 3-2. 研究方法（本調査概要）

本報告では、「ささえるスポーツ」の価値意識尺度を、前述した価値意識評価尺度に対して、信頼性と妥当性について統計的検討を行ったうえで、従属変数との関係を検証する。本章は2つの研究から構成され、研究1では価値意識評価尺度の開発、研究2では第2報における「みるスポーツ」で提案されたスポーツの価値意識とスポーツへの興味、関与ならびにQOLと今後1年間のスポーツボランティア実施意欲との因果関係を検討する。

### 3-3. 研究1 ささえるスポーツの価値意識評価尺度の開発

#### 3-3-1 質問項目の精査

第2報における「5. まとめ：本調査に向けた課題」では、弁別的妥当性と「スポーツ因子」の取り扱いについて言及した。とくに、「スポーツ因子」の扱いは測定項目そのものが変更される可能性があるため、本調査を行ううえで優先して検討する必要がある。この点については、スポーツマネジメントを専門とする研究者ならびに協力班員との協議のうえ修正を図った。具体的には、第2報における「みるスポーツ」で提案されたモデルの従属変数との重複を避けるため「スポーツ

因子」の削除を行った。また、「学習因子」が2項目で構成されていることから信頼性の検討などで問題が出てくると考えられるため、項目の追加を行った。結果として、「新しい技能を得ることができる」「能力を高めることができる」を追加し4項目とした。以上の修正を加え、7因子30項目で本調査を行うこととした。

#### 3-3-2 調査概要

はじめに、調査対象の選定について説明する。本調査は、第2報と同様にインターネット調査（電子調査法）によって実施された。まず、株式会社マクロミルのモニター会員に対して本調査の対象者の条件を設定し、サンプルを確定したのち、ウェブ画面上での回答を求める方式でデータ収集を行った。本調査の対象は、第2報と同じく、①報酬を目的とすることなく、地域のスポーツクラブやスポーツ団体において自ら進んで運営や指導を日常的に支える行動、②報酬を目的とすることなく、全国的レベルあるいは国際的なスポーツ大会などにおいて、自分から進んで運営や活動を支援する活動のいずれか、または両方についてしたことがあると回答した600名を目標とした。サンプルの属性についても、第2報と同様の方法を用い、「あなたは、これまでに報酬を目的とすることなく、地域のスポーツクラブやスポーツ団体において、自分から進んで運営や指導活動を日常的にささえたことがありますか」、そして「あなたは、これまで報酬を目的とすることなく、全国レベルあるいは国際的なスポーツ大会などにおいて、自分から進んで運営や活動を支援したことがありますか」という2つの質問によるスクリーニングを行った。そのうえで、「あなたは上記のような活動（ボランティア）を行うことに、どのような価値があると思いますか。以下の項目それぞれについて、あてはまるものをお選びください」として、先に示した30項目について、「全くそう思わない」

1) 早稲田大学スポーツ科学研究センター

2) 早稲田大学

から「強くそう思う」までの7点リッカート型尺度を用いて回答してもらった。調査期間は2016年9月27日から9月28日までであった。結果として、①地域クラブ・団体などで日常的にささえた経験のあるサンプル（地域群；n = 206）、②全国・国際イベントにて活動支援した経験のあるサンプル（全国群；n = 206）、③いずれの経験もあるサ

ンプル（両方群；n = 206）から構成される計618のサンプルが抽出された。有効回答率は98.5%であった<sup>注1)</sup>。

### 3-3-3 尺度の妥当性及び信頼性の検証

つづいて、測定尺度の妥当性・信頼性の検討を行うため、Amos21.0を用いた確認的因子分析

表1-1 スポーツの価値意識（ささえる）尺度の妥当性と信頼性

学習		FL	AVE	$\alpha$
1	新しい技能を得ることができる	.79		
2	能力を高めることができる	.79	.64	.876
3	視野を広げることができる	.79		
4	新しい知識を得ることができる	.82		
自己改革				
5	何か新しい発見ができる	.72		
6	自分を変えるきっかけにすることができる	.72		
7	自分が成長し、向上できる	.83	.65	.917
8	自分の生活を充実させることができる	.85		
9	単調な日常生活を変えることができる	.81		
10	楽しみを見出すことができる	.88		
社交				
11	さまざまな人々と交流を深めることができる	.79		
12	同じボランティア精神を持った仲間と出会うことができる	.78		
13	多くの人と出会うことができる	.83	.67	.908
14	さまざまな人々と協力して仕事ができる	.87		
15	同じ志を持った人達と目的を達成して喜びを感じることができる	.83		
社会的義務				
16	人のために役立つことができる	.81		
17	社会に奉仕できる	.83		
18	社会還元的な活動をすることができる	.85	.69	.901
19	人からの親切にボランティアという形で恩返しできる	.84		
キャリア				
20	現在や将来の仕事に役立てることができる	.83		
21	現在または将来の自分の仕事のために経験を積むことができる	.76		
22	現在の仕事や将来の就職のために役立つ能力を得ることができる	.84	.68	.911
23	さまざまな分野・職種の人々と接することで、現在や将来の仕事に役立てることができる	.84		
24	現在や将来の仕事のために自分の能力を試す良い機会とすることができる	.84		
地域奉仕				
25	地元のアピールができる	.71		
26	地域社会へ貢献することができる	.85	.67	.859
27	地元のために役に立つことができる	.89		
能力・経験活用				
28	過去の仕事やボランティアでの経験を生かすことができる	.78		
29	自分の能力（専門的能力や語学力など）を活用することができる	.75	.60	.820
30	自分の持っている知識を生かすことができる	.80		

表 1-2 スポーツの価値意識（ささえる）尺度の因子間相関

	学習	自己改革	社交	社会的義務	キャリア	地域奉仕	能力・経験活用
学習	.64a						
自己改革	.96	.65b					
社交	.88	.90	.67c				
社会的義務	.79	.79	.94	.69d			
キャリア	.77	.67	.59	.59	.68e		
地域奉仕	.81	.74	.85	.96	.61	.67f	
能力・経験活用	.82	.75	.77	.72	.72	.74	.60g

a. 学習のAVE b. 自己改革のAVE c. 社交のAVE d. 社会的義務のAVE e. キャリアのAVE  
f. 地域奉仕のAVE g. 能力・経験活用のAVE

を行った。加えて、収束的妥当性および弁別的妥当性を検討するために、因子負荷量とAVE、相関係数を算出した。また、尺度の信頼性はCronbach  $\alpha$  係数により検討を行った。

確認的因子分析によるモデル適合度は、一般的にGFI, AGFI, CFI, RMSEAの値が用いられる（小塩, 2008）。しかし、質問項目が30を超えるモデルの場合、GFIの値が基準値である.90を超えないことが指摘されている（田部井, 2001）。そして、質問項目が30を超える場合はCFIを用いることが推奨されている。また、RMSEAについては一般的に.05が基準となっているが、.05から.10の間である場合にはやや劣る適合度であるという指摘もある（小塩, 2008）。以上の基準をふまえてモデルの適合度について検証を行った（表1-1, 1-2）。

分析の結果、田部井（2001）による指摘の通り、GFI, AGFIは.900を下回る結果となったため、CFIを基準値とした。結果、CFIは.903となり、RMSEAも.084と基準値を満たしたことから、本研究ではこの結果に基づき妥当性・信頼性の分析を行うこととした。

収束的妥当性の分析を行った結果、すべての因子においてAVEが基準値（Fornell and Larcker, 1981）である.50を超える結果となり、収束的妥当性を確認することができた。弁別的妥当性については、「キャリア」と「社交」、「キャリア」と「社会的義務」、「キャリア」と「地域奉仕」で弁別的妥当性が担保されたものの、他の因子間では確認できなかった。また、信頼性の検討を行うためCronbach  $\alpha$  係数を確認したところ、すべての

因子で基準値である.70（Nunnally, 1978）を超える結果となった。以上より、「ささえるスポーツの価値意識尺度」は、第2報の結果と同様、弁別的妥当性に検討の余地があるものの、モデル適合度の向上がみられたこともあり、一定の妥当性・信頼性が確認された<sup>注2)</sup>。

### 3-3-4 ささえるスポーツの価値意識尺度基本統計量

尺度に対する一定の妥当性・信頼性が担保されたことを受けて、以下に各因子の基本的統計量を図示した（図1）。

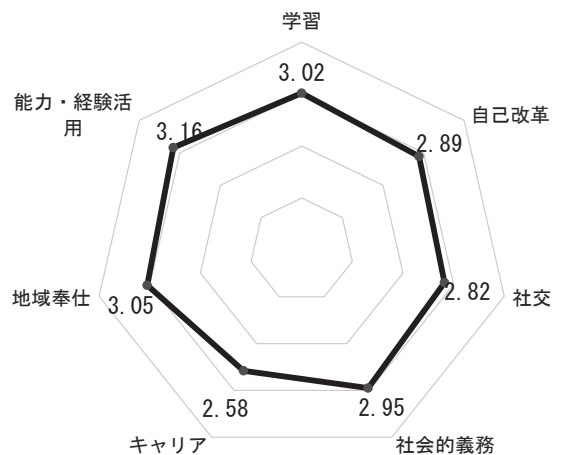


図1 ささえるスポーツの価値意識基本統計量

### 3-4. 研究2 ささえるスポーツの価値意識が従属変数に与える影響

#### 3-4-1 多変量解析の概要

本調査では第2報における「みるスポーツ」で提案された態度モデルを検討するため、スポーツへの興味に関する3項目（スポーツを「すること」「みること」「ささえること」へのあなたの興味をかきたてることができるという3項目）、スポーツへの関わりに関する3項目（スポーツを「すること」「みること」「ささえること」へのあなたの関りを強めることができるという3項目）、QOLに関する質問2項目（「全般的にみて、わたしは自分のことをとても幸せであると考えている」「わたしは、自分と同年代の人と比べて、自分をより幸福な人間であると考えている」の2項目）、今後1年間のスポーツボランティアに対する実施意欲1項目も同時に測定した。

分析方法として、まずささえるスポーツの価値意識と従属変数との関係を検討するため共分散構造分析(Structural Equation Modeling)を用いた。また、「スポーツへの興味(3項目)」「スポーツへの関わり(3項目)」「QOL(2項目)」それぞれの素点の合計を「スポーツへの興味の得点」「スポーツへの関わりの得点」「QOLの得点」として分析を行った。

分析では、前述した確認的因子分析から抽出された7因子と観測変数である「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「QOL」「今後1年間のスポーツボランティア実施意欲」との関係性を、検証的にモデル化することを試みた。しかし、分析の結果、7因子と観測変数間の標準化係数が1.00を上回る不適解が多くみられたことに加え、GFI .768 AGFI .724とモデル適合度も当てはまりが悪い結果となり、解釈が困難と判断した。よって、次善の策として7因子を独立変数、各観測変数を従属変数とする重回帰分析(Multiple Regression)を実施した。

#### 3-4-2 ささえるスポーツの価値意識とスポーツへの興味の関係

まず、「スポーツへの興味」を従属変数とし、

7因子を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行ったところ、表2に示す結果となった。

表2 重回帰分析結果(従属変数:スポーツへの興味)

	$\beta$	t
独立変数		
学習	.013	.20
自己改革	.311***	4.62
社交	-.070	-.95
社会的義務	.025	.37
キャリア	.061	1.17
地域奉仕	.294***	5.00
能力・経験活用	.159**	3.09
F値	94.1***	
R <sup>2</sup> 乗	.523	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.518	

\*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

分析の結果、スポーツへの興味には「自己改革」「地域奉仕」「能力・経験活用」の順で有意に影響を与えることがわかった。また、「キャリア」「社会的義務」は統計的に有意ではないものの正の影響を与えることがわかった。そして、「社交」に関しては有意ではないものの負の影響を与えていることがわかった。なお、VIFの値はいずれも10未満(小塩, 2004)となり、多重共線性の問題は確認されなかった。

#### 3-4-3 ささえるスポーツの価値意識とスポーツへの関わりとの関係

次に、「スポーツへの関わり」を従属変数とし、7因子を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行ったところ、表3に示す結果となった。

分析の結果、スポーツへの関わりには「自己改革」「地域奉仕」「能力・経験活用」「キャリア」の順で有意に影響を与えることがわかった。また、「学習」「社交」「社会的義務」は有意ではないものの負の影響を与えることがわかった。なお、VIFの値はいずれも10未満(小塩, 2004)となり、多重共線性の問題は確認されなかった。

表3 重回帰分析結果（従属変数：スポーツへの関わり）

	$\beta$	t
独立変数		
学習	-.037	-.56
自己改革	.354***	5.27
社交	-.032	-.43
社会的義務	-.068	-1.00
キャリア	.111*	2.16
地域奉仕	.321***	5.49
能力・経験活用	.142**	2.77
F値	95.31***	
R <sup>2</sup> 乗	.526	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.521	

\* : p<.05 \*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

### 3-4-4 ささえるスポーツの価値意識とQOLの関係

つづけて、「QOL」を従属変数とし、7因子を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行ったところ、表4に示す結果となった。

表4 重回帰分析結果（従属変数：QOL）

	$\beta$	t
独立変数		
学習	-.084	-.99
自己改革	.417***	4.93
社交	-.212	-2.29
社会的義務	-.070	-8.2
キャリア	.025	3.8
地域奉仕	.254**	3.44
能力・経験活用	.191*	2.96
F値	28.54***	
R <sup>2</sup> 乗	.250	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.241	

\* : p<.05 \*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

分析の結果、QOLには「自己改革」「地域奉仕」「能力・経験活用」の順で有意に影響を与えることがわかった。また、「社交」が有意に負の影響を与えることがわかった。そして、有意ではないものの「学習」「社会的義務」が負の影響を与え、「キャリア」が正の影響を与えることがわかった。なお、VIFの値はいずれも10未満（小塩、2004）

となり、多重共線性の問題は確認されなかった。

### 3-4-5 ささえるスポーツの価値意識とスポーツボランティア実施意欲の関係

最後に、「今後1年間のスポーツボランティア実施意欲」を従属変数とした分析を行ったところ、表5に示す結果となった。

表5 重回帰分析結果（スポーツボランティア実施意欲）

	$\beta$	t
独立変数		
学習	.001	-.10
自己改革	.336***	4.93
社交	-.254**	-2.30
社会的義務	-.031	-.40
キャリア	.102	.38
地域奉仕	.314***	3.44
能力・経験活用	.178**	2.96
F値	50.53***	
R <sup>2</sup> 乗	.371	
調整済みR <sup>2</sup> 乗	.364	

\*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

分析の結果、スポーツボランティア実施意欲には「自己改革」「地域奉仕」「能力・経験活用」の順で有意に影響を与えることが分かった。また、「社交」が有意に負の影響を与えることがわかった。なお、VIFの値はいずれも10未満（小塩、2004）となり、多重共線性の問題は確認されなかった。

## 3-5. 考 察

### 3-5-1 評価尺度の作成に対する考察

はじめに、ささえるスポーツの価値意識評価尺度開発に対する考察を行う。質問項目の精査では、「スポーツ因子」の削除および「学習因子」に対する質問項目の追加を行った。結果として、第2報と比較してモデル適合度が向上したほか、 $\alpha$ 係数の値などにも改善がみられたことから「ささえるスポーツの価値意識」を測定する評価尺度としてはより適切になったと判断された。また、「する」「みる」と比較した際に、「ささえる」については

質問項目数が30項目と倍近い数になっている点が特徴として挙げられる。しかし、「ささえる」については個人的・社会的で評価尺度を分別していないため、「個人的する・社会的する」「個人的みる・社会的みる」の質問項目数と比較した場合、妥当な数であると考えられる。以上の検討から、予備調査をふまえた修正を行ったことによって、より適切な「ささえるスポーツの価値意識評価尺度」が開発されたと考える。

### 3-5-2 従属変数に対する共通の影響に対する考察

次に、ささえるスポーツの価値意識と従属変数である「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「QOL」「スポーツボランティア実施意欲」への影響に関する考察を行う。第一に、すべての従属変数に対し有意に影響を与えている因子として、「自己改革」「地域奉仕」「能力・経験活用」が挙げられる。

まず、「地域奉仕」因子については、回答者の多くが地域レベルのボランティア活動に参加していることから、必然的に強い影響があらわれたものと推測される。これは従来から考えられている「ささえるスポーツ」の中心的価値といえるであろう。一方で、「自己改革」「能力・経験活用」因子は、第2報で示されたスポーツ振興基本計画(2000)が掲げる人々の生活へのインパクト、すなわち「ボランティアとしてスポーツの振興に積極的にかかわりながら、自己開発、自己実現を図ることを可能とする」という内容と重なるものである。このように、従来から考えられている「地域奉仕」という価値に加え、スポーツ振興基本計画で掲げられた「自己改革」「能力・経験活用」という価値が「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「QOL」「スポーツボランティア実施意欲」に強く影響していることは、わが国が行うスポーツ政策をある程度正確に反映した結果といえるであろう。また、すべての従属変数に対し有意ではないものの負の影響を与えている因子として「社交」が挙げられた。「社交」因子は、するスポーツの価値意識においては手段的価値に分類されているが、ささえるスポーツであるスポーツ

ボランティア活動においても同様に手段的価値に分類されるだろう。「社交」はスポーツボランティアのみならず、さまざまなボランティア活動からも得られる価値であり、さらにはボランティア以外の多くの集団活動からも得られる価値である。ゆえに、「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「スポーツボランティア実施意欲」といったスポーツ特有の意識や行動には直接結びつかなかったものと予想される。ただし、「QOL」に対して有意ではないものの負の影響を与えている点についてはさらなる検討が必要になると考える。

### 3-5-3 各従属変数固有の影響に対する考察

一方で、従属変数固有の影響もみられた。まず、「スポーツへの関わり」を従属変数とした分析では、「キャリア」が有意に影響を与える結果となった。「キャリア」因子の質問項目は、「現在や将来の仕事に役立てることができる」「役立つ能力を得ることができる」「経験を積むことができる」など、「能力・経験活用」因子と同様にかなり具体的な内容となっている。ゆえに、「スポーツへの興味」という意識レベルの認識に対する影響と比較して、「スポーツへの関わり」という行動レベルの認識により強い影響を与えていることが予想される<sup>注3)</sup>。

また、「QOL」を従属変数とした重回帰分析では、「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「スポーツボランティア実施意欲」と比較して調整済み $R^2$ 値が大幅に低い結果となった。その理由として、スポーツへの興味や関心、実施意欲と比較した際に、QOLという概念はその意味範囲が広く、多様な要因によって構成される概念であり、独立変数としてスポーツの価値意識が占める割合が相対的に少なくなったことが考えられる。第2報における「みるスポーツの価値意識」部分では、スポーツへの価値意識とQOLの関係を直接結ぶモデルを想定し「ささえるスポーツ」において実施した。しかし、分析の結果その関係性は「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「スポーツボランティア実施意欲」ほどの説明力をもたなかったといえる。ただし、QOLが持つ概念定義の広さや考えられる影響要因の多様さに鑑み



れば、24.1%という数値は人々の生活の豊かさをささえる活動としてのスポーツの価値を再認識できる結果ともいえる。

### 3-6. まとめと今後の研究課題

本調査から明らかになった結果及び今後の検討課題を以下に述べる。

まず、第2報の結果をふまえ「ささえるスポーツの価値意識評価尺度」の質問項目を再度精査し分析を行った結果、予備調査と比較してモデル適合度や妥当性・信頼性の観点からより適切な尺度を開発することができた。「する」「みる」と比較した質問項目数のバランスから考えても、本研究で作成された調査は実用性が高い尺度といえるであろう。また、「ささえるスポーツの価値意識評価尺度」と従属変数である「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」「QOL」「ボランティア実施意欲」との関係を検討した結果、「地域奉仕」「自己改革」「能力・経験活用」が有意に影響を与え、「社交」が有意ではないものの負の影響を与えていることが明らかとなった。また、「スポーツへの興味」「スポーツへの関わり」などと比較して、「QOL」は説明力が低いことも明らかとなった。

今後の検討課題として、本研究では「ささえるスポーツの価値意識」と各従属変数の関係のみ分析を行っており、その特徴の一部が明らかになったに過ぎない。「するスポーツ」「みるスポーツ」における従属変数との関係と比較することによって、「ささえるスポーツ」特有の関係性が明らかになる可能性があり、さらなる分析が望まれる。

### 注

- 1) 分析の際には、ダミー項目による不正な回答を除いた609サンプルを分析対象とした。
- 2) 因子間相関が高い因子同士を合成し再度分析したものの、他の因子間相関が向上してしまうような結果が得られたため、本研究では当初想定した因子構造を採用した。
- 3) スポーツボランティア実施意欲を従属変数とした分析においても有意傾向がみられることから、行動レベルの従属変数には一定の影響があると推測される。

### 参考文献

- 小塩真司 (2004) SPSSとAmosによる心理・調査データ解析：因子分析・共分散構造分析まで、東京図書。
- 小塩真司 (2008) はじめての共分散構造分析：AMOSによるパス解析、東京図書。
- 田部井明美 (2001) SPSS完全活用法：共分散構造分析 (Amos) によるアンケート処理、東京図書。
- Fornell, C. and Larcker, D. (1981) Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error, *Journal of Marketing Research*, Vol.18, No.1, pp.39-50.
- Nunnally, J. C. (1978) *Psychometric theory* (2nd ed.) New York : McGraw Hill.
- 日本体育協会 (2008) 21世紀の国民スポーツ振興方策：スポーツ振興2008。日本体育協会
- 作野誠一・望月拓実 (2016) 「1-3 ささえるスポーツの価値意識評価尺度の開発」(木村和彦編『平成27年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発 (第2報)』)(公財)日本体育協会スポーツ医科学専門委員会, pp.26-36.

# 第4章 3年間のまとめと今後の研究課題： 「する」スポーツ価値意識研究の展望と課題

中西 純司<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

平成29年3月1日に、わが国の今後5年間のスポーツ政策の基本的な方向性を示す「第2期スポーツ基本計画（答申）」がスポーツ審議会会長からスポーツ庁長官に手交された。そして、文部科学省は、平成29年3月24日に、スポーツ基本法の規定に基づいて、平成32（2020）年の先を含む5年間（平成29年4月～平成34年3月まで）の中長期的なスポーツ政策の基本方針として、第2期「スポーツ基本計画」を策定し公表した。

この5年計画では、「スポーツの『楽しさ』『喜び』こそがスポーツの価値の中核であり、全ての人々が自発的にスポーツに取り組み自己実現を図り、スポーツの力で輝くことにより、前向きで活力ある社会と、絆の強い世界を創る」といったように、「～スポーツが変える。未来を創る。Enjoy Sports, Enjoy Life～」が中長期的なスポーツ政策の基本方針として設定されている。具体的には、「1 スポーツで『人生』が変わる！」「2 スポーツで『社会』を変えよう！」「3 スポーツで『世界』とつながる！」「4 スポーツで『未来』を創る！」といった4つの基本方針を掲げ、スポーツをする・みる・ささえる「スポーツ参画人口」を拡大し、スポーツ界が他分野と連携・協働を進め、全ての人々がスポーツの力で輝き、活力ある社会と絆の強い世界を創るという「一億総スポーツ社会」を実現することを目指している。

このように、この5年計画では、「スポーツの価値」をその理念として具体化し、本プロジェクト研究における研究成果（3年間）はとても価値ある研究蓄積であるといっても過言ではない。とりわけ、本プロジェクト研究では、「スポーツ（の）価値」を「個人または集団の欲求を満たすことで

望ましいとされる、スポーツの客観的属性」（第1報 [菊・茂木・功刀], 2015, p.9）と定義づけた。その上で、「スポーツ価値意識」の概念を「スポーツの属性を望ましいと考える主体の意識」（第1報 [菊・茂木・功刀], 2015, p.9）と規定して、本プロジェクト研究を3年間にわたって進めてきた。いうなれば、スポーツ価値意識とは、「主体としての個人・集団・組織等が自らの欲求と行為の選択に際して望む(求める), スポーツの客観的属性」のことなのである。それゆえ、個人・集団・組織などの「主体」(アクター)が自らの欲求にあった、スポーツとのかかわり方(行為)を選択することによって、スポーツ価値に対する各主体の意識(スポーツ価値意識)は多面性をもつ(大きく変わる)と言ってもよいのである(図1参照)。

つまり、「無色透明で無価値なものに等しい」(第2報 [菊・茂木], 2016, p.41)というメディア(媒体)特性を有するスポーツ文化に対して多義的な意味や解釈、メッセージなどの価値付与をしているのはまさに、主体としての人間自身なのである。また、「メッセージを主体に委ねるメディア性こそがスポーツの魅力の中核に潜んでいる」(第2報 [菊・茂木], 2016, p.42)のである。

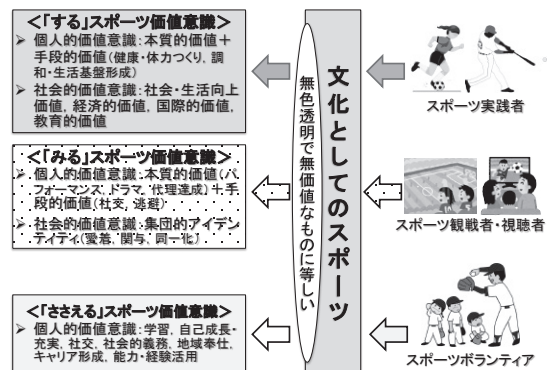


図1 スポーツ価値意識の多面的な評価指標：  
第2報の研究結果から

1) 立命館大学

そのため、本プロジェクト研究では、①スポーツ実践者のスポーツ価値意識＝「する」スポーツ価値意識評価尺度、②スポーツ観戦者・視聴者のスポーツ価値意識＝「みる」スポーツ価値意識評価尺度、③スポーツボランティアのスポーツ価値意識＝「ささえる」スポーツ価値意識評価尺度といった、新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発を究極的な目的としてきた。

ここでは特に、「する」スポーツ価値意識評価尺度の開発に焦点をあてて、3年間の研究のまとめと今後の研究課題について提示していきたい。

## 2. 3年間の研究のまとめ

### (1) 第1報（平成26年度）

第1報では、「する」スポーツ価値意識研究の重要性と展望について指摘する研究として、第1章（菊・茂木・功刀，pp.5-31）、第2章（中西，pp.32-46）、第3章（作野・霜島，pp.47-56）、そして第4章の1（藤田，pp.57-60）を挙げることができよう。はじめに、第1章では、先にも述べたように、1970年代以降におけるスポーツ価値研究をレビューしていくことで、スポーツ価値やスポーツ価値意識の概念規定を行うとともに、主として競技者を中心とする「する」スポーツ価値に関する個人レベルの実証的研究が展開されてきたことを指摘している。また、「みる」スポーツや「ささえる」スポーツの価値意識研究の可能性と将来展望について吟味している。

続いて、第2章は、スポーツ政策、いわゆる「スポーツ行政組織」という主体が望む（求める）スポーツ価値をKJ法によって内容分析を行っている。その結果、①個人的価値（スポーツは、活動・競争・達成・克服・自己表現といった人間の本源的な欲求＝プレイ欲求に応え、爽快感や達成感・充実感、楽しさや喜びの体得のほか〔内在的価値＝目的価値〕、ストレス解消などの精神的充足感や体力の向上、生活習慣病の予防、青少年の健全育成など、心身の健全な発達をもたらす〔外在的価値＝手段的価値〕）、②社会・生活向上価値（スポーツを通じた家族や地域との人間的な交流は、地域への誇りと愛着、連帯感等を醸成し、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域コミュニティの

再生・活性化につながる）、③鑑賞的価値（極限に挑戦するアスリートのひたむきな姿や、競技レベルの高いプロスポーツの試合などは、“みる”人に夢や感動、勇気を与えるとともに、スポーツへの関心や意欲を高める）、④経済的価値（スポーツ振興による関連産業の広がりや、新たな需要と雇用を創出するとともに、スポーツによる市民の心身の健康保持・増進、医療費削減等の効果をもたらす）、⑤国際的価値（スポーツによる国際交流は、言葉の壁や生活習慣の違いを超えて、同一のルールの下で互いに競い合うことにより、世界の人々との相互理解を促進し、国際的な友好と親善に寄与する）、そして⑥教育的価値（スポーツは、礼儀正しさ、マナーや規則を守る、協調性、社会力・生きる力のあるといった、よい人間を育てる）といった6つからなる「スポーツ価値体系（構造）」を仮説的概念モデルとして構築している。また、スポーツ政策の形成にあたっては、スポーツ文化の普及・振興に対する望ましい価値判断（内在的価値と外在的価値のバランス関係の形成・維持）が強く求められるということを強調している。

次に、第3章では、第2章と同じような視点と分析方法を用いて、基礎自治体（東京都26市5町8村23区の合計62）を調査対象に、6つからなるスポーツ価値体系を吟味し、同様の結果が得られている。とりわけ、スポーツ価値の捉え方が「みる」スポーツや「ささえる」スポーツにも拡大してきていることを指摘している。

最後に、第4章の1は、スポーツの教育的価値に焦点を絞り、学校教育分野（体育授業、健康安全・体育的行事、授業時間内に行われるクラブ活動、運動部活動、業間運動）におけるスポーツ価値とスポーツ価値意識について、学習指導要領をもとに分析している。その結果、戦後から現在までの学校教育分野におけるスポーツ価値が「身体」（4項目）、「能力」（5項目）、「態度」（6項目）、「情意」（4項目）、「社会」（2項目）、そして「思想」（1項目）といった6次元22項目によって整理できることを明確にしている。

このように、第1報では、スポーツ価値やスポーツ価値意識の概念規定、スポーツ政策におけるスポーツ価値体系（構造）、およびスポーツの教育

的価値の構造化など、「する」スポーツ価値意識評価尺度の開発に対する有益かつ実践的な示唆を得ることができたものと思料される。

## (2) 第2報（平成27年度）

第2報では、「する」スポーツ価値意識評価尺度の開発に関連する研究として、第1章の1（霜島・望月・木村，pp.5-12）、第2章（菊・茂木，pp.37-47）、第3章（中西，pp.48-61）、そして第4章（藤田，pp.62-72）を挙げることができる。

第1章の1では、「するスポーツ」の価値意識評価尺度の開発に向けて、個人的価値意識尺度（研究1）と社会的価値意識尺度（研究2）の2つの観点から、過去1年以内に運動・スポーツ実施経験のある310名のサンプルを用いて実証的に検討した。研究1では、26項目からなる個人的価値意識尺度に対する探索的因子分析（最尤法，プロマックス斜交回転）を行い、手段的価値を示す因子として「調和・生活基盤形成」「健康・体力づくり」といった2つの因子と、またプレイ欲求の充足を意味する「本質的価値」因子の合計3因子が抽出され、一定の弁別的妥当性と説明力があることが明確にされた。また、研究2においては、4次元36項目からなる社会的価値意識尺度〔「社会・生活向上価値」（19項目）、「経済的価値」（6項目）、「国際的価値」（2項目）、「教育的価値」（9項目）〕に対する確認的因子分析を行い、最終的には4次元33項目（「社会・生活向上価値」から3項目を削除）に修正した社会的価値意識尺度が提示された。なお、統計学的には多くの課題が残されてはいるが、次年度の本調査実施にとっては有益な研究成果であると考えられる。

第2章は、第1章で行われた実証的研究に対して、わが国におけるスポーツ価値意識のとらえ方の特徴、スポーツ価値意識の主体とプレイ欲求の重要性に関する指摘、およびスポーツを「する」「みる」「ささえる」といった多様なかわり方から新しい価値指標を開発することの意義と必要性など、多くの理論的示唆を提供している。とりわけ、「スポーツは無色透明で無価値に等しい文化である」ため、プレイ欲求をベースにしないことには主体的な価値形成が難しいことを指摘するとともに、

各自のライフステージに応じたスポーツを楽しむ価値形成のあり方が重要であることを強調している。また、プレイ欲求（内在的価値）を起点として積み上げられてきたスポーツという文化は、そこにいかなる外在的な社会の望ましさ（外在的価値）を付与されようとも、その時代や多様な社会の要求に対応しながら、今日まで生き延びてきたということを解説している。第2章では、「する」スポーツ価値（意識）における「プレイ欲求充足」というものの重要性を改めて示唆していると言ってもよいであろう。

第3章では、第1報で提示した「スポーツ価値体系」モデル（個人的価値、社会・生活向上価値、鑑賞的価値、経済的価値、国際的価値、教育的価値の6つからなる仮説的概念モデル）について再検討を行い、3つの研究結果が提示された。第一に、Sport Englandが1999年に公的に提示した報告書（Document）‘Best Value through Sport：The Value of Sport’を吟味し、上記の6つのスポーツ価値に「スポーツの環境的価値」（The environmental value of sport）を新たに付加して、7つのスポーツ価値体系モデルに修正した。ここでいう環境的価値とは、冷たいイメージとなりがちな都市環境をスポーツ・レクリエーション施設（公園、グラウンド、遊び場、多目的広場などのオープンスペース）が大きく変革するとともに、都市郊外にあっては景観構成のクオリティを改善する重要な役割を果たし、スポーツ・レクリエーション施設と都市環境との素晴らしい融合が創造されるという価値を意味している。また、スポーツは、環境への影響を抑える、新しい建設技術を開発するよう導いていくといった環境的価値をも認められている。第二は、こうした7つからなるスポーツ価値体系モデルを動態的な視点から捉え直し、「スポーツ価値のダイナミクス」について明確にした。具体的には、われわれ人間がスポーツ（文化）との多様なかわり方（する・みる・ささえる）を通して得られるスポーツ固有の楽しさや喜びこそが「中核的スポーツ価値」（目的的な個人的価値）であり、こうした価値享受が十分に尊重されるとき、「周辺的スポーツ価値」（手段的な個人的価値）をはじめ、教育的価値や社会・生活向上価値、経

経済的価値、国際的価値、鑑賞的価値、そして環境的価値などの「派生的スポーツ価値」が個人や社会全体にも創出されるという、スポーツ価値間相互の動的な力関係の重要性について示唆している。最後に、スポーツ庁が内部のガバナンス問題を超克し、スポーツプロモーション政策を策定し得るスポーツ行政組織へと発展していくために必要な課題として、①中核的スポーツ価値を基調とした「スポーツ概念」の定義づけ、②個別のスポーツ実定法（スポーツ個別法）の制度設計、③行政職員のスポーツ政策経営能力の向上と政策評価のためのスポーツ関連指標の開発、といった3つを提案した。第3章は、「する」スポーツ価値意識間のダイナミクスを検討する上で有益な研究結果であると思料される。

第4章は、第1報に続いて、昭和22年の学校体育指導要綱から平成21年の高等学校学習指導要領の中で設定されている「保健体育科の目標」の変遷について分析することで、学校教育分野におけるスポーツ価値がどのように捉えられてきたかを明確にしている。具体的には、学校教育におけるスポーツ価値（スポーツを手段とする教育目標＝スポーツの教育的価値）は、「身体」（5項目）、「能力」（11項目）、「態度」（15項目）、「情意」（12項目）、「社会」（3項目）といった5つの観点から46項目で捉えることができるという結論を導き出している。こうした研究結果は、「する」スポーツ価値意識における教育的価値意識尺度の開発に大きな貢献をすると言っても過言ではなからう。

### （3）第3報（平成28年度）

第3報では、「第1章 『するスポーツ』の価値意識評価尺度の開発：個人的価値意識と社会的価値意識に焦点をあてて」（霜島広樹・望月拓実・木村和彦）という研究課題で、「する」スポーツ価値意識研究が展開されている。

この第1章では、第2報（第1章の1）の研究結果を踏まえて、妥当性と信頼性がより担保された「スポーツ価値意識尺度」、つまり、「するスポーツ」の個人的価値意識測定尺度（研究1）および社会的価値意識測定尺度（研究2）の開発と作成を目的に研究が進められ、研究1と研究2のそれぞれで

予備調査と本調査を実施している。と同時に、こうした「する」スポーツ価値意識が「スポーツへの興味」「スポーツへの関与」「今後のスポーツ実施意欲」といったスポーツ行動関連要因や「QOL」という「生活の質」にどのような影響を及ぼすのかについて吟味することによって、スポーツ価値意識のスポーツ行動予測要因としての可能性までも検討している。

#### 〔研究1のまとめ〕

研究1は、「するスポーツ」の個人的価値意識尺度の開発に取り組んでいる。はじめに、予備調査では、「プレイ欲求充足」（6項目）、「健康・体力づくり」（3項目）、「医療」（3項目）、「心理的健康・発達」（6項目）、「社交」（6項目）の5次元24項目からなる個人的価値意識尺度を作成し、W大学スポーツ科学部（授業の受講生）147名（有効標本数）から回答を得ている。こうした5次元24項目に対して3回の探索的因子分析（主因子法、プロマックス斜交回転）を行い、最終的には5因子（次元）16項目からなる個人的価値意識尺度（累積寄与率60.0%）を構造化することができた。具体的には、「プレイ欲求充足」（3項目）という本質的価値 [1因子] と、「発達」（4項目）、「健康・体力づくり」（3項目）、「社交」（4項目）、そして「医療」（2項目）といった手段的価値 [4因子] の5因子構造がそれである。また、5因子16項目に対する確認的因子分析においても、概ね良好な適合度指標（CMIN/DF=1.635, GFI=.880, AGFI=.827, CFI=.934, RMSEA=.066）となっている。

続いて、本調査では、予備調査で作成された個人的価値意識尺度（5因子16項目）に対して健康・体力づくり（2項目）や心理的健康（3項目）に関連する5項目を追加し、「プレイ欲求充足」（3項目）、「発達」（4項目）、「健康・体力づくり」（5項目）、「社交」（4項目）、「医療」（2項目）、そして「心理的健康」（3項目）の合計6次元21項目を作成し、595サンプル（サンプル総数1,030からダミー項目を用いて削除した結果である）を分析データとして使用している。こうした6次元21項目に対して2回の確認的因子分析を行い、最終的には6次元18項目からなる個人的価値意識尺度を開発することができた（GFI=.896, AGFI=.851, CFI=.933,

RMSEA=.082となり、適合度指標に大幅な改善が見られ、AGFIは基準を満たさなかったものの、全体的に概ね良好な値であった。具体的には、「プレイ欲求充足」(3項目)という本質的価値[1因子]と、「健康・体力づくり」(4項目)、「医療」(2項目)、「心理的健康」(3項目)、「発達」(3項目)、そして「社交」(3項目)といった手段的価値[5因子]の合計6次元18項目からなる、「するスポーツ」の個人的価値意識尺度が開発できたのである。

最後に、こうした6次元18項目から構成される「するスポーツ」価値意識(個人的価値意識)が「スポーツへの興味」「スポーツへの関与」「今後のスポーツ実施意欲」といったスポーツ行動関連要因や「QOL」という「生活の質」にどのような影響を及ぼすのかについて、重回帰分析を用いて吟味している。その結果、「スポーツへの興味」(スポーツをする・みる・ささえることへの興味の喚起)については、「医療」を除く、「健康・体力づくり」「心理的健康」「プレイ欲求充足」「発達」「社交」といった5つの個人的価値意識が高い者ほど、スポーツへの興味が喚起されやすいということが明確にされ、約50%の説明力を有することが示された。また、「スポーツへの関与」(スポーツをする・みる・ささえるといった関わり強化)については、「健康・体力づくり」「医療」を除く、「心理的健康」「プレイ欲求充足」「発達」「社交」といった4つの個人的価値意識が高い者ほど、スポーツをする・みる・ささえるといった関わりを強化する傾向にあることが分かり、約50%の説明力をもつことが明確にされた。さらに、「今後1年間のスポーツ実施意欲」については、「健康・体力づくり」「心理的健康」「社交」といった3つの個人的価値意識が高い者ほど、今後1年間のスポーツ実施意欲も高くなる傾向にあることが明確にされた。ここで興味深い結果は、スポーツ価値の本質的価値である「プレイ欲求充足」という個人的価値意識が今後1年間のスポーツ実施意欲には全く影響を及ぼしていないということである。なぜ、このような研究結果になったのかについては、今後、慎重に検討していく必要があると思われるが、全体的には、「するスポーツ」の個人的価値意識がスポーツ行動関連要因に大きな影響を及ぼすという

研究結果を導き出したと言ってもよいであろう。一方、個人的価値意識とQOL(生活の質)との因果関係について見てみると、「医療」「心理的健康」「発達」「社交」といった個人的価値意識が高い者ほど、QOLも高くなる傾向にあることが示された。

このように、研究1においては、「するスポーツ」の個人的価値意識の構造とその測定尺度の開発と作成が行われるとともに、そうした個人的価値意識、特に手段的価値意識がスポーツ行動関連要因や生活の質に大きな影響を及ぼすということが明確にされた。

#### [研究2のまとめ]

研究2は、「するスポーツ」の社会的価値意識尺度の開発に取り組んでいる。はじめに、予備調査では、「社会・生活向上価値」(13項目)、「経済的価値」(7項目)、「国際的価値」(3項目)、そして「教育的価値」(8項目)の4次元31項目からなる社会的価値意識尺度を作成し、W大学スポーツ科学部(授業の受講生)147名(有効標本数)から回答を得ている。こうした4次元31項目に対して2回の確認的因子分析を行い、統計学的には多くの課題を残す結果ではあるが(GFI=.793, AGFI=.726, CFI=.940, RMSEA=.102)、最終的には4因子(次元)18項目からなる社会的価値意識尺度を構造化することができた。具体的には、「社会・生活向上価値」(7項目)、「経済的価値」(4項目)、「国際的価値」(2項目)、そして「教育的価値」(5項目)の4因子構造がそれである。

このように、予備調査では、第2報(第1章の1)で挙げた問題点を解決するには至らなかったため、続く本調査では、予備調査で用いたオリジナルの4次元31項目について、スポーツマネジメントを専門とする教員ならびに協力班員との協議を通じて、各質問項目のワーディング(特に、文頭表現・文末表現など)に修正を加えた。この修正によって、「社会・生活向上価値」(12項目)、「経済的価値」(7項目)、「国際的価値」(4項目)、そして「教育的価値」(8項目)の4次元31項目からなる社会的価値意識尺度を新たに作成し、595サンプル(サンプル総数1,030からダミー項目を用いて削除した結果である)を分析データとして使

用している。こうした4次元31項目に対して2回の確認的因子分析を行い、最終的には4次元17項目からなる社会的価値意識尺度を開発することができた (GFI=.888, AGFI=.848, CFI=.942, RMSEA=.086となり、依然として基準値に満たない指標もあるが、1回目の結果から大幅な改善がみられた)。具体的には、「社会・生活向上価値」(6項目)、「経済的価値」(3項目)、「国際的価値」(3項目)、そして「教育的価値」(5項目)の合計4次元17項目からなる、「するスポーツ」の社会的価値意識尺度が開発できたのである。

最後に、個人的価値意識の分析と同じように、こうした4次元17項目から構成される「する」スポーツ価値意識(社会的価値意識)が「スポーツへの興味」「スポーツへの関与」「今後のスポーツ実施意欲」といったスポーツ行動関連要因や「QOL」という「生活の質」にどのような影響を及ぼすのかについて、重回帰分析によって検討している。その結果、「スポーツへの興味」については、「経済的価値」を除く、「社会・生活向上価値」「国際的価値」「教育的価値」といった3つの社会的価値意識が高い者ほど、スポーツへの興味が喚起されやすいということが明確にされ、約60%の説明力を有することが示された。また、「スポーツへの関与」については、「社会・生活向上価値」「国際的価値」といった2つの社会的価値意識が高い者ほど、スポーツをする・みる・ささえるといった関わりを強化する傾向にあることが分かり、約56%の説明力をもつことが明確にされた。さらに、「今後1年間のスポーツ実施意欲」については、「社会・生活向上価値」意識が高い者ほど、今後1年間のスポーツ実施意欲も高くなる傾向にあることが明確にされた。ここで興味深い結果は、スポーツを通して多様な地域住民との出会いや絆づくり、仲間との交流、および地域コミュニティの再生などの「社会・生活向上価値」をスポーツ価値として望む(求める)者ほど、今後1年間のスポーツ実施意欲が高くなる傾向にあるということである。いうなれば、「スポーツによる豊かな地域生活の形成」がスポーツ価値とし強く認識されているということなのである。集約的には、「するスポーツ」の社会的価値意識がスポーツ行動関連

要因に大きな影響を及ぼすという研究結果を導き出したと言ってもよからう。翻って、社会的価値意識とQOL(生活の質)との因果関係について見てみると、「社会・生活向上価値」意識が高い者ほど、QOLも高くなる傾向にあることが示され、予測通りの結果であると考えられる。

このように、研究2においては、「するスポーツ」の社会的価値意識の構造とその測定尺度の開発と作成が行われるとともに、そうした社会的価値意識、特に「社会・生活向上価値」意識はスポーツ行動関連要因や生活の質に大きな影響を及ぼすという結果が得られたと言っても過言ではない。

### 3. 今後の研究課題

これまでに整理してきた「3年間の研究のまとめ」を踏まえ、ここでは、「する」スポーツ価値意識研究における今後の研究課題について、いくつか指摘しておきたい。

第一は、第1報(第2章)および第2報(第3章)でも提起したが、政策対象としての「スポーツ概念」をどのように定義づけるかである。現在、「運動・スポーツガイドライン(仮称)策定に向けた有識者会議」において、「スポーツガイドライン(仮称)」が議論されているが、そこでは「運動(狭義)とスポーツの分類(違い)」でさえ明確にすることができていない。スポーツ価値意識を研究する場合、その前提は「スポーツとは何か」といったスポーツ概念を明確に捉えておく必要がある。なぜならば、野球やサッカー、バレーボールなどの「プレイ欲求の充足」を求めて自発的に行われる運動、いわゆる「スポーツ」をしている人と、軽い体操や散歩・ウォーキング、トレーニングやフィットネス、転倒予防運動などの人間生活上のある種の「必要充足」のために行われる運動(健康・体力づくり運動)をしている人とは、運動やスポーツに対する価値意識が大きく異なることが容易に予測できるからである(図2参照)。そのため、スポーツ価値意識に関する調査を実施する場合は、「スポーツをしている人」と「健康・体力づくり運動をしている人」とを峻別する必要があると言っても過言ではない。第2報(第1章の1)では、「するスポーツ」として両者が混在して

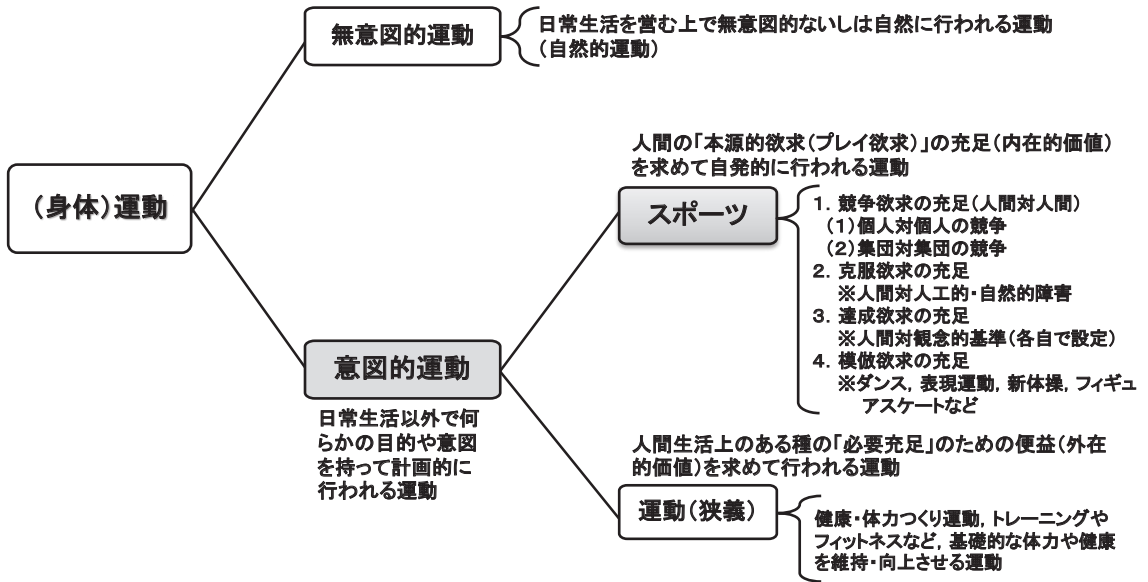


図2 「プレイ論」からみた(身体)運動の分類

おり、サンプルにもそれが反映されていたのかもしれない。参考までに、スポーツ庁（健康スポーツ課）が行った「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（平成28年11月調査）では、この1年間に運動やスポーツを行った者は63.5%であり、運動・スポーツの種目については、「ウォーキング」を挙げた者の割合が38.7%と最も高く、「体操」（15.0%）、「トレーニング」（14.0%）、「ランニング・マラソン・駅伝」（10.4%）という順になっている。

第二に、第3報（第1章）では、「する」スポーツ価値意識を独立変数とし、「スポーツへの興味」「スポーツへの関与」「今後のスポーツ実施意欲」「QOL」（生活の質）などを結果要因（従属変数）とする「スポーツ行動予測モデル」を採用して分析を進めた。こうした分析方法は、これからスポーツ行動を起こそうとする人にどのようなスポーツ価値意識を醸成することが重要であるかを把握する上では有益である。しかしながら、すでに運動やスポーツ活動を実践している人々のスポーツ価値意識にどのような違いがあるのかについては吟味することができない。したがって、21世紀生涯スポーツ社会を確実なものにしていくためには、今後、以下に示す3つの観点からの分析も必要であろう。1つ目は、先にも述べたように、「スポー

ツをしている人」と「健康・体力づくり運動をしている人」とではスポーツ価値意識にどのような違いが見られるのかといった分析である。2つ目は、「豊かなスポーツ生活」という観点からの分析である。第3報（第1章）では、「スポーツへの関与」という、スポーツをする・みる・ささえるといった関わり強化の合計点を従属変数としたが、スポーツをする・みる・ささえるといった多様な関わり方が日常生活にどの程度定着されているかを意味する「スポーツ生活」の現状（「する・みる・ささえる」という豊かなスポーツ生活、「する・みる」「する・ささえる」「みる・ささえる」という中程度のスポーツ生活、「する」のみという運動生活、「みる」のみや「ささえる」のみのスポーツ生活など）によってスポーツ価値意識にどのような違いが見られるのかについてのスポーツ生活分析も必要であると思われる。3つ目は、第1報（第1章 [菊・茂木・功刀], p.32)でも指摘されているが、幼児期から高齢者までの各ライフステージの特徴に応じた「ライフステージ・スポーツ論」に基づく「する」スポーツ価値意識研究の展開が求められる。それゆえ、今後、「ライフステージに応じたスポーツ関与（する・みる・ささえる）」を促進していくためには、ライフス



テージ別（幼児期－小・中・高校期－大学等・就職期－結婚・出産期－……－高齢期など）に「する」スポーツ価値意識の違いを詳細に分析していくことが喫緊の課題であると考えられる。

最後は、第2報（第3章）でも指摘したが、「周辺のスポーツ価値」や「派生的スポーツ価値」といった外在的価値に左右されないスポーツ価値意識研究の展開が必要である。いうなれば、「スポーツのコア・バリューとは何か」を探究することでもあろう。第3報（第1章）の研究結果では、「プレイ欲求充足」という本質的価値（「する」スポーツのコア・バリューと想定していたはずが）がスポーツ実施意欲やQOLには影響を及ぼさないということであった。現代社会においてはもはや、スポーツには「プレイ欲求充足」以上のコア・バリューがあるのか、それともスポーツの外在的価値の方が日本人にとっては有効なのか、こうした研究課題への挑戦が求められていると言ってもよい。今後、スポーツ価値意識に関する国際比較研究も視野に入れながら、スポーツのコア・バリュー研究についても多面的な視座から鋭意検討していくことを願いたい。

したがって、今後、こうした研究課題を超克していくことによって、3年間で検証されてきたスポーツ価値がより精緻化されるとともに、スポーツ価値意識評価尺度の妥当性と有効性がより一層高まり、複雑化する現代社会においてスポーツの文化性やインテグリティが高まっていくことを大いに期待したい。

## 参考文献

菊 幸一（2016）第1分科会「スポーツの価値」について考える。生涯スポーツ・体力づくり全国会議2016－人・スポーツ・未来－資料集（スポーツ庁）：39-44.

公益財団法人 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会（2015）平成26年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発－第1報－」.

公益財団法人 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会（2016）平成26年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発－第2報－」.

中西純司（2012a）「文化としてのスポーツ」の価値. 人間福祉学研究(関西学院大学)5(1)：7-24.

中西純司（2012b）スポーツ政策とスポーツ経営. 体育・スポーツ経営学研究26：3-15.

中西純司（2016）我が国のスポーツ政策における「スポーツの価値」体系（構造）の特徴と課題. 生涯スポーツ・体力づくり全国会議2016－人・スポーツ・未来－資料集（スポーツ庁）：45-50.

スポーツ庁. トップ：政策：審議会情報：運動・スポーツガイドライン（仮称）策定に向けた有識者会議. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa04/sports/1338692.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/sports/1338692.htm), (参照日2017年3月20日).

スポーツ庁健康スポーツ課（2016）「スポーツの実施状況等に関する世論調査（平成28年11月調査）」[http://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/other/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/02/15/1382031\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/___icsFiles/afieldfile/2017/02/15/1382031_001.pdf), (参照日2017年3月20日).

Sport England (1999) Best value through sport : the value of sport. <http://www.toolkitsportdevelopment.org/html/resources/CD/CD24320F-E717-4A69-BA37-0E19E56B659F/best%20value%20through%20sport%20booklet.pdf>, (accessed 2017-03-20).

## 第5章 3年間のまとめと今後の研究課題： 「みる」スポーツ価値意識研究の課題と展望

菊 幸一<sup>1)</sup>

### 1. 「みる」スポーツの系譜とその価値

人間にとって「みる」ことは、言葉以前に情緒や感性を働かせて、身体をふるえさせ、行動や行為に結びつける原点となる五感の1つであったと言えよう。古代ローマ時代におけるコロッセオで展開されたスペクタクル（見世物）としての格闘試合は、冷静なロゴス（言葉）を介さないで「みる」ことを通じた直截的な剥き出しの感情を沸騰させるがゆえに、あの巨大な帝国を滅亡にまで導いた。それは、この格闘を「みる」者たちが、その興奮を人対獣では飽き足らず、人対人の殺し合いを「みて」興奮するまでに、その人間性を墮落させるに至ったからである。また、野次馬に代表される理性を欠いた人々の群れは、「群衆」として常にときの権力者たちを震撼させるとともに、警戒と取り締まりの対象でもあった。すなわち、ことスポーツに関連した人間の「みる」行為それ自体を取り出せば、その社会的価値は著しく貶められてきた歴史的系譜を刻んできたことに気付かされるのだ。

翻って、我が国のスポーツの歴史を辿ってみても、例えば大正時代における早慶野球中止の背景に、両校応援団による、特に野次連と称する苛烈な相手への集団的な誹謗・中傷があった事実を思い起こせば（菊、1993, pp.239-240）、観戦行為に対する社会的な目は非常に厳しく、その評価は「する」スポーツの教育的価値とは比べようもなく低いものであったことが理解されよう。むしろ、「する」スポーツの教育的価値がその理念的・イデオロギー的な側面において、社会的価値として高く評価されればされるほど、「みる」スポーツの問題性がクローズアップされ、その価値を言語的なレベルで冷静に考えることさえしなくなると

いう悪循環が引き起こされることになるのだ。

したがって、少なくとも近代スポーツが一部の特権階級のものであり、その価値が、例えば「アスレティズム（athleticism）」と呼ばれるような「する」スポーツの価値に限定されたアマチュアリズム全盛の時代にあっては、「みる」スポーツの価値はほとんど顧みられることはなかったのである。「ほとんど」というのは、その例外もあるということだ。それは「賭け（ギャンブル）」の対象としてのスポーツに対する「まなざし」であり、そこでの「みる」行為の重要性にかかわっている。

「勝敗の未確定性」という「する」スポーツの結果に対する予測に金銭をかける行為は、ときの上流階級やブルジョアジー（中産階級、産業資本家）に止まらず、広く労働者階級にいたるすべての社会層を巻き込んで、その確率に真剣に賭けることの楽しさを生み出す。その予想を判断するための情報収集には、現場の熱狂とは正反対に常に冷静さが必要であり、真剣な数字と情報（言葉、ロゴス）を複雑に組み立てることによる適正な論理（ロジック）が求められるのだ。それは、当然のことながら、「する」スポーツの当事者（プレイヤー）に対する、全力で真剣な競い合いを要求すると同時に、その主宰者に対しても「公正・公平」な競争条件の整備とフェアプレイへの監視を義務付ける。すなわち、歴史的にみれば「みる」スポーツの価値は、観客の「賭け」を通じて「する」スポーツにフェアネスを要求し、これを生み出す原動力にもなったと考えられよう。エリアス（1995, p.200-201）は、近代スポーツにおける「する」スポーツの「面白さ」を保障する重要なプレイ要素であるフェアネスは、このような「みる」スポーツの価値との関係によって相互依存的に社会に同時発生した現象だと述べている。

このような「みる」スポーツにおける「賭け」

1) 筑波大学

は、何も直接的な金銭授受を伴うギャンブル行為だけに特定されるものではない。公明正大なフェアな条件のもとで勝敗の結果を享受する意味は、古代ギリシャの王の決定から始まって、地域共同体における来たる年（未来）の生産の豊穡や吉凶を占う人類史的な行為、あるいは現代人における最頂のチームや人物に対する一体感（思い入れ）を味わい、明日への活力を生む等々の重要な契機となるところにある。そして、何よりも近代社会を成立させる業績主義は、公正・公平な自由競争を絶対条件として、その結果に全幅の信頼を寄せる社会秩序を構成する原理となっている。スポーツを「みる」ことは、未知の結果に思いを「賭ける」ことを通じて、それらの意味を享受し、価値を形成していく重要な行為の1つとなっているのではなかろうか。

ところで、本研究の第1報では、主にスポーツ社会学分野の価値意識研究が、「するスポーツ」における規範意識（望ましいもの）と欲求性向（望まれるもの）との関係を二項対立的に把握する現状分析に止まっていること、それゆえに新たな価値意識研究のパラダイム・シフトを両者の連続性から見出すことができるような価値尺度によって構成しきれていない点を課題として挙げておいた。また、この限界を克服するためには、むしろ「みるスポーツ」や「ささえるスポーツ」にみられる価値意識を明らかにしながら、これらの内容と「するスポーツ」にみられる価値意識とを関連させて、社会における多面的な因子構造を明らかにしていくことの必要性を指摘した（菊・茂木・功刀, 2015, p.31）。

その意味では、「する」スポーツにおける規範意識と欲求性向との二項対立関係は、当初からその価値を社会の中における「みる」スポーツの価値との関係から切り離して考えてきた結果とも考えられよう。また、現代社会における「みる」スポーツの価値尺度と「する」スポーツのそれとがどのように関連づけられるのかも、「みる」スポーツの重要な価値として考えていかなければならない課題であろう。

教育の中で「みる」スポーツの価値が、「する」スポーツの価値から切り離されてきた背景にはさ

まざまな要因が考えられるが、その1つとして真剣に「みる」ことの中に含まれている多面的な「賭け」の要素の価値が、むしろ社会悪としてとらえられてきた歴史社会的背景に思いを致す必要があると思われる。また、そうであるがゆえに、言葉を介さない「みる」ことの社会悪がさらに助長されてきたのではないかとも考えられる。

したがって、「みる」スポーツの現代的な課題の1つは、このように歴史社会的に貶められてきた「みる」スポーツの現代的な大衆化現象を前にして、まずはいかにその社会的、文化的価値の重要性を明らかにする価値尺度を構成することができるのかということであり、最終的には「する」「ささえる」スポーツ享受との相互作用によって、その価値をさらに高めていく展望（可能性）とそれを実現していくための課題を見出していくことにあると思われる。

## 2. 3年間の研究のまとめと若干のコメント

### (1) 第1報（平成26年度）

第1報では、「みる」スポーツに関連した研究として、第4章の2（望月, 2015）、第5章（松岡・醍醐・本間・青木, 2015）、資料編（醍醐, 2015）を挙げることができよう。

第4章の2では、学校体育における「みる」スポーツの扱い方を問題にする。なぜなら、「みる」について育む教育が行われなければ、スポーツに対する多様なかわり方の1つである「みる」ことの価値を意識し、理解する学習の機会がなくなってしまうからである。結果として、学習指導要領全般では「鑑賞」という言葉で美術や音楽を中心にこれを扱っているが、体育では中・高校の体育理論においても「する・みる・支える」の中で扱われており、運動領域ではダンスや器械運動などの演技や表現などの領域でのみ言及されていた。そして、後者の運動領域での扱いは、ダンスに典型的にみられるように、授業プログラムや授業評価尺度に必要な要素として「他者を見て自分の動きを直す」「動きの良し悪しを判断する」ために用いられており、トップレベルの競技大会やプロ・スポーツの観戦といった「みる」スポーツの価値自体の学習を企図したものにはなってい

ないという。そのため、「みる」スポーツは、「支える」と共に特別活動や運動部活動で行われていることから、これらを活発にしながら授業プログラムにおいても学習できる機会を作る必要性があると述べられている。

他方、同じく第4章の2では、中・高校の体育理論の中で「みる」スポーツがどのような内容として取り上げられているのかについては、十分に言及されていないように思われる。確かに、学習指導要領上では、中学校で「する」だけでなく「みる」「支える」などの多様なかわり方があること、高等学校でスポーツの技術や戦術、ルールが「メディアの発達」に伴い変わり続けていること、等の言及に止まっているような印象を受ける。しかしながら、教科書レベルでは、例えば中学校で、直接観戦とメディアによる観戦の区別や「いろいろな視点からスポーツを見る」見方について探究するコーナーなどが設けられ、自分がスポーツの何に興味・関心を持って見ようとしているのかを学習する機会が意識されている。また、これと「文化としてのスポーツの意義」（中学校3年次での扱い）がリンクして学習されるであろうことは十分に考えられよう（森・佐伯ほか、2017, pp.116-117, p.122, pp.135-141）。高等学校の体育理論では、「スポーツとメディア」との関係がトピックスとして取り上げられ、メディアがスポーツに及ぼす影響を考える中で「みる」スポーツの影響による功罪や、「する」スポーツとの関係においてその価値を高める課題について考えさせようとしている。これには、「文化としてのスポーツ」の項で述べられている「さまざまなスポーツ観戦の仕方」の学習が関連してくると思われる（和唐・高橋ほか、2017, pp.122-125）。

次に、第5章では、その後の第2報、第3報において「みる」スポーツの価値尺度を構成する概念を検討して要素化し、これを実証していくための基礎的な文献レビューが行われている。ここでは、広く諸外国における研究をレビューしながら、主にスポーツ観戦動機から見たスポーツの価値を次の5つの要素に分類している。

#### ①競技（パフォーマンス）の卓越性

スポーツの審美性、卓越性から得られる喜びや

楽しみ

#### ②結果の予測不能性

スポーツの予測不能性、ドラマ性から得られる緊張や驚き

#### ③応援による代理的な高揚感、達成感

選手やチームの喜びや達成を自分のことのように感じる

#### ④スタジアムでの社交

他の人との交流

#### ⑤観戦による気晴らし、現実逃避

日常や日常の悩みから離れる

そして、上記①～③は「みる」スポーツにおける「本質的価値」、上記④、⑤は「手段的価値」として階層化された。この階層化の根拠はあまり詳細に説明されていないが、スポーツ観戦の個人的価値に関連した直接的な心理的効用を示している要素とその経験に伴って他の人との交流や気晴らしが付随するという意味でカテゴリー分けされているようである。

また、①と②とが分けられているが、スポーツ観戦の本質的なエンターテインメント性を別々に位置づけたこの分類は、もちろん前述したように、我が国の近代スポーツの歴史からみると、金銭授受を伴う②の要素を「みる」スポーツの価値から明らかにできにくい側面を持っている。しかし、「賭け」の要素をそれ以外にも広げれば、これから何が起るかわからない自らの運命を仮託する人生の価値やライフスタイルを構築する契機にもつながるといった、重要な精神的要素として敷衍化できる可能性を持っていると考えることができよう。

さらに、同じく第5章では「みる」スポーツの社会的価値や教育的価値が検討されている。前者は、スタジアムを「第3の場所」として社会的連帯意識を促進する場ととらえ、「みる」スポーツがSense of CommunityやSocial Capitalなどの概念と関係すること、あるいは企業としてのプロ・スポーツ組織にはCSR（Corporate Social Responsibility、企業の社会的責任）が伴い、「みる」スポーツを通じたチームとファンとの心理的結びつきが重視されるという。後者については、学校体育（青少年）とスポーツイベントがそれぞれ

れどのような目的的価値と手段的価値を持っているのかが検討されている。しかし、結論としては、「スポーツをみることと『生涯学習』には距離があるように感じられ、『みるスポーツ』を『教育』や『学習』するという違和感を拭い去ることができない。スポーツ観戦は娯楽であり余暇（つまり仕事や教育に割かれる時間の余った時間で行う活動）であるというこれまでの考え方によって目的的価値・手段的価値の分類もまた研究者の価値観に大きく左右されるだろう」（松岡・醍醐・本間・青木、2015、p.78）と述べられている。

確かに、従来の余暇観や娯楽観では「みる」スポーツは「する」スポーツに付随する単なる現象であり、自然現象として半ば放置されてきたのであろう。歴史的には、それゆえに「みる」スポーツが起因する負の社会的評価は、その文化的享受の質を向上させられないままに、例えば近年のイギリスではサッカーフーリガンを生み出し、FIFAが特にファン（サポーター）による人種差別（racism）への反対運動に本腰を入れなければならない事態を招いているようにも思われる。現代社会に求められている「みる」スポーツの価値への探究は、個人的なレベルの心理的効用がどのような文化的価値や社会的価値に洗練され、それが発育発達期におけるどのような教育的価値によって形成される可能性があるのかを明らかにすることにあると考えられる。「みる」スポーツの価値を「する」スポーツの価値と区別しながらも、両者の価値をどのような関係性によってつなぐことで、その相乗的効果を高めることができるのかを真剣に考えるべき時期に来ているのではなからうか。

最後に資料編では、日本のメディアにおけるスポーツの価値・価値意識に関する文献がレビューされている。

日本における「スポーツとメディア」「メディア・スポーツ」研究では、メディアが半ば恣意的にスポーツの価値を作り出す側面を持つことに焦点が当てられており、その取捨選択という行為はすべて作り手であるメディア側の価値意識に基づいているといっても過言ではないという。例えば、新聞では「男らしさ女らしさ」「地域的アイデン

ティティ」「家父長制」「たて社会」「師弟愛」など、我が国における支配的な価値やイデオロギーを示し、テレビでは、特に音声が「ストイックな鍛錬」「忍耐・根性」「権力者への盲従」等の価値やイデオロギーのディスクールを形成していると考えられている。これに対して、スポーツの本質である競技の偶然性や賭けの性質は無視され、新鮮味のない固定的な「スポーツによる人間形成」「教育の一環」「チームのための犠牲」「純真さ」「郷土の誇り」などといった言説による価値・価値意識が表明されているとするメディア批判が存在する。

このようなメディアを通じたスポーツ観戦が、その本質を屈曲させることすら可能であるという懸念に対して、メディア側も送り手と受け手の二項対立的なとらえ方の限界を克服すべく、視聴者からの生のメッセージを積極的に取り入れていく傾向にある。加えて、ソーシャル・メディアの出現は、メディアを通じた双方向のコミュニケーションを可能にし、受け手側から発信されたメッセージを、すなわち受け手自らの価値意識を、メディアにのせることで価値を作り出す側にも成り得る事態となっている。カルチュラルスタディーズをはじめとする批判学派的「受け手」概念では、このような事態がマスメディアの接触者を能動的な「受け手」から、積極的な「読み手」へと変化させているととらえているという。

確かに、このようなメディアをめぐる<作り手-受け手>の状況変化は、メディアを通じた「みる」スポーツ享受が一方的な享受であった前提を覆して、受け手側がメディア側の作り手と同様に、メディアを通じてスポーツの価値や価値意識に影響を与える可能性を予感させる。しかし、それはメディア批判の側にいた受け手としての大衆が、むしろその批判を通じて得られた情報への信頼に基づいて価値や価値意識形成を行ってきたという前提を自ら揺るがす事態を引き起こすことにもなっているのではないだろうか。事実、我々は、昨今の某国大統領から発信されるtwitterというメディアを通じた、わずか数行にも満たないメッセージ（つぶやき）が、世界の政治状況に与える影響の大きさに震撼とさせられている。それは、

事実でなくてもよいのだ。それを受けとめる人々さえいけば、嘘が真実になってしまう、いわば“post truth”が横行することを許容してしまうのである。

このような無責任な受け手側からの発信がメディアの発達によって可能となった今日において、メディアを通じた「みる」スポーツ享受の文化性（及びその質の向上）は、今後ますます問われざるをえなくなるであろう。つまり、「みる」スポーツにおける価値形成が、従来の＜作り手－受け手＞関係のみならず、受け手の側同士のコミュニケーションによっても、決して望ましくない方向に導かれていく可能性を予感させるのである。その意味から、第四の権力と呼ばれるメディアを誰もが使いこなせる時代において、その権力性を利用する形で自らのエゴイスティックな反社会的価値を流布することも意図的には可能になるだろう。だからこそ、メディアを通じた「みる」スポーツの価値尺度を設定する目的は、その価値基準のあり様や変数の偏差などを測定することで、メディア・スポーツにおける、より望ましい「みる」スポーツの価値形成を行うための課題や方法を探ることにもつながっていくと考えられるのだ。

## (2) 第2報（平成27年度）

第2報では、第1報の主に第5章「みるスポーツの価値に関するレビュー」を踏まえ、第1章の2（本間・松岡）において、スポーツ観戦による心理的効用に着目し、これを個人に対する効用と集団にもたらされる効用とに区別した上で、これらの包括性を階層化することを試みている。また、内外の先行研究からこれらに該当する質問項目を選定し、予備調査を通じて「みる」スポーツの価値意識評価尺度の妥当性を検討した。

具体的には、第1報で抽出した5つのスポーツ観戦動機をスポーツ観戦の個人的価値における因子としてとらえ、それぞれ「P：パフォーマンス」「D：ドラマ」「A：達成」「S：社交」「E：逃避」とした。また、スポーツ観戦における社会的価値については、人々がスポーツを観戦することによる社会的な影響力を検討することで概念化される

とし、これを「みる」スポーツを通じた集団（地元地域や国）への帰属意識にかかわる「集団的アイデンティティ」に着目することによって示した。すなわち、スポーツ観戦が社会集団に対してどのような価値をもたらすことができるのかについての個人の認識、を問う形で価値意識の範囲を限定して測定項目を検討した結果、スポーツ観戦を通じて「地元地域や国（の人々）」に対し、個人がどの程度「思い入れ」「親近感」「目標、考え方や意見の共有」「共通点」「絆の強化」「愛着の強化」「交流の活発化」「良い関係」を感じたり、評価したりしているのか、についての8項目が抽出されたのである。

また、「みる」スポーツの結果要因として、「スポーツへの興味」「スポーツへの関与」「QOL」を高めることが予測されるため、個人的価値意識や社会的価値意識との関係について、各因子の妥当性が検討されることになった。

第2報における研究目的は、以上のように概念的に検討された価値尺度測定項目の妥当性を、予備調査の結果を通じて統計的に検討し、次年度の本調査に向けて準備することであった。その結果、直接的観戦とメディアを通じた間接的観戦とに分けて、個人的価値測定尺度、社会的価値測定尺度、結果要因測定尺度における各因子の信頼性を検討したところ、いずれも統計的にはその信頼性が確認されるとともに、2つの観戦タイプにおける内的整合性も確認されることになった。

ただ、予備調査では、モデル適合度の基準に満たない、各因子の弁別性が確認されないといった課題が残されたことから、本調査に向けた測定項目のさらなる精査が必要なこと、また、社会的価値の概念については1因子構造で項目の信頼性を測定したが、集団的アイデンティティの中でも、感情的な愛着と同一化意識の概念的差異を反映した項目を設定することで、その因子構造の細分化から「みる」スポーツの結果要因としての興味や関与との関係性がさらに明らかになる可能性があること、などが課題として残された。また、今回実施した予備調査において、「みる」スポーツの個人的価値、社会的価値、価値意識の結果要因に相互に関係があることが示されたことから、図に

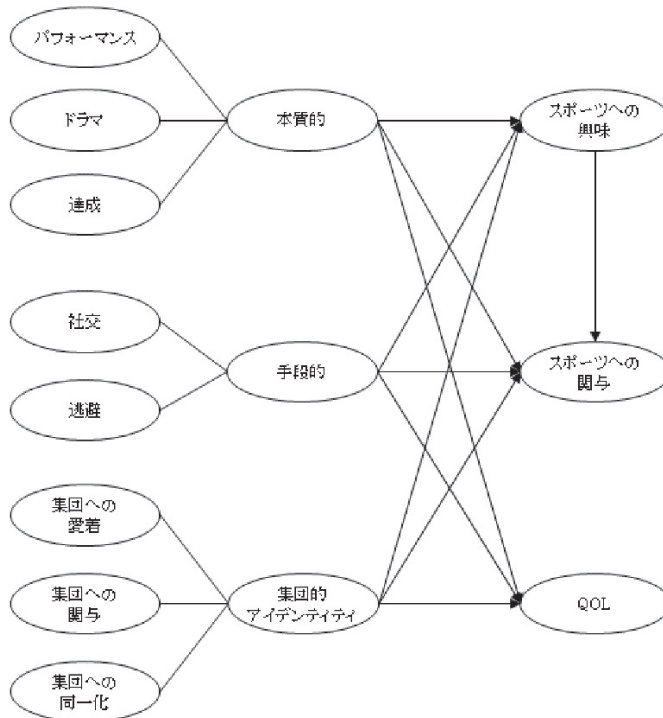


図 スポーツの価値意識とスポーツへの興味、関与に関する態度モデル  
(本間・松岡, 2016, p.18より引用)

示されたような仮説モデルが設定され、本調査において検証されることとなった。

第2報においては、尺度項目の妥当性が慎重に検討され、本調査に向けてのさらなる尺度項目の精査へのヒントが与えられるとともに、図に示されたようなモデルが「みる」スポーツの価値意識からも、同様にモデル化できる可能性が示されたことは、大きな成果といってよいだろう。なぜなら、「みる」スポーツの文化的享受の質を高める上で、特に日常生活へのライフスタイルに対する1つ影響を示すQOLとの関係を明らかにすることは、「みる」スポーツのプロモーションをスポーツそれ自体のあり方から考えていく上で、非常に重要な要因と根拠を与えてくれるからである。

その際、モデル全体の適合度からみると、個人的価値意識における「本質的価値」と「手段的価値」の2つのカテゴリーをもとにした階層化モデルの方が（そうでない場合より）優れているとの示唆は興味深い指摘であると思われる。「パフォー

マンス」「ドラマ」「達成」といった因子で構成される「みる」スポーツへの個人的価値意識は、いわば「みる」スポーツの楽しさや面白さ自体を評価しており、この「楽しさ」「面白さ」に端を発して手段的価値や社会的価値とどのように関係してくるのかが、よりよく理解される可能性があるからである。しかしながら、図の態度モデルでは、本質的価値からみた「個人的価値における手段的価値」や集团的アイデンティティによって因子化されている「社会的価値」との相互関係については、あまり言及されていないように思われる。

### (3) 第3報（平成28年度）

第3報では、第2報の予備調査に引き続き、第2章（本間・松岡）によって本調査が行われたので、その結果と考察を取り上げる。

「みるスポーツの価値意識に関する研究」と題された第3報（第2章）では、前述したように、第1報、第2報で整理されたスポーツ観戦におけ

る価値意識の構成概念、及び開発された測定尺度を援用して価値意識が個人のスポーツに対する興味や行動と、あるいはQOLに関する認識とどのように関係しているのかを実証的に明らかにしようとした。その際、その価値が及ぶ範囲によって個人的価値と社会的価値とに分けて検討を進めてきたことから、その結果要因との関係においても認識論的には別々に検討される方針がとられた。つまり、第2報で概念化されたスポーツへの興味喚起（興味をかき立てることができる）と、総合的関与（関わりを強めることができる）という結果要因については、個人的な興味あるいは総合的関与と、社会的な興味あるいは総合的関与を弁別して、個人的価値意識からみた結果要因との関係と、社会的価値意識からみた結果要因との関係を分けて分析したということである。また、価値意識とQOLとの関係については、個人的価値が個人のQOLに影響を与えるかについてのみに、検討が行われた。

次に、第2報で行われた尺度の妥当性検証では、いまだその検証において十分な妥当性が確認されていないとして、価値意識測定項目が次のように修正された。すなわち、個人的価値意識については、5因子19項目から7項目を削除して5因子12項目とし、社会的価値意識については8項目から内容が重複する2項目を削除して6項目としたのである。測定尺度の妥当性・信頼性については、統計的に各因子とも比較的緩やかな基準ではあるものの、その内的整合性が認められた。ただ、個人的価値意識における本質的価値と手段的価値の弁別性は認められなかったが、これについては個人的価値意識5因子の高次因子にあたる構造であり、結果要因の検討を進める上で重要な因子構造であるとの理由からそのまま採用されている。

ただ、今回のデータにおいて弁別性が認められなかった要因としては、データ収集の限界が挙げられているものの、果たしてそれだけなのかについては、今後慎重な検討が必要かもしれない。なぜなら、個人的価値意識における本質的価値と手段的価値との相関係数の高い値が、この2つの価値のどのような質的関係性を表わしているのかは、「みる」スポーツにおける楽しさや面白さを

生み出すスポーツのプロダクト特性それ自体の影響範囲の広さを意味しているともとらえることができるからである。

さて、価値意識と結果要因との関係については、重回帰分析の結果、直接観戦、間接観戦ともに本質的価値がスポーツ観戦への興味を喚起するということであった。この結果に対する考察では、「実務現場において、マーケターはスポーツの中核的要素に対して無力であるものの、スポーツプロダクトの魅力をもとに形成しているのはやはりスポーツ自体がもつ特性に由来する価値」（本間・松岡, 2017, p.30）であると述べられている。が、逆に言えば、「みる」スポーツが、スポーツプロダクトの中核的要素を要求している直接的で、重要な影響力を発揮しているとも言えるわけで、「みる」は「する」に対して、このような相互依存関係によって成立しているスポーツプロダクトへのさまざまな影響力を行使できる主体の1つであると考えられる。だとすれば、マーケターを含むあらゆるステークホルダーが、スポーツプロダクトに無力であるはずがないと考えられる。むしろ「みる」スポーツの価値を研究することの意義は、その価値の実態を明らかにしてこれを健全に高めることが、スポーツプロダクトに対して多様な影響力を持っていることを明らかにすることにあるのかもしれない。

また、もう1つの成果として、これまでの「みる」スポーツ研究の成果が直接観戦を対象にしたものであったのに対して、本研究が間接観戦による価値との比較から、むしろ直接観戦だけでは明らかにされなかった間接観戦によって認識された価値が「みる」スポーツによる潜在的な需要を喚起していること、またこれが興味喚起、メディア観戦意図、QOLといった結果変数との関係においてもっとも影響を与える要因であったことが明らかとなった。この意味は、前述したメディア特性との関連において、「みる」スポーツの価値が与える影響が大きくなっていることを実証した結果となっており、「今後はどのような媒体（メディア）で観戦することで、価値意識の認識にどのような違いが生じるのかという細分化によって議論を深めることが重要」（本間・松岡, 2017, p.30-31）



なことを示唆するものであったという。問題は、先にも述べたように、「みる」側がその価値の送り手にもなり得る状況の中で、何をどのように議論すべきかにある。まずは、その「問い」を立てることから始めなければならないであろう。

最後に、第2章の「本研究の限界と今後の研究課題」にも示されているように、本研究は個人の心理的な効用に問いかける価値評価尺度を構成したため、社会的価値の範囲が社会集団に対する意識を測るといふ、きわめて限定的な内容になっている。また、QOLに対してスポーツ観戦の価値が与える影響は、直接観戦における本質的価値( $\beta = .140$ )が5%水準で、間接観戦における手段的価値( $\beta = .215$ )が1%水準でそれぞれ有意に影響を与えていることが示された( $R^2 = .098$ )が、全体としては非常に小さいものであったという。しかしながら、性別や年齢別にみればその影響力の大きさの違いがさらに明確になってくるであろうし、質問紙以外の調査方法によっても多様な影響の仕方やその受けとめ方に対する性質の違いが明らかにされる可能性があるだろう。今回は質問項目を構成する際に、先行研究からの質問項目を基準としたため、今後は、我が国における「みる」スポーツの価値にみられる特性分析や、典型的な「みる」スポーツに価値をおく対象者の分析などを通した、社会的背景を考慮した多様な社会的価値に基づく質問項目も考慮されてよいように思われる。

### 3. 今後の研究課題と展望

以上、「みる」スポーツの価値意識研究を振り返ってみると、1年次では「みる」スポーツの価値を育てる学校体育における現状の貧困さを押さえつつ、その価値尺度を構成するための文献レビューにより、スポーツ観戦動機からみた5つの要素が見出された。そして、この5つを本質的価値(3つ)と手段的価値(2つ)とに分けてとらえた。また、資料編では、間接観戦による「みる」スポーツに重要な影響を与えるメディア研究の現状とメディア・テクノロジーの急速な発達によるその変化の可能性が示された。2年次と3年次の研究では、「みる」スポーツの価値尺度構成に向

けた内的整合性と妥当性を検証する予備的調査とそれに基づく本調査とが行われた。このような研究経緯からすれば、まずは、本研究の目的であった「みる」スポーツの価値尺度構成に関する一般化の第1段階は終えることができたとと言えるだろう。

しかしながら、1年次で研究レビューされた学校体育における「みる」スポーツ教育やメディア・スポーツ研究の現状に対して、この価値尺度がどのように援用され、どのような成果を上げることができるのかは、当然のことながら今後の課題である。特に、第3報では、間接観戦によるメディアの影響力は「みる」スポーツによる潜在的な需要喚起を促す価値を形成していることが明らかとなったことから、再度第1報でレビューされたメディア・スポーツ研究の現状と照らし合わせながら、その結果の考察を深めていく必要があるだろう。すなわち、従来の作り手から受け手への一方的な価値付与を前提とするのではなく、双方向、あるいは受け手からの価値形成が、メディア・テクノロジーの発達によってもはや可能となっていることを前提とした分析項目のさらなる検討が必要になってきているということである。その複雑な「みる」スポーツをめぐる相互作用的な価値形成が、どのような内容と方向性を持っているのかを探索するための尺度項目を考える必要がある。

次に、今回の調査ではあくまで観戦動機の心理的効用を出発点として個人的価値としての本質的価値と手段的価値が見出され、これとは別に社会的価値が概念構成されている。一般的な尺度構成をめざす立場から、あえて戦略的にこのような概念構成に基づく尺度項目が設定されたことは理解しつつも、今後において「みる」スポーツの価値形成の望ましさをどのように導いていくのかを課題とすれば、個人的価値尺度と社会的価値尺度の関連性や相関関係を視野に入れた多面的な因子構成やその尺度項目の開発が検討されなければならないように思われる。「みる」スポーツの価値意識研究の目的の1つは、その面白さや楽しさといったところから始まって、それがどのような望ましい社会的価値の方向性につながっていくのか

を明らかにしようとする問題意識が重要だと考えるからである。この問題意識は、冒頭で述べた社会にとってむしろ脅威にもなりかねない「みる」スポーツの負の価値を生み出す危険性を踏まえて、その経済的価値や政治的価値等といった外在的・手段的価値のあり様を考えていくことにつながっている。

このような観点から、第3報においてスポーツ観戦が個人のQOLに与える影響が総じてそれほど高くない結果であったことをどのように考えるべきなのかについては、さらに検討の余地があるように思われる。ここでは、その尺度項目が明示されていないので何とも言えないが、これは、「する」スポーツの調査結果にみられたプレイ欲求を中核とする本質的価値が、スポーツ実施意欲やQOLに影響を及ぼさないとする結果と類似しているようにも思われる。中西(2017)の総括的な考察によれば、「現代社会においてもはや、スポーツには『プレイ欲求充足』以上のコア・バリューがあるのか、それともスポーツの外在的価値の方が日本人にとっては有効なのか」(p.47)という問いが投げかけられ、このような研究課題への挑戦が求められているとしている。

「みる」スポーツにおいても、同様な研究課題への挑戦が求められていると言えるだろう。したがって、現段階においてその答えは容易に出せるものではないが、1つの問いとしては、我々が本質的な「価値」と考えてきた内容は、果たして日本人にとって手段的価値と考える「価値」と同様な「価値」として受けとめられているのかどうか、あるいはそのような効用や影響力を持つものとして血肉化=エートス化されている(されてきた)のかどうか、ということがあげられるのではないだろうか。英語で「本質的価値」とは“intrinsic value”，すなわち「内在化」されエートス化された価値(いわば、手段的・道具的な価値基準からみれば価値としてさえ認識されないような「無価値」な価値)であり、これがあらゆる外在化された価値の原点となっているという意味である。したがって、ホイジンガ(1973, p.15)は、そのような意味において「遊びは文化よりも古い」と述べたのである。

日本人のスポーツ経験は、特に明治期以降の近代化の過程において現在もなお、スポーツを教育の手段として扱ってきた体育におけるスポーツ経験がほとんどであろう。そこでは、「する」や「みる」へのスポーツ動機を外在的な価値と結びつけ、その「楽しさ」や「面白さ」とは別に、当該社会に受け入れられる動機の外在性(ガース&ミルズ, 1971, p.142)によって自らの価値意識を内外に表明しようとする教育を行うのではなかろうか。動機の外在性とは、何かができないことの理由に「時間がない」ことを挙げたり、スポーツをする理由が本当は楽しいことにもかかわらず「健康のため」といった手段的価値に代えて表明したりするなど、行為の社会的正当化(あるいは、教育的正当化)をあらかじめ想定した動機の表明のことである(菊, 1999, pp.8-10)。つまり、我々日本人のスポーツ経験の社会的な、あるいは教育的な正当化が、「する」を中心とした手段的価値によって構成されているところに大きな問題が潜んでいるとも考えられるのだ。「する」にしる「みる」にしる、その行為の社会的正当性が「楽しさ」や「面白さ」にあることを<個人-社会>のレベルで文化的に享受され、教育においてもこれを積極的に正当化し、評価するようになったとき、回り道をしなくてもよい両者の相関関係が実証的に明示されるように思われるのである。

だとすれば、「みる」スポーツの本質的価値は、「地球村の大運動会」(天野, 2012)と呼ばれるオリンピック大会の社会現象にすでに現れていると言っても過言ではないだろう。例えば、この世界にはさまざまな宗教が存在し、ときには敵対し合う関係を作り、敵対する相手の文化物を破壊する行為まで行っている。しかし、「みる」スポーツは、そのような敵対関係を超えてすべての人々がスポーツの勝敗に一喜一憂し、その中から人生にとっての意味や価値を多様に感じ、学ぶ機会を与えられる、まさにグローバルなかかわり合いと価値創造の機会を可能にしている(菊, 2017, p.80)、と言えるのではなかろうか。つまり、「みる」スポーツの文化的享受のあり様をその価値尺度によって明らかにしようとする研究は、メディア社会におけるスポーツのコア・メッセージの重

要な発信源として、「みる」スポーツの望ましい価値形成の過程を明らかにすることを求められているのである。

佐伯(1996, pp.209-210)は、このような意味から、「みる」スポーツ文化を向上させる意図的・計画的な働きかけが必要であるとして、次のような3つの方向性を示唆している。

- ①「みる」スポーツを正當に位置づける我が国スポーツ文化全体の再構成
- ②スポーツの知的・感性的享受としての「みる」スポーツ享受の開発
- ③「みる」スポーツをめぐる私生活課題と公的生活課題の統合化

①は、「する」スポーツの価値と同等に「みる」スポーツの価値を位置づけ、両者の相互作用によってスポーツの文化的享受がより望ましいものとなるようにスポーツ文化全体を再構成する方向性である。

②は、「みる」スポーツ文化の質(クオリティ)を単なる刹那的な興奮や欲求不満の代償に止めたり、あるいは経済的、政治的な目的の道具的手段として評価したりするのではなく、人間の可能性に挑戦する崇高な競技者やチームに対する深い洞察と共感、感動の共有によって、自らの知性や感性の可能性を開発し、享受するものとしてとらえる方向性である。これは、言い換えれば、スポーツを「みる」行為がいかにか他の音楽や芸術のような文化と同様に、独立した「鑑賞」の域に高められるのかを問うものであろう。

③は、こうした「みる」スポーツの文化的享受が、人々の個人的価値に対応する私生活課題を解決するだけでなく、市民社会や地域生活の充実と活性化という共通の社会的価値に対応し、地域アイデンティティの創造にいかにか統合させていくことができるのかを考える方向性である。ここでは、「みる」スポーツの個人的価値と社会的価値との相関関係について、生活課題の「統合化」という視点から、特に後者の社会的価値をめぐる尺度項目の内容と因子の再構成が検討される必要があるように思われる。

このように考えてみると、「みる」スポーツの価値意識尺度を構成する目的は、スポーツ文化全

体を考える上でも、また当該社会とスポーツ文化のあり様を相互の問題として考えていく上でも、きわめて重要な意義を有していることが理解できよう。今後、本研究において明らかとなった価値意識尺度を出発点としてさらに幅広い調査研究が積み重ねられ、上記①～③の方向性に沿った内容と構成に向けて改良を加えていくことで、「みる」スポーツ価値意識研究の新たな展望が拓かれていくことが大いに期待される。

## 文 献

- 天野祐吉(2012) CM天気図 地球村の大運動会. 朝日新聞朝刊2012年8月1日付.
- 醍醐笑部(2015)資料編 日本のメディアにおけるスポーツ価値・価値意識に関する文献レビュー. 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会,平成26年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第1報-」, pp.92-96.
- エリアス<大平章訳>(1995) 社会学的問題としてのスポーツの発生. エリアス&ダニング, スポーツと文明化. 法政大学出版局, pp.181-216.
- ガース&ミルズ(1971) 性格と社会構造. 青木書店.
- ホイジンガ<高橋英夫訳>(1973) ホモ・ルーデンス. 中央公論新社(中公文庫).
- 本間崇教・松岡宏高(2016)みるスポーツの価値意識評価尺度の開発. 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会,平成27年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第2報-」, pp.13-25.
- 本間崇教・松岡宏高(2017)みるスポーツの価値意識に関する研究. 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会,平成29年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第3報-」, pp.24-32.
- 菊幸一(1993)「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学. 不昧堂出版.
- 菊幸一(1999)「時間がない!」のナゾ. みんな

- のスポーツ, 21(3) : 8-10.
- 菊幸一 (2017) スポーツ組織の公共性と自立性からみた課題と展望. 体育・スポーツ経営学研究, 30(1) : 65-81.
- 菊幸一・茂木宏子・功刀梢 (2015) 体育・スポーツ社会学からみたスポーツ価値意識研究の現状と課題. 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会, 平成26年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第1報-」, pp.5-31.
- 松岡宏高・醍醐笑部・本間崇教・青木雅晃 (2015) みるスポーツの価値に関するレビュー. 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会, 平成26年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第1報-」, pp.67-81.
- 望月拓実 (2015) 学校体育における「みる」「支える」に関する内容分析. 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会, 平成26年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第1報-」, pp.61-66.
- 森昭三・佐伯年詩雄ほか (2017) 中学保健体育. 学研教育みらい.
- 中西純司 (2017). 公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会, 平成29年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発-第3報-」, pp.40-47.
- 佐伯聰夫 (1996) 「みるスポーツ」文化の向上. 文部省競技スポーツ研究会編, 「みるスポーツ」の振興. ベースボールマガジン社, pp.206-210.
- 和唐正勝・高橋健夫ほか (2017) 現代高等保健体育. 大修館書店.

## 第6章 ささえるスポーツの価値意識に関する研究のまとめと今後の研究課題

藤田 雅文<sup>1)</sup>

### 1. スポーツを「ささえる」とは

様々なスポーツイベントの空間における人々を区分すると、スポーツを「する」競技者、その競技を「みる」観戦者、そして、競技をジャッジする審判員、競技者の指導者、スポーツイベントを運営する競技団体と行政組織のスタッフ、ボランティアスタッフが存在する。後者の審判員、指導者、運営スタッフの行為が、スポーツを「ささえる」という言葉に集約されるのである。

アマチュアのスポーツイベントの場合、審判員を除いて、スポーツを「ささえる」人々に労務に見合った金銭的報酬が与えられることはほとんどない。一般的には、スタッフとしての軽装なユニフォームと昼弁当が提供されるだけである。

では、なぜ彼らは金銭的報酬なしで、早朝から奉仕を行ってくれるのであろうか。その理由として、スポーツを「ささえる」人々は、スポーツイベントに関わることで、何らかの喜びを感じているからであると推察される。

### 2. ささえるスポーツの価値意識の研究結果

3カ年を通して、スポーツを「ささえる」人々の価値意識を調査研究した結果、「学習」「自己改革」「社交」「社会的義務」「キャリア」「地域奉仕」「能力・経験活用」と命名された7因子30項目が精査された。

人生の幸福感を尺度とする「クオリティ・オブ・ライフ」(quality of life, QOL) との関係では、「自己改革」が最も強い規定力を有しており、「地域奉仕」「能力・経験活用」も有意な規定要因であることが確認された。

スポーツを「ささえる」人々は、その行為によって、新たな発見や楽しさを感じ、自己の成長を

実感し、充実感を味わっているのである。また、自分が居住する地域のために役立てたという自己有用感(自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚)を育み、自分の知識・経験・能力を発揮できたという「自己実現欲求」の充足感を得ているのである。

換言すれば、スポーツを「ささえる」人々は、その行為によって、様々な内的報酬を得ており、さらに、それらの内的報酬によって、スポーツを「ささえる」人々のQOLを高めているという連鎖現象を確認できたのである。

### 3. 今後の研究課題

本調査の回答者には、日常的なクラブ・団体ボランティアと非日常的なイベント・ボランティアが混在しており、スポーツを指導した(している)者と運営業務のみを担当した者も混在している。また、年齢も20歳~24歳から60歳以上と幅広く、結果的に男性が7割を占めていたことが特徴的であった。

「東京2020大会に向けたボランティア戦略」(東京都, 2016)では、競技会場、選手村などの大会関係施設で活動する「大会ボランティア」と、空港・主要駅・観光地及び競技会場の最寄駅周辺で活動する「都市ボランティア」が、合計9万人以上必要であると想定している。

また、2019年にはラグビーワールドカップ日本大会、2021年には関西ワールドマスタースゲームズも開催される。このような国際大会で活動するボランティアスタッフをいかに確保し、どのようにして適材適所に配置し、どのような研修を行うのか等、ボランティアマネジメントの課題解決に向けての研究、さらには、非日常的なイベント・ボランティアのみに研究対象を焦点化し、年齢・性別・資質の属性によって、ささえるスポーツの価値意識に相違があるのか、彼らが抱く期待に対

1) 鳴門教育大学

して、どのような活動を提供すれば「自己変革」  
をもたらすことができるのか等についての研究を  
今後は行っていく必要があると考える。

# ま と め

木村 和彦<sup>1)</sup>

## 1. 研究成果のまとめ

第1報において、本プロジェクト研究の目的は以下のように述べられている。

「スポーツ基本法（2011）制定以来、国レベルではスポーツ基本計画（2012）が策定され、日本体育協会においても「スポーツ宣言日本」が採択された。そこには21世紀における新たなスポーツの理念、価値や目的が唱道されている。これまでもスポーツの価値（価値観、価値意識）については、スポーツ社会学や心理学、経営学等において数多くの実証的な研究が行われてきた。しかしこれまでの研究が対象としてきたスポーツは、「するスポーツ」や一部の競技者に限定的であり、スポーツ基本法を始めとした新たなスポーツ諸政策におけるスポーツの価値とは必ずしも一致していない。例えば「みるスポーツ」や「まちづくり」、「国際交流」といった視点からの議論は、従来のスポーツの価値に関する実証的研究には包含されていない。そこで本研究プロジェクトでは、21世紀の新たなスポーツの価値論に基づき、実証的なレベルで研究のツールとなる「スポーツ価値意識評価尺度」を開発し、日本人のスポーツ価値意識に影響を与える要因を探るとともに、国際比較研究を行う（第1報再掲）。」

3年間の研究の結果、スポーツ価値意識研究のスタートとなり、研究に必要な共通のプラットフォームとなり、一定の統計学的な妥当性と信頼性を担保した「スポーツ価値意識評価尺度（通常版、簡易版）」を開発することができた。またスポーツ価値意識とスポーツ参加に関する諸要因やQOLとの関係を分析し、スポーツ価値意識評価尺度の分析ツールとしての一定の有用性を示すことができた。しかし、当初予定していた、スポーツ価値意識の先行要因や影響要因を明らかにする

ことや、国際比較研究は未実施のままである。前者については、3年目に実施した本調査において、性別や年齢など人口統計学的要因やスポーツ実施および観戦頻度のデータを同時に収集しているので、それらを先行要因とした追加的分析は可能である。国際比較研究については、オーストラリアと中国との共同研究に向けた取り組みがスタートしているが、スポーツ価値意識評価尺度の各国言語版の作成、具体的調査計画については今後の課題である。

## 2. 今後の研究課題

### ①スポーツ価値意識に関する基礎研究の継続

中西（第4章）、菊（第5章）が指摘しているように、「する」「みる」「支える」個別の価値意識評価尺度についてはスタート地点に立つことができたが、個人的価値（individual value）と社会的価値（social value）、本質的価値（intrinsic value）と手段的価値（instrumental value）など、価値意識間の関係とダイナミズムに関する研究を通じて、幅広い調査研究を継続、蓄積していくことによって、スポーツ価値意識の構造や具体的な評価尺度を洗練していく必要がある。

また今回の研究では、当初想定していたスポーツ文化の制度的価値（institutional value）にアプローチすることはできなかった。ただし「する」や「みる」スポーツの社会的価値意識や「支える」スポーツの価値意識が、わが国のスポーツ制度を構成するスポーツ行政やスポーツ団体（指導者を含む）、学校体育の評価（価値）と大いに関係していることが予想される。今後の研究課題としたい。

### ②スポーツ価値意識評価尺度を援用した応用研究

一つは、スポーツの価値意識に関する国際比較研究である。スポーツ価値意識は、人々のスポーツ参加（する、みる、支える等）を方向づけるものである。各国のスポーツ参加の実態を説明する

1) 早稲田大学

別表 スポーツ価値意識評価尺度（通常版）の構成（再掲）

参与形態 価値レベル	するスポーツ N = 1030		みるスポーツ N = 1030		支えるスポーツ N = 618 (スポーツボランティア経験者)
	個人的価値	社会的価値	個人的価値	社会的価値	
本質的価値	1 因子 ・プレイ欲求充足 (3項目)	4 因子 ・社会生活向上 ・経済 ・国際 ・教育 (17項目)	3 因子 ・代理達成 ・ドラマ ・パフォーマンス (8項目)	1 因子 ・集団的アイデンティティ (6項目)	7 因子 ・学習 ・自己改革 ・社交 ・社会的義務 ・キャリア ・地域奉仕 ・能力・経験活用 (30項目)
手段的価値	5 因子 ・健康体力づくり ・医療 ・心理的健康 ・発達 ・社交 (15項目)		2 因子 ・社交 ・逃避 (4項目)		

要因をスポーツ価値意識から解明する。それらが各国のスポーツに係わる制度や教育制度とどのように関係しているのかを明らかにすることは、わが国におけるこれからのスポーツ制度や教育制度のあり様を考える上での重要な情報を提供してくれるだろう。

二つ目は、オリンピックなどメガ・スポーツイベントのスポーツ価値意識への影響研究である。わが国でも、2019、2020と国際的なメガ・スポーツイベントの開催が予定されている。そこでは、施設建設やインフラ整備、開催運営などに巨額の公費が投入されることになる。とりわけ低い経済成長、人口減少下にあるわが国では、公費投入に

見合った成果（効率）が厳しく問われることになる。その場合、施設やインフラなどのハードだけでなく、ソフト・レガシーとしてのスポーツ文化の発展、その基盤となるスポーツ価値意識の高揚への影響を評価することはイベントの成果として（主催者の納税者に対する説明責任として）重要になると考えるからである。このようなスポーツイベントのソフト・レガシーの評価尺度として、スポーツ価値意識評価尺度は実践的な有用性を有しているといえよう。そのためにスポーツ価値意識評価尺度（通常版）にもとづいて、因子構成を変えずに、調査項目数だけを約半減したスポーツ価値意識評価尺度（簡易版）を提案した。



<資料1>

スポーツ価値意識評価尺度 (通常版)

スポーツをすることは、あなたにとってどのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

※本調査でいう「する」スポーツとは、野球やサッカーなどの競技のほか、軽い体操や散歩・ウォーキングなど、  
意図的に行う運動であり、通勤や家事などに伴い必要になる運動は含まない。

	強くそう思う						まったくそう 思わない	
1 体力を向上させることができる	1	2	3	4	5	6	7	
2 人間関係を改善することができる	1	2	3	4	5	6	7	
3 体型の維持・改善につながる	1	2	3	4	5	6	7	
4 目標を達成することに夢中になることが面白い	1	2	3	4	5	6	7	
5 病気を予防することができる	1	2	3	4	5	6	7	
6 ストレスの発散ができる	1	2	3	4	5	6	7	
7 できなかったことができるようになることが面白い	1	2	3	4	5	6	7	
8 病気の治療に役立つ	1	2	3	4	5	6	7	
9 社会的なマナーを身につけることができる	1	2	3	4	5	6	7	
10 体力を維持することができる	1	2	3	4	5	6	7	
11 新たな人との出会いの機会になる	1	2	3	4	5	6	7	
12 不安やイライラを解消することに役立つ	1	2	3	4	5	6	7	
13 協調性を養うことができる	1	2	3	4	5	6	7	
14 競争に夢中になることが面白い	1	2	3	4	5	6	7	
15 仲間と一緒に時間を過ごすことができる	1	2	3	4	5	6	7	
16 肥満の解消につながる	1	2	3	4	5	6	7	
17 思いやりのある人間になることができる	1	2	3	4	5	6	7	
18 日々のプレッシャーから解放される	1	2	3	4	5	6	7	

スポーツをすることは、地域住民や国民にとってどのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

	強くそう思う						まったくそう 思わない	
1 地域住民や国民における国際交流の機会を創出する	1	2	3	4	5	6	7	
2 地域や国における産業の発展に役立つ	1	2	3	4	5	6	7	
3 地域活動への参加が促進される	1	2	3	4	5	6	7	
4 地域住民や国民における家族の絆を深めることができる	1	2	3	4	5	6	7	
5 地域住民や国民の豊かな心を養うことができる	1	2	3	4	5	6	7	
6 地域や国の教育力を再構築できる	1	2	3	4	5	6	7	
7 地域や国におけるリーダーの育成に役立つ	1	2	3	4	5	6	7	
8 地域コミュニティ再生に役立つ	1	2	3	4	5	6	7	
9 地域住民や国民の異文化理解につながる	1	2	3	4	5	6	7	
10 地域住民や国民の生活に張りが出る	1	2	3	4	5	6	7	
11 地域や国が国際貢献をする機会を創出する	1	2	3	4	5	6	7	
12 地域や国における医療費の抑制につながる	1	2	3	4	5	6	7	
13 地域住民や国民の生涯学習につながる	1	2	3	4	5	6	7	
14 地域住民や国民の仲間を作る機会を創出する	1	2	3	4	5	6	7	
15 地域住民や国民が高齢者や障害者と触れ合う機会を創出する	1	2	3	4	5	6	7	
16 地域や国における子どもの生きる力を育成する	1	2	3	4	5	6	7	
17 地域や国における新しい観光誘致に役立つ	1	2	3	4	5	6	7	

スポーツをみることは、あなたにとってどのような価値があると思いますか？  
 それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

スタジアムまたはアリーナでみる場合

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 人と交流する機会になる	1	2	3	4	5	6	7
2 大勢で一緒に時間を過ごすことができる	1	2	3	4	5	6	7
3 応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
4 応援する選手やチームの成功が、自分のことのように思える	1	2	3	4	5	6	7
5 日々の決まった活動に大きな変化をもたらす	1	2	3	4	5	6	7
6 日常生活の問題から一時的に逃れることができる	1	2	3	4	5	6	7
7 接戦が繰り返されると、緊張感を味わうことができる	1	2	3	4	5	6	7
8 思いもよらない試合展開に驚かされる	1	2	3	4	5	6	7
9 ハイレベルなプレーや演技をみることができる	1	2	3	4	5	6	7
10 スポーツがもつ美しさ、優美さを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
11 高い身体能力を目の当たりにすることができる	1	2	3	4	5	6	7
12 観戦しているスポーツに関する知識を増やすことができる	1	2	3	4	5	6	7

テレビやインターネットなどのメディアを通してみる場合（パブリックビューイングは除く）

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 人と交流する機会になる	1	2	3	4	5	6	7
2 大勢で一緒に時間を過ごすことができる	1	2	3	4	5	6	7
3 応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
4 応援する選手やチームの成功が、自分のことのように思える	1	2	3	4	5	6	7
5 日々の決まった活動に大きな変化をもたらす	1	2	3	4	5	6	7
6 日常生活の問題から一時的に逃れることができる	1	2	3	4	5	6	7
7 接戦が繰り返されると、緊張感を味わうことができる	1	2	3	4	5	6	7
8 思いもよらない試合展開に驚かされる	1	2	3	4	5	6	7
9 ハイレベルなプレーや演技をみることができる	1	2	3	4	5	6	7
10 スポーツがもつ美しさ、優美さを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
11 高い身体能力を目の当たりにすることができる	1	2	3	4	5	6	7
12 観戦しているスポーツに関する知識を増やすことができる	1	2	3	4	5	6	7

スポーツをみることは、地域住民や国民にとってどのような価値があると思いますか？  
 それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

スタジアムまたはアリーナでみる場合

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 地元地域や国に思い入れを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
2 地元地域や国の人々に親近感を持つことができる	1	2	3	4	5	6	7
3 地元地域や国の人々と共通点があると感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
4 地元地域や国の人々と目標、考えや意見を共有することができる	1	2	3	4	5	6	7
5 地元地域や国の一員であることを実感することができる	1	2	3	4	5	6	7
6 地元地域や国の一員でよかったと思うことができる	1	2	3	4	5	6	7

テレビやインターネットなどのメディアを通してみる場合（パブリックビューイングは除く）

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 地元地域や国に思い入れを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
2 地元地域や国の人々に親近感を持つことができる	1	2	3	4	5	6	7

3	地元地域や国の人々と共通点があると感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
4	地元地域や国の人々と目標、考えや意見を共有することができる	1	2	3	4	5	6	7
5	地元地域や国の一員であることを実感することができる	1	2	3	4	5	6	7
6	地元地域や国の一員でよかったと思うことができる	1	2	3	4	5	6	7

下記の①または②のような、スポーツを支える活動（ボランティア）を行うことは、どのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

※スポーツを支える活動とは、①報酬を目的とすることなく、地域のスポーツクラブやスポーツ団体において、自分から進んで日常的に運営や指導活動を支えること  
または②報酬を目的とすることなく、全国レベルあるいは国際的なスポーツ大会などにおいて、自分から進んで運営や活動を支援すること

		強くそう思う						まったくそう 思わない
1	新しい技能を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
2	何か新しい発見ができる	1	2	3	4	5	6	7
3	さまざまな人々と交流を深めることができる	1	2	3	4	5	6	7
4	人のために役立つことができる	1	2	3	4	5	6	7
5	現在や将来の仕事に役立てることができる	1	2	3	4	5	6	7
6	地元へのアピールができる	1	2	3	4	5	6	7
7	過去の仕事やボランティアでの経験を活かすことができる	1	2	3	4	5	6	7
8	能力を高めることができる	1	2	3	4	5	6	7
9	自分を変えるきっかけにすることができる	1	2	3	4	5	6	7
10	同じボランティア精神を持った仲間と出会うことができる	1	2	3	4	5	6	7
11	社会に奉仕できる	1	2	3	4	5	6	7
12	現在または将来の自分の仕事のために経験を積むことができる	1	2	3	4	5	6	7
13	地域社会へ貢献することができる	1	2	3	4	5	6	7
14	自分の能力（専門的能力や語学力など）を活用することができる	1	2	3	4	5	6	7
15	視野を広げることができる	1	2	3	4	5	6	7
16	自分が成長し、向上できる	1	2	3	4	5	6	7
17	多くの人と出会うことができる	1	2	3	4	5	6	7
18	社会還元的な活動をすることができる	1	2	3	4	5	6	7
19	現在の仕事や将来の就職のために役立つ能力を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
20	地元のために役立つことができる	1	2	3	4	5	6	7
21	自分の持っている知識を活かすことができる	1	2	3	4	5	6	7
22	新しい知識を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
23	自分の生活を充実させつことができる	1	2	3	4	5	6	7
24	さまざまな人々と協力して仕事ができる	1	2	3	4	5	6	7
25	人からの親切にボランティアという形で恩返しできる	1	2	3	4	5	6	7
26	さまざまな分野・職種の人びとと接することで、現在や将来の仕事に役立てることができる	1	2	3	4	5	6	7
27	単調な日常生活を変えることができる	1	2	3	4	5	6	7
28	同じ志をもった人達と目的を達成して喜びを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
29	現在や将来のために自分の能力を試す良い機会とすることができる	1	2	3	4	5	6	7
30	楽しみを見出すことができる	1	2	3	4	5	6	7

<資料2>

スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）

スポーツをすることは、あなたにとってどのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

※本調査でいう「する」スポーツとは、野球やサッカーなどの競技のほか、軽い体操や散歩・ウォーキングなど、意図的に行う運動であり、通勤や家事などに伴い必要になる運動は含まない。

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 体力を向上させることができる	1	2	3	4	5	6	7
2 人間関係を改善することができる	1	2	3	4	5	6	7
3 体型の維持・改善につながる	1	2	3	4	5	6	7
4 目標を達成することに夢中になることが面白い	1	2	3	4	5	6	7
5 病気を予防することができる	1	2	3	4	5	6	7
6 ストレスの発散ができる	1	2	3	4	5	6	7
7 できなかったことができるようになることが面白い	1	2	3	4	5	6	7
8 病気の治療に役立つ	1	2	3	4	5	6	7
9 社会的なマナーを身につけることができる	1	2	3	4	5	6	7
10 新たな人との出会いの機会になる	1	2	3	4	5	6	7
11 不安やイライラを解消することに役立つ	1	2	3	4	5	6	7
12 協調性を養うことができる	1	2	3	4	5	6	7

スポーツをすることは、地域住民や国民にとってどのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 地域住民や国民における国際交流の機会を創出する	1	2	3	4	5	6	7
2 地域や国における産業の発展に役立つ	1	2	3	4	5	6	7
3 地域住民や国民における家族の絆を深めることができる	1	2	3	4	5	6	7
4 地域住民や国民の豊かな心を養うことができる	1	2	3	4	5	6	7
5 地域や国におけるリーダーの育成に役立つ	1	2	3	4	5	6	7
6 地域住民や国民の異文化理解につながる	1	2	3	4	5	6	7
7 地域住民や国民の生活に張りが出る	1	2	3	4	5	6	7
8 地域住民や国民の生涯学習につながる	1	2	3	4	5	6	7
9 地域住民や国民の仲間を作る機会を創出する	1	2	3	4	5	6	7
10 地域や国における新しい観光誘致に役立つ	1	2	3	4	5	6	7

スポーツをみることは、あなたにとってどのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

スタジアムまたはアリーナでみる場合

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 人と交流する機会になる	1	2	3	4	5	6	7
2 応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
3 日々の決まった活動に大きな変化をもたらす	1	2	3	4	5	6	7
4 接戦が繰り上げられると、緊張感を味わうことができる	1	2	3	4	5	6	7
5 ハイレベルなプレーや演技をみることができる	1	2	3	4	5	6	7
6 スポーツがもつ美しさ、優美さを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7

テレビやインターネットなどのメディアを通してみる場合（パブリックビューイングは除く）

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 人と交流する機会になる	1	2	3	4	5	6	7
2 応援する選手やチームが勝つと達成感を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
3 日々の決まった活動に大きな変化をもたらす	1	2	3	4	5	6	7
4 接戦が繰り広げられると、緊張感を味わうことができる	1	2	3	4	5	6	7
5 ハイレベルなプレーや演技をみることができる	1	2	3	4	5	6	7
6 スポーツがもつ美しさ、優美さを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7

スポーツをみることは、**地域住民や国民にとって**どのような価値があると思いますか？

それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

スタジアムまたはアリーナでみる場合

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 地元地域や国に思い入れを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
2 地元地域や国の人々に親近感を持つことができる	1	2	3	4	5	6	7
3 地元地域や国の人々と共通点があると感じることができる	1	2	3	4	5	6	7

テレビやインターネットなどのメディアを通してみる場合（パブリックビューイングは除く）

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 地元地域や国に思い入れを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
2 地元地域や国の人々に親近感を持つことができる	1	2	3	4	5	6	7
3 地元地域や国の人々と共通点があると感じることができる	1	2	3	4	5	6	7

下記の①または②のような、スポーツを支える活動（ボランティア）を行うことは、どのような価値があると思いますか？  
それぞれの項目について、「1. 強くそう思う」から、「7. まったくそう思わない」まで、あてはまるものをお選びください。

※スポーツを支える活動とは、①報酬を目的とすることなく、地域のスポーツクラブやスポーツ団体において、自分から進んで日常的に運営や指導活動を支えること

または②報酬を目的とすることなく、全国レベルあるいは国際的なスポーツ大会などにおいて、自分から進んで運営や活動を支援すること

	強くそう思う						まったくそう 思わない
1 新しい技能を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
2 地域社会へ貢献することができる	1	2	3	4	5	6	7
3 自分の能力（専門的能力や語学力など）を活用することができる	1	2	3	4	5	6	7
4 自分が成長し、向上できる	1	2	3	4	5	6	7
5 多くの人と出会うことができる	1	2	3	4	5	6	7
6 社会還元的な活動をすることができる	1	2	3	4	5	6	7
7 現在の仕事や将来の就職のために役立つ能力を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
8 地元のために役立つことができる	1	2	3	4	5	6	7
9 自分の持っている知識を活かすことができる	1	2	3	4	5	6	7
10 新しい知識を得ることができる	1	2	3	4	5	6	7
11 自分の生活を充実させつことができる	1	2	3	4	5	6	7
12 人からの親切にボランティアという形で恩返しできる	1	2	3	4	5	6	7
13 同じ志を持った人達と目的を達成して喜びを感じることができる	1	2	3	4	5	6	7
14 現在や将来のために自分の能力を試す良い機会とすることができる	1	2	3	4	5	6	7
15 楽しみを見出すことができる	1	2	3	4	5	6	7

---

平成 28 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I

新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発

－第 3 報－

◎発行日：平成 29 年 3 月 31 日

◎編集者：木村 和彦（新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発－スポーツ政策等に  
おけるスポーツの理念・価値・目的論を踏まえて－研究班長）

◎発行者：公益財団法人日本体育協会 <http://www.japan-sports.or.jp>

（〒 150-8050 東京都渋谷区神南 1 - 1 - 1）

◎印刷：ホクエツ印刷株式会社 <http://hokuetsup.co.jp>

（〒 135-0033 東京都江東区深川 2 - 26 - 7）

---